賜に徒聖てめし識と神
び及富の榮の業の所る

ず論を係干のこ死のトスリキと生降

然と我には唯われらの主イエス
キリストの十字架の外に誇る所
なからんことを願ふ

（加六〇十四）

蓋われイエスキリストと彼の十
字架に釘られし事の外は爾曾の
中に在て何をも知まじと意を定
めたれば也

（哥前二〇二）

降生とキリストの死との關係

第一　人の願望に對する目的者は神自己なり

解拆――人を造り玉へる神は人間一切の需要に對して供給の道を設け玉ひ、而して人の心情を賦與し、惟り神のみ此心情を十分滿足する樣之を造り玉へり、されば吾人の需要を知り玉ふ神は、吾人をして神と交通親接せしめんとは爲し玉ふ、神がアブラハムに授けんと約し玉へる絶大の賚とは卽ち自己のことを謂ふものなりと自ら宣言し玉ふ、人間一切の正善なる願望を充分、無限に滿足すべき永生とは、唯一の眞神及其遣し玉へるイエス、キリストを知るに在りと主は言ひ玉へり、主が人に與へんと約し玉ふ祝福の中にて、主の最も豐富十全と思惟し玉ふものは、自己を與へて其弟子と俱に居り、自ら弟子の裏に居り又弟子と共に居らんとの申出に在り、主が此く自己を與へんとの申出を爲し玉ふや、自ら聖靈を遣し且自ら父の裏に在りて己を與へんといひ玉ふなり、一言にて謂へば、彼は父、子、聖靈なる神として自己を其弟子に與へんと申出玉ふなり。

第二　神は其願望を人に寓せ玉ふ(甲)

解拆――神は愛として啓示せらるゝしかして愛を滿足するものは唯愛のみなり、萬類の中にて神の愛を滿足するに最も適せるものは人なり、吾人が此く信ずるは左の理由あるによる。

(イ)人は神の造り玉ひし人間外一切の者を支配せんが爲に造られたるものにして、天使よりも一層高尚なる運命を有するものなり、さらば人は成長、發達に對して最大の器量を有す。

(ロ)神にして又人、しかも二者にあらずして一品位に合一せられたる主イエスに合じて一と水れる人は、他の被造者が有し得べしと思はれざる一種の近接を神に對して有す。

(ハ)此く神に近接するが爲め、人は道義上、靈性上神に倣るものとゆな、然り而して神は愛なるが故に、萬類に勝りて神に最も近接し之を仰視する人は愛に於ても他に勝りて最も神に似るものとなるの命運を有す、再言せば神の愛に充分對應することを得べし。

第三　神は其願望を人に寓せ玉ふ(乙)

解拆――神は人の愛を受けんと切望することを明言して恥ぢ玉はず、神は己を愛し、己に順ふの民を稱して其業若くは嗣業といひ玉ふ、神は眞正のシオン即ち公會を望み玉ひ、靈によりて神の聖居につきて曰ひ玉はく、是れ我永へに住むべき安居の所なりと、主は贖はれたる人を以て寶となし、高價の眞珠と爲し玉ふ。

神が其願望を人に寓せ玉ふは、人がキリストに在りて神の子と爲ることを得るが爲なり。

(イ)神は父として子供の愛を慕ひ玉ふ。

(ロ)キリストは神子として、子たるもの、愛を充分發揮して神に對應し玉ふ。

(ハ)しかしてキリストに在りて神の嗣子と爲れるものは此子即イエスキリストの靈を受くることを得るなり。

(ニ)キリスト、葬はれて神の子となれる者の衷に住み、自ら神に對して有し玉へる孝順の精神を之に傳へ、之をして衷心より「アバ父」と呼ばしむるを得玉ふ、吾人獨生子と同じく孝順の精神を神に對して有せんには、神の子となるを得るが故に、

神は主イエスを愛し玉ふ如く吾人をも愛し玉ふなり(加拉太書四〇四―七。約十七〇廿三)。

第四　神は人に關する其永遠の經綸を吾人に示し玉ふ(甲)。

解説――神が其永遠の經綸を吾人に啓示して不可なしとし、吾人に啓示し玉へるものなる以上は、之を了解せんと務むるは吾人の義務なり、神此かる經綸を示して曰ひ玉はく。

(一)人を造らんとの思想は世界開闢の前に存せり。

(二)神のキリスト即ち其子の降生せるもの在らしめんとの思想は、人を造らんとの思想と全じく永遠の昔に存せりと、是れなり。

何となれば聖書に據るに、吾人は開闢の前既にキリストに在りて擇はれたるもの、若くはキリストに在りて永生を受けたるものなればなり、もし吾人の擇はるゝことにして此の如けんか、降生といふ思想は少くとも吾人の創造といふ思想と同時ならざるべからざればなり。

讀者よじ口に發せざるも其心中に一個の難問を有せん、曰く、吾人が斯く開闢以前にキリストに在りて撰はるゝといふは、神性のみを有する神子のことをいふものにして、神子降生の目的が永遠の昔に存せりとの意を含むものにあらざるべしと、吾人は之に答へて左の如く曰はんとす。

(イ)キリストなる命辭は聖書中降生以前の神子に對して使用せらるゝは吾人の許すところなり、例せば、聖徒ペテロ舊約時代の預言者によりて語り玉ひし靈をキリストの靈と稱するが如し(彼前一〇十、十一)。

(ロ)然れども降生以前の神子がキリストと稱せらるゝは、其名稱の何たるにせよ、其指すところはその品位にして、品位に至りては、降生以前にせよ、降生以後にせよ、同一なるが故なり、人なるイエスキリストは永遠の昔より存在し玉ふ神子と同一の品位を有し玉ふ。

(ハ)さりながらキリストなる命辭の人なるイエスに適用せらるゝものなることは吾人の尤もよく知るところにして、該命辭がたゞ神性のみを有する神子に適用せらるゝとは中々に考へぬ程なり、されば降生以前の神子がキリストと稱せらるゝ

とあらんか、そは後に人となり玉ひし神子が此くなし玉ひたりといふと全意なりとす、故に神が開闢以前キリストに在りて吾人を擇ひ玉へりといふは、人なるイエス、キリストに在らしめんとて擇ひ玉へりといふことなりと知るべし。

人として吾人を造らんとの思想と、神子の人となるべしとの思想とは、共に開闢以前に始れり、而して此二思想の必然の順序輕重を以て謂へば、降生の思想は人の創造の思想の先に存せりと謂はざるべからず。

且つやキリストの受苦も亦預知せられしなり、聖書に彼は開闢の初より宰られたる羔なりと謂へり。

第五　神は人に關して有し玉ふ其永遠の經綸を吾人に示し玉ふ(乙)。神子降生と神子の死と此二個の大事實の中、何れか神に取りて第一の目的なる。

解拆――キリストの死といふ神の思想は人の行爲の如何によりて成立つ思想なり、換言せば、人果して其自由を用ひ、道義を欠かずして正しく立つか又は罪に陷るかの如何に依りて、始めて實際行爲に現はさるべき思想なり。

然らば降生も之と均しく人間の行爲如何によりて左右せられたい人の救贖のみに對する方法として神の經綸中に存るものにして、もし人罪に陷らば現表せらるゝも、もし人罪を犯さずして立たんには、不必要として制止せらるゝ思想なるか、如何。

吾人は主張す、降生は墮落の結果にあらずして、寧ろ罪を犯すことなく忠實に神に奉事して渝らざる人に與へらるべき厚貺なりと。何となれば。

(一)神の宇宙を經營し玉ふや、神子を人として現はし、以て宇宙の可視的首長とし、之を支配せしむることを預想す。

(二)聖徒パウロ萬物キリストに在りて造られたりといふ、再言せば、宇宙を造らんとの神の經綸は、神子人となるべしとの神の經綸の一部分なり。

(三)該使徒又曰く、萬物キリストの爲に又キリストに對して造られたりと、是れ豈に神子降生して可視的顯現をなし、以て可視的宇宙の首となる、其可視的宇宙を指すものにあらずして何ぞ。

(四)故に神の思想の順序は左の如し。

(イ)神其子に於て自己を顯示し玉ふ事。

(ロ)神が自己を顯示し玉ふべき道義的及有智的存在者の創造。

されば諸の世界はキリストに在りて造られ、信徒はキリストに在りて擇はれたるなり、しかして降生の思想は神に於て先存の思想なり、卽ち諸世界の創造及信徒の撰擇に先つ思想なり、降生の思想の此二思想を含むは猶總計數が各部分を含み、部分の全部の中に在るが如し。

(五)加之吾人道義上より降生なる神の思想を考ふるに、此思想たる、人罪を犯して初めて現表せらるべきものとは思ひ得ざるなり。

何となれば降生とは神自己を與へて人の中に住み、神人に居り、人神に居ることにして、神が忠信なる人には己を與へず、却て背信叛逆の人に其言辭に絕たる責を授け玉ふべしとは、如何にしても思惟し得ざればなり。

故に降生とは人の罪を待つて成立つ思想にあらずして、神愛より出づる原始、永遠の經綸たりしものならざるべからず。

第六　神の人に對して有し玉ふ原始最初の目的は人の罪によりて變化せらるべきか

解折――難者曰く、人は既に罪を犯したり、しかして降生は成遂せる事實なり、何ぞ今更、人もし罪を犯さゞりしならんには果して降生ありたるべきや否やを問ふことをするや。

答へて曰く、降生を歷史上の事實として受容し、それにて討究を休むるは未だ充分ならず、何となれば吾人正當の感謝を神に献ぜんには、吾人降生の賜を受くるの理由何れにありやを知らざるべからざればなり、吾人が此小冊子を草する所以のものは、降生はキリストの死の賜なることを示さんとするにあり、しかしてキリストの血其當に受くべき讃美、榮光を受けん爲に吾人は之を知るの責任を有す、審に然るのみならず、各人自ら神が降生によりて與へんとし玉ふ利益を享けんが爲めにも人は之を知らざるべからざるなり。

再ひ難して曰ふ、(イ)既にキリストの死は人の罪によりて左右せらるゝ神の經綸なりと謂ひ、(ロ)降生は神の原始、永遠の目的なりといひ、(ハ)しかも又降生はキリストの

死によりて立と謂ふは、矛盾の說にあらずや、約言せば、降生といふ原始永遠の目的が如何にして條件的、不確的なるもの即ちキリストの死に左右せらるゝことを得べきか、そはキリストの死は人の罪を犯すや否によりて左右せらるゝものなればなりと。

答へて曰く、固よりキリストの死は人の犯罪するや否によりて左右せられ、降生は然らず、然るに吾人が降生のキリストの死によりて左右せらるといふ所以のものは左の主意に基く。

(一)神は其子をして吾人の性を採り、吾人の中に宿らしめんと欲し玉ふ、然るに人の罪は人をして此神の賣を失はしむるものなり。

(二)然り而してキリストの死は此く失はれたる賣を回復するものなり、神の子吾人の爲に罪に對する犧牲を供し玉へり、たゞ之れあるが爲め神は降生といふ其目的を繼續し玉ふ、されば吾人(一)降生は神愛より出づる永遠の經綸にして、人墮落して、初めて授けらるべき賜にあらずといひ、しかして又(二)罪は吾人をして降生の賜を享くるの權を失はしめたりと雖も、キリストの死は吾人の爲に之を回復せるが爲

め、吾人が今キリストの降生の賣を得るは惟りキリストの死あるによるといふも決して矛盾の說にはあらず。

三び難して曰ふ、吾人は罪が吾人をして降生を享くるの權を失はしめたりといふの自由を有するか、降生とは神の永遠の經綸にあらずや、然るに人の罪といふが如き人間の行爲が如何にして神の永遠の經綸を制止廢停することを得べきかと。

答へて曰く、(一)既に言へる如く神は宇宙の道義的統治者なり、故に其祝福に關する經綸は其治下に在る者の道義的品性によりて左右せられざるべからず。

(二)しかして吾人罪が此永遠の經綸を制止し、之を廢停に歸せしむるといふは、故らに罪に對する療治法につきて神の有し玉ふ經綸を且く措きて論ずるものと知るべし、蓋し神は此かる療治法を執り玉とともあるべし、然れども且く之を論外に措き、罪其物を考へ、罪其物の元精的傾向を以て察するときは、罪は人をして神の目的に應ずるの資格を失はしめ、再言せば、神の宿在を納くるの資格、價値を失はしめ、以て其永遠の經綸を無に歸せしむ、是れ即ち吾人の論旨なり、故に吾人神が罪に對して行ひ玉ふべき贖を措き、たゞ罪のみにつきて考ふるとき、罪は宇宙をして視るべ

からざる神の顯現の希望を失はしめ、之を壞亂の否運に投ずといふに何の躊躇を要することもなし、加之罪は人の永生を破壞して以て人を破壞するものなり、之は人の生命は神の中にあり、しかして罪は人をして神を失はしむれはなり。四たび難して曰ふ、罪が人をして神を失はしむるの力を有すとは果して信すべきことなるかと。

吾人之に答へんが爲め、請ふ神旨如何を尋ねん、そは罪の亂破性につきては神之を啓示し玉ひたればなり。

第七　人の罪の結果を除去せんが爲めキリストの死の必要ありとは、是れ當に啓示せらるべき事件なり

解拆――或は思はん、罪は之に對する贖としてキリストの死を要するまでに猛なるものにあらずと、又或は思はん、キリストの死は其本性上罪の結果を除去するの實力を有するものにあらずと、然りと雖も人の罪の結果を除去するに果して何物を要するかといふ問題に對して、人自身は其正當の判定者にあらず、何となれば

人は罪によりて其心暗み隨て此問題につきて正當なる判斷を下すの能力を欠くといふ事實は且く措て論ぜずとするも、主要の疑問は、人の罪が神の心意及目的に果して如何なる影響を及ぼせしやといふに在ればなり、然り而して此疑問が唯一主要の疑問たることは、左の理由よりして明白なりとす。

(イ)人は絶對的に神に頼りて立つ者なるが故、一切の福祉は皆たゞ神のみより受けざるべからず。

(ロ)人の永生も亦神より來らざるべからず、而して主イエスは永生に定義を下し、之を以て神と愛の交通を爲し、以て神を知るに在りと爲し玉ひたり。

(ハ)然らば苟くも神人との交通を妨ぐるものは人をして永生を受る能はざらしむるの傾向を有す。

(ニ)罪は其人の心に及ぼす影響によりて神との交通を妨く。

(ホ)罪は其神の心に及ぼす影響によりて右と同一の傾向を有す。

(ヘ)罪の神の心に及ぼす影響は尤も重要の事件なり、そは人の永生の希望は神が己を其被造者に與へんと定め玉ふ志に基くものなればなり、もし被造者の有する罪

にして神志を變更するの力ありとせば、神が其目的を變更し玉ふは即ち人に取りて永遠の死に外ならず、人は神と愛の交通を爲さんが爲に造られたり、しかして罪によりて此交通を爲すの望を一切失はんか、是れ人に對しては第二の死に外ならずとす。

(ト)己を賜ひて以て人に生命を與へんとは是れ神の經綸なり、故に人罪を犯したる曉、神をして依然其愛に基ける元始の經綸を行ふを得せしむるものゝ何たるを明言するは全く神の權内に在りとす。

(チ)吾人は右の如き陳述に對して一々その理由を了知せざるべからざるの責を有せず、然れども若し神キリストの死のみ惟り其永遠の經綸を繼續するを得しむるものなりと宣言し玉はんか、神語一ひたび發して萬事定まる、吾人の喋々之に容喙するを許さざるなり。

第八　罪に對する神の心意の啓示(甲)。

解拆——神より罪に對する震怒の情につきて啓示し玉ふところありとするも、吾人は之を解釋するに方り、之を愛として自己を啓示し玉へる其一層濶大なる啓示

に比しての確かに下位を占むるものと看做さゞるべからず、吾人は愛として神の啓示は神の自己に關する啓示の根本的なるものなるを信ず、故に吾人は左の如く信ぜざるべからず。

(一)神が罪に對して震怒の情を示し、己の王國及榮光を享有せしめんと欲し玉ふ者に道義的及靈性的邪惡の存するを許さじと決心して變り玉ふことなきは、畢竟其愛を啓示し玉ふ所以なり。

(二)神が罪に對して怒り玉ふ度の深淺は其愛の度の深淺を示すものなり、何となれば神愛は吾人を神子と爲さんと欲するに罪は神に對する子情を一切破壞するの原理なり、要言せば罪は神が召して神子と爲さんとし玉ふ者をして神を失はしむるものなればなり、吾人が此く言ふ所以のものは左の理由あるによる。

(三)眞正の子情とは衷心より悅んで神に信頼するの生涯に於て見はる、しかして此衷心より悅んで神に信頼するの生涯は、神の獨生子に於て至完至全に見はれたり、完全なる子情を現はせるものは獨生子にして、此かる子情を現はすに方り、彼は全く自己の意志より悅んで神に對する信頼を現はし玉へり。

(四)神は人に對し、獨生子と同じく爽心より悅んで神に信頼するの子情を有せんことを要め玉ふ、然るに罪とは神を離れて自ら立たんとするの原理なり、故に罪は神に對して子たるの位置を取るを肯ぜざるものに外ならず。

(五)以是觀之、數多の見曹をして榮光を享けしめんとする愛より出づる神の永遠の目的と罪とは相反對し、相衝突するものと謂はざるべからず、但し此は神が此かる榮光に召し玉ふ人の心靈より罪の除去せられずして依然存する場合をいふものと知るべし、罪は神に對して子たることを肯んぜざるものなるが故に、畢竟神の愛を容れ肯んぜざるものなり、しかしてもし頑然變ぜずして立たんか、終には愛を惡むに至るべし、此かるものなるが故に永へに愛の面前よりして驅逐し去られざるべからざるものなりとす。

第九　罪に對する神の心意の啓示(乙)

解折――神は愛なるが故、宮に惡の原理として罪に對して其震怒を發し玉ふのみならず、頑然罪を犯して悔めざる人に對しても之を發し玉ふ、そは聖書は罪人に對して天より震怒の啓示せらるべきことを言へばなり、しかして其終まで悔改めざ

る者に加へらるべき罰あることを言ふは、第二の死を指すものたらざるべからざればなり。

難問あり曰く、苟くも愛たるもの、よし罪を犯して到底悔改めざる人にもせよ、之を永遠慘苦の境に投ずるといふ迄に之に對して震怒すべきことありや、此かる震怒は愛に反するものにはあらざるか、もし人悔改めずして終に滅亡するに至らんか、吾人は此かる人が神の震怒によりて此く罰せられ、此く苦痛を受くるに至りたりといふよりも寧ろ人の存在の必然理法、即ち好んで惡に在りて悔めざるが爲必然と爲りし理法によりて此慘憺の境に投ぜらるゝに至りたりと謂ふべきにてはあらざるか、要言せんに、人は自ら苦痛を受けざるべからざるの境に己を置きたるものにして、神愛は免れ難き慘苦より人を濟ふことを得ず、之を悶み玉ふことこそあれ、人に對して憤怒憎厭の念を發し玉ふことあるべからずと謂ふことを得ざるかと、是れ難者の語なり。

答へて曰く、吾人は左の如く信ぜざるべからず、(イ)苟くも最後に、滅亡者の境に己を投じたる人は、是れ其人に取りて相當の境に在るものと謂ふべく此かる人は己自

ら他の境界に在ることを得ざらしめたるものと謂ふべきのみ。

(ロ)然れども人が自己の性質の必然法よりして此境遇に陷りたりとて、毫も神怒の其人の上に存するといふことを妨ぐるものにあらず、何となれば神の心意は事物の眞性に循ひて動くものなれば、もし人其道義性を毀損し、自己の相當の住所として只地獄のみ存すといふが如き有樣に陷らんか、此かる性質を有する人に對して神は嚴格なる道義上の厭忌を感じ玉はざるを得ず、然り而して神の震怒は此厭忌を指すに外ならざればなり。

(ハ)之と同時に、吾人は愛の悅とするところは恩惠を示すに在ることを信ぜざるを得ず、されば何人の上にせよ、もし愛にて在ます神の怒其上に留まるとせば、そは神其人に對して惠を施すこと能はざるによるものたらざるべかず、何となれば神は己が惠を示すことを悅ぶものなるを人に知らしめ玉ひたれば、神が終まで罪を犯して悔めざるものを赦し肯んじ玉はざる場合にも、吾人は之を神の恩惠の性質に照して解釋せざるべからざればなり。

二たび難して曰ふ、罪もし人心より驅除せられずば神の子たる資格を失ふことを十

分許容するとするも、吾人は何故キリストの死なくして聖靈の人に授けらるべきことを信じ能はざるか、もし聖靈にして人に與へられんには、神は必ず人心を淨めて罪を除去り、人をして復び神の子たるものが具ふべき眞正の子情を有せしむる力を十分有し玉ふべきにあらずや然るにもし吾人キリスト死し玉ふに非んば靈の授けらるゝことなしと謂はば、是れ神を以て慘忍無情の者と爲すものにあらざるか夫れ罪科を看過するを樂むものは愛なり、果して然らば愛は人を赦し、しかしてかく人を救して以て神は聖靈を人に與へ、聖靈を與ふると共に、罪の力と厄より悉く人を救出すことを爲し玉ふべきにてはあらざるかと。

答へて曰く、(イ)赦罪は神に取りて難業にもあらず、又之を與へ玉ふに吝なるものにもあらず、何となればキリストは罪に對する贖を爲さんが爲死し玉へりと雖も彼の死は萬人の罪を赦すの道にして、之が爲め神の恩惠を顯はしたればなり、吾人が此く言ふは、神は吾人に對してもキリストに對しても、吾人の罪に相當する苦痛を悉く受くるが如きことなからしめ玉ひしを以てなり、キリストは吾人に代りて苦を受け玉へり、然れども其受け玉ひし苦痛は、たゞかく苦みて以て神の律法の威光

を維持し、神の義を顯はすに必要なる程度までに止まれり、キリスト實に死し玉ひたりと雖も、神の代價なくして罪を赦し玉ふことは十分に示されたるなり。

(ロ)神は恩惠を施すを樂み玉ふに、何故キリスト死して以て罪に對する十分の贖を爲し玉ふて初めて吾人を赦すを得玉ふか、吾人は其理由を了知するの必要なし、兎に角に神の啓示によれば、キリストの死は神が吾人の罪を免し玉ふの基由なり、吾人は之を知りて足れりとす。

(ハ)然りと雖も律法を維持し、其尊嚴を保たんが爲め、神、罪を赦すに方り、其の恩惠を充分示し玉ふと共に、義を以て罪を罰し、以て其義を現はし玉ふの要ありと吾人の推測するは、道理に合することゝ思はる、而してキリストの死は此二者を遂ぐるものなり、キリストの死は實に神の恩惠も神の義も共に之を現すものにてあるなり、

第十　人の贖はれ、罪より救はるゝに至る其榮光は全く神のみに屬す。

解折――罪もし人に存せば、人を惠まんとの神の經綸を無に歸せしむるものなるが故に、愛にして其人を惠まんとの目的を繼續せんには、罪より人を救はざるべからず、しかして此救拯事業に於て第一着手は、神の赦免を授くることなるべし、神人の罪を免せんには左のことを要し玉ふ。

(イ)人罪の惡性を認むること。

(ロ)人罪の惡性を認めて之を懺悔し、衷心よりして之を斥くること。

(ハ)神が罪を犯して變せざる物の其聖前に存すべからざることを宣言し玉ふを義と認むること。

人の罪を赦すに對して神愛の人に要むるところは蓋し以上の三者に止まるが如し、一たび赦されたる人道義的邪惡より全く免れ、神に合し、神と交り、以て靈性上神の像に符合するに至らんが爲め、神が其全能力を人の爲めに振ふべきことを約し玉へるを見て吾人はしか謂ふ。

蓋し神が人を赦すの條件として以上のことを要求し玉ふは、決して其愛と矛盾するものにあらず、反て愛は夫れ丈けのことを要求すべき筈なり、もし然らずば神は眞に人を惠み玉ふ者とは爲らざるべし。

難者曰く、神愛の要求するところ前掲三者より下ること能はずとするも、そは人力

の及ばざることを要求するものにはあらざるかと。

答へて曰く、人の完全なる救拯に對する第一着手として其罪の赦免を得んとするに方り、神と人と共に果すべき一事業あり、即ち。

(イ)人を救さゞるべからざるは神の事なり、(而して一旦救したる上、之を淨め、之を濟はんが爲に其全能力を振はざるべからざるも亦神の事なり)。

(ロ)之と同時に充分其罪を懺悔し、衷心より之を斥け、之を棄て、公然充分に神が罪に對して有し玉ふ態度を義なりと承認せざるべからざるは人の事なり。

(ハ)人の救はるゝは、神が以上の二事を自ら行ひ玉ふに是れ賴る、即ち神が自己の業と人に要め玉ふ業とを自ら遂げ玉ふによりて救はるゝなり。

二たび難して曰ふ、神いかにして其人に要め玉ふところを自ら行ひ玉ふを得べきか、もし神之を行ひ玉ひしとせば、吾人は人其爲すべきことを爲さざりしものと謂ふべきにてはあらざるかと。

答へて曰く、神は先づ自ら人となりて人に要め玉ふことを爲し玉へり、眞正完全なる人としてキリストは人に要めらるゝことを爲し玉へり。然かも尙吾人は其一切

の榮光神に歸すべしといふ、そはキリストは人なりしと雖も同時に又神たりしが故なり、人なるキリストが爲し玉へることは悉く神の爲し玉ひしものに外ならず。

第十一　キリストは罪なかりしと雖も能く罪の苦味悽慘を嘗め玉へり(甲)

解拆――キリストの如き聖潔なる者いかにして神が人に要め玉ふことを爲すを得玉ひしか、再言せば、いかにして罪なき者罪を懺悔するを得玉ひしか、又罪に與したることなきもの如何にして罪を棄つることを得玉ひしか、思ふに罪に加へられる一種特別の痛苦は、神の面前より驅逐せられて、此は至當の應報なりと感ずることに在りて存す、然るに恒に神の聖旨に合せる者、如何にして其心靈に神の震怒に觸れたりとの實驗を有して痛苦を感じ玉ふことを得べきか。

答へて曰く、キリストが以上の如く行ひ、以上の如く苦むことを得玉ふは、自らは罪なきも、全く實際上罪を犯せるものと自己とを同一視することを得玉ふが故なりと。

キリストがかの貧困痛苦といふが如き吾人の外面上の事情に於て吾人と自己と

を同一視することを得玉ふことに至りては、吾人之を了解するに苦むことなし、然れども。

二たび難して曰ふものあり、キリスト如何にして吾人心靈上の試錬、誘惑、鬪爭に於て吾人と自己とを同一視し、眞實に吾人の憂愁悲痛(隨て吾人の罪)を自己のものゝ如く感じ得玉ひしかと。

答へて曰く、主の人と爲り玉ふや、其人性を採り玉ふに於て、啻に吾人と其外面上の運命を共にし玉へるのみならず、充分完全に之を採り玉ひ、吾人と同じく信仰の生涯を送ることを得、又實に之を送り玉ひしに至れり、彼が信仰の生涯を送り玉ひしことは、其人性の眞實なることを證し、彼が人の如く試みられ、誘はれて苦を受け玉ひしことを示すものに外ならず。

彼は其心靈に於て全く人間なりしこと此の如し、故に彼は其心情に於て吾人と己とを同一視することを得玉ひけるなり。

三たび難して曰ふ、既に信仰といへば、必ず未だ視ざるもの若くは未だ知らざるものに就て神を信任するの意を其中に含む、もしキリスト神子にして神の全知力を

有し玉ひしとせば、全知力を有するものには信仰の生涯は出來べからざることにあらざるか、

答へて曰く、もしキリスト人として全知力を用ひ玉ひしならんには、信仰の生涯を送り玉ふことと叶ふべくもあらずと雖も、キリストは全知力を有せしには相違なきも、斷へず其神的意志を揮ひ、以て其人としての生涯に於ては全知力を抑へて之を用ひ玉はざりしなり。

彼は吾人の如くなり、眞正なる人間の信仰を以て惡魔に勝ち、罪に對する祭物たらんが爲め己を準備せんとて右の如く行ひ玉へりき。

第十二　キリストは罪なかりしと雖も能く罪の苦味悽慘の元精を嘗め玉へり(乙)

解説――キリストが信仰の生涯を送り玉ひしことは、適に彼が人として全ふせられんが爲めに欠くべからざる人間の經驗を悉く自ら閲し玉はざりしを得ざりしことを示すものなり、彼が其人性の完全なるものを具へ玉ふに於て必要欠くべかざる感情幾多ありき、しかして自己と他の人間と同一なりとの念は其一にてあり

しなり、何となれば全人類が眞正の統一を保つは其彼此互に同一の生命、性質を有することに在りて在すればなり、倩々世界の歴史を觀るに、神は人類統一の念を絶へず加々人心に深からしめ、此念を以て人類の最も高尚なる屬性の一と爲し玉ふことを知る、されば生命性質を同ふするが故に我も他人も同一なりとの右の念は、主イエスに在りて最も完全に發達せしものたらざるべからず。

加之主が有し玉ふ、他人と自己と同一なりとの念の大小は、其他人に對する愛と同情の大小、及び其之を救ひ之を祝せんとの願望の大小と相比例すべし、モーゼの如き、聖徒パウロの如き愛の人は、其道を誤れる同胞國民と自己との同一なることを感ずることを得たり、然れども キリストに至りては其愛の大モーゼ又は聖徒パウロの比すべきにあらず、隨て其他人と自己との同一を感ずるの深き、此等二人の比にあらざるなり。

されば、心靈上の生活に至るまで一切悉く眞正完全の人なりし主イエスは其廣大の愛により、其兄弟の罪を見て、恰かも之を自己の罪の如くに感じ、之を悲むことを得玉ひたり、しかして吾人舊約聖書の預言に於てキリストの受苦及び事業中此點

に就き先言せるものを觀るに、キリストは人の罪を自己の罪の如く謂ひ又之を自己の罪の如くに懺悔し玉ふを知る。

第十三　キリストは死するに方り、實際自己と罪人と同一視し玉ひしとの聖書上の證據

解拆――神が罪人に加へ玉ふ死の罰は、啻に其肉體上の死にて止むものにあらずして、有罪者を神前より驅逐し玉ふて始めて其意を全くするものなり、神の恩愛外に棄てられ、神の聖前より驅逐せらるゝこと、是れ卽ち第二の死の苦痛の元精ならざるべからず、もし神が罪人に加へ玉ふ罰の元精は此かる心靈上の苦痛なりとせば、而してもしキリスト罪に對する贖を遂げ玉はんとならば、彼は自ら此心靈上の苦痛を受け玉はざるべからず、再言せば、彼は神が正當必要と認めて加へ玉ふ丈け此苦痛を受け玉はざるべからざるなり、さてもし神キリストを罪人の代表者として又其罰を負ふ者として容れ玉はんには、神は蓋しキリストの代表する罪人と同一の者としてキリストに對して處し玉はざるべからざるべし、再言せば、神はキリストに對して、彼が實際神怒を自ら負ひ玉ふまでの度に於て其震怒を現はし玉はざ

るべからず、神は罪人の代表者としてキリストに對し公義上の處置を爲し玉ふとき、(彼を充分、完全に愛し玉ふには相違なきも)罪に對する震怒をキリストに向て發することを得玉ふなり。

然り而してキリストは自ら罪なしと雖も、其實際よく己と罪人とを同一にし玉へるの故を以て、右の神怒を感じ、神に棄てられたりとの苦感を受くるを得玉ひけり。」聖書を按するに、キリストの死するや、實際眞實に自己と罪人とを同一にし玉ひ、其心靈上の苦痛さへ之を受け玉へるとを說く、是れ豈に右に述べたる理に合するものにあらずや、加之聖書はかくキリストが死して吾人の罪を負ひ玉へることを以て、神の吾人に赦罪を與へ玉ふ根基なることを說く。

加拉太三〇十三。哥林多後書五〇廿一。約翰傳三〇十六。申命紀十六章及他の聖語の研究。

第十四

キリストは死して以て、神が罪を犯して悛めざるものを其聖潔なる面前に存せしめじと明白に決心し玉へるは、義にして眞なりとの公認を爲し玉へり。

解拆——神の罰の公義に對する最も適當の白狀は、謙りて之に服從することに在り、キリストは罪に對する至當の應報として死に就き以て此白狀をなし玉へり、此かる白狀は神人共に其心を滿足せしむるものなり、其人の心を滿足するは、己自ら神に罪を懺悔せしにあらずして、キリスト死して以て適當に神に其罪を懺悔し玉ひたりとの擔保を與ふによりてなり、其神の心を滿足するは神之によりて其爲さんと切望し玉ふところを爲し得玉ふが故なり、卽ち罪人に恩惠矜恤を示すを得玉ふが故なりとす。

第十五

キリストが其死によりて萬人の爲に罪に對する神罰を免じ玉へりとは何の意ぞや。

解拆——もしキリスト漏れなく萬人の爲に死し、以て世界の罪を除き去り玉ひしとせば、罪の故を以ても終局に定罪せらることあるべしとは何の事ぞや。

大體の答辨に曰く、もし何人か最後に定罪せるが如きことありとするも、吾人は尙ほキリストの死が罪人の素と有せし定罪の罰を除き去りたることを信ぜざるべ

からず、而してもし其人終に定罪せらるゝとせば、そは其人キリストの死の利益を謝絶して享け肯んぜざりしが爲なりとす、吾人乞ふ今一層詳細に答辨せん。

(二)キリストの死は萬人の神に對する于係を變化せり、しかして其之を變化するや、萬人の爲め甲乙なく均しく之を爲し玉へり、然り而して彼が之を爲し玉ふや、罪の影響結果を廢滅に歸せしむる力ある其死によりて之を爲し玉へり、罪は廣く一般人間に及び、しかして其結果も亦(潛勢的に)一般普通のものとなれり、罪は神が萬人を定罪し玉ふ根基なり、しかして神に對する背信の原理として罪は萬人をして神と永生とを失はしめたり。

然るにキリストの死は罪の結果を滅すの力あるものなり、而して又萬人に對して均しく罪結果を滅するの力あるものなり、即ち左に述ぶるが如し。

(イ)キリストの死は萬人に加へらるゝ第二の死の罰を假りに廢す。

(ロ)キリストの死は肉體上の死を神怒の證とせずして神の懲戒の手段とせり。

(ハ)キリストの死は萬人をして齊しく復活して其肉體を回復することを得しむ、そはキリスト死して吾人の肉體に加へられたる死の罰を除き玉ひしが故に、吾人の肉體は復活すべければなり。

(二)肉體復活の一般普通なることは、神子死して人の爲めに遂げ玉ひし贖の一般普通なることに對する神の保證なり。

そはキリスト十字架に懸かり、體、心、靈を贖ふに充分なる一個の賠償を拂ひ玉ひたればなり、もし肉體の復活にして、もし肉體の死の罰を免るゝことにして、キリストが死して以て拂ひ玉ひし賠償の結果なりとせば、萬人肉體の復活を得るは、是れ豈に彼が萬人の爲に、否終まで悔改めざる者の爲にすら死し玉ひしことの證にあらずや、さればキリストの死は齊しく萬人の爲に永生を購ひたるものにして、もし終まで悔改めざる者罪に定められるゝとせば、一般の罪を有するが爲にあらずして、其人の爲に遂げられたる購を謝絶せしが爲なりとす。

(三)神は萬人の爲にせるキリストの死を容れ玉へり、是れ。

(イ)萬人齊しく爲さんとする罪の懺悔、棄絶の表白としてキリストの懺悔、棄絶を採用せんが爲なり、

(ロ)又萬人キリストを神の萬人に授け玉ふ賜として受け、キリストによりて聖化せ

られ神の聖なるが如く聖ならんが爲なり。

(三)此の如く、神の贖は一般普通にして、聖德と永生とを授けんとの神の申出も亦齊しく萬人に與へられたるものなり、されば救はるゝ者と亡ぶる者との差は、畢竟前者は其贖を容れ、後者は之を謝絶するに在りて存す、しかして此贖を謝絶するは神を謝絶し、又永生を謝絶するに外ならず。

第十六　キリストの死が人に對する神の心狀に及ぼす影響、神は人に復和せられたりと、其心事を宣言し玉ふ

解説――或は難じていふキリストの死によりて人に對する神の心狀に變化あるべき謂れなし、そは此かる變化ありと假定するは取も直さず神子の死によりて神の愛の生じたるとを思惟するものにして神の愛を毀損するものなればなりと。

答へて曰く、キリストの死の必要は神の愛を毀損するものにあらず、そは贖を行ひ、苦を受け玉ひしものは神自らなればなり、キリストの死といふ受苦のことは神の愛の原因にあらずして、寧ろ神愛の業に已に存在せることを證するものにてあるなり。

神、人の罪を赦し得んが爲めキリストの死すべき必要ありてのことを否定するものは、實に人の犯罪、背信が人を惠まんとの神の目的を變ずるの力を有せずと自定するものなり、然れども若し神キリストの死を人が賣りて以て其赦免を望み得べき唯一の根基と定め玉ひしとせんか、此赦免の根基を舍てゝ他の根基を之に代用せんと企つるは、吾人に取りて危險至極の業たることと言ふ迄もなし。

故に主腦の疑問は「神果して惟り其子の死のみによりて其心意の人に復和せられたることを宣言し玉ふや否や」といふことと是れなり。

復和といふは、甲乙相互の間に心意の離反分裂ありしことを含意す、夫れ人の心意の神に復和せられざるべからずといふことは、是れ重大の事實なり、然れども吾人は敢て神の心意の人に復和せらるゝ要なしといふの權を有せず、借問す、人、神に對して憤怒の情を發すると、神、人に對して憤怒し玉ふと何れか正當なる、言はずして知るべし、否、愛は罪人に對して怒ることを得、しかして愛の眞性よりせずして、事件の性質上より、愛は能く罪を犯せるものを赦すに困難を發見することを得るなり、

吾人は謂ふ、キリストの死は罪人に對して神の心意を復和せりと、蓋し是れキリストの死神をして人を惠まんとの情を生ぜしめたりといふにあらずして、神を妨げて其恩惠を流れ出てざらしめたる障碍物を排除し去れりといふに在り、思ふに神の人を救し玉ふに妨害となるべきものゝ中左の件あらんか。

(一)人罪に對する神罰を充分受け、尚ほ恢復の望ある一切の道義的存在者をして慄然罪を怖れしむるの必要神意中に存す、吾人は神子の死獨りよく此條件を滿足するものにして、しかも又人の救され、救はるゝ餘地を其中に存するものなることを疑はず。

(二)加之神は其子を人となし、之を仲保となして以て人に永生及聖靈の賜を授け、且自ら人の衷に宿在せんと永遠より經營し玉ひしことなれば、一旦人罪を犯せる場合は、亦た此く願りて以て一切の福祉を領くる此仲保、即ち吾人の性を取りて降生し玉へる神子によりて救罪の賜を享けざるべからざるにあらずや。

(三)降生せる「道」を仲保となし、之に願りて右に掲ぐる祝福を人に授けんとは神の元始の經綸なり、左ればこそ聖書は宣傳すらく人となれる神子が神に對し吾人の爲

に仲保を爲し、以て吾人に救罪の賜を授け玉ふ特別の行爲は全く彼の死に在りと、蓋し是れ神の元始の經綸に合するものなり、聖語を摘錄し之を講究す。

第十七　普通贖罪なる命辭を用ひて特に主張せんと欲する教義

解説――曰く贖、曰く復和、曰く挽回、是れ皆心狀の變化を表示するの語なり、而して吾人はキリストの死が罪人に對する神の心狀を變ずることを信ぜざるべからず、(所謂變ずるとは、人間の言語を以て神の心意の動作を言表はすものにして、吾人は此く言ふの外道なし、)再言せば、キリストの死は神をして吾人に對し救免、恩惠の態度を取ることを得せしむるものにして、若し此死なくば神は此態度を取り玉ふことを能はざること、これ吾人の信ぜざるべからざることなりとす。

然れども若し人此說を解するに因難を感するあらば、吾人は此かる人に向ひて、通常贖といふ命辭を用ひて言顯はさゝ中心的眞理、即ち吾人はキリストの死によりて、吾人が神より領くべき一切の祝福を受くるを得るといふことを謹で信受せんことを切に勸告せざるを得ず、神が萬物を吾人に授け玉ふは、キリスト吾人の爲に死

し玉へりとの唯一の理由あるが爲なるを以て觀れば、吾人何物を領くるも皆キリストの死に是れ依るものにして、一として其死の賜にあらざるはなし。

右の眞理即ち一切の祝福はキリストの死のみによりて得らるゝものにして皆其死の賜なりといふことを聖書に錄するものを類別すれば左の如し

(一)吾人の生命を領くるはキリストが其肉體の生を損てゝ死に就き玉ひしに依ると說くもの。

(二)吾人の死を脫するはキリストの死の力に依ると謂ふもの。

(三)吾人の罪を脫するはキリストの死によると敎ふるもの。

(四)キリストの死は吾人を買ひ、吾人を購贖すといふもの。

夫れ物を買ふとか物を購贖すとかいふは、其意或物を損てゝ、其代りに他の或物を受け、而して其或物は買はれたる物若くは購贖せられたるものとなれりといふに在り、主イエスは吾人に及ばんとせし一切の害惡より吾人を買ひ出し、神より來るべき一切の祝福を吾人に領くるを得せしめ玉へり、彼が吾人に領くるを得せしめ玉ふものは、取も直さず一切の害惡より淸はれたる吾人自己其者と、無限の愛が授

けんと欲し玉ふ一切の祝福とにてあるなり、聖書の謂ふところに據るに、吾人自己と此祝福とをキリストは或物を損てゝ吾人に得せしめ玉ふ、而して其損て玉ひし物は何ぞといふに、木に懸り、其肉に於て死し以て捨て玉ひし其生命なりとす、死して以て自己を獻げ玉ひしこと、是れぞ即ち買ひ若くは購贖する所以の者にてありけり、故に知るべし、吾人が神より領くるものは之をキリストの死の賜として領けざるべからざることを。

第十八　降生其物、即ち現に有し玉ふ榮光と能力とを具へたるキリスト其者は畢竟キリストの死の賜なり

解拆――(一)既に罪を犯したる已上)キリストは其死あるが爲め現有の榮光に在すことを得るなり、其理由左の如し。

(二)神の人を造るとき有し玉へる目的の性質及び此目的を變動すべき罪の勢力を考ふるときは、右の如くならざるべからず、神が吾人を造るに方りて有し玉へる目的と、罪が吾人をして其永遠の運命を全ふするに適せざるものたらしむるとある

を以て考ふれば、罪は吾人をして神を失はしむるものに外ならず、もしキリストの死が吾人の罪の結果を除き去るの力あることを認むるとせんか、是れ

(イ)キリストの死は復び吾人に神を與ふるものなり。

(ロ)然れども永遠の經綸に依るに、吾人は人と爲れる神子に頼るに非れば神を嗣業として領くること能はざるが故に、吾人に神を回復するの死は、又吾人に降生をも回復せざるべからず。

(ハ)左れば(人一たび罪を犯したる已上)降生の在り得しは、畢竟キリストが死して自己を献げ以て罪に對する犧牲と爲さんと欲し玉ひし其犧牲あるが爲めに然りしものなりとす、もしキリスト死して自己を献げ、以てかゝる犧牲を供へ玉はんとの志なかりせば、彼は遂に世に生れ玉ふことと能はざりしなり。

(ニ)既に然らば罪は(もし之に對する贖なからんには)啻に吾人をして神を失はしむるのみならず、キリストをして人性に於て神を顯はすの榮を失はしめ、又永生及聖靈を吾人に授けんが爲めの仲保たる位地を失はしむるものなりと謂はざるべからず、もし人の罪、彼をして此祝福の地位を失はしむるものとせば、罪に對する彼の

贖は彼をして此榮光と恩寵の位置を回復せしむるものと謂ふべし

(三)加之聖書は明かにキリストの現有し玉ふ榮光は其死に依るとを述べたり。

(イ)詩百十篇七節(ロ)以賽亞書五十三章十一、十二節

(ハ)腓立比書二章五節ー十一節 (ニ)約翰十章十七節を研究す。

第十九 神がキリストの死を以て、未だ悔改めて神に歸せざる人の心意に生ぜんと欲し玉へる結果

解折——人は今や其自然の性よりして謂ふときは、其心神に乖けるものなり、故に人の救はれんが爲には、其心先づ神に復和せられざるべからず。

さてかく乖離せる人心を神に復和せしめんとせば、

(一)人心に於ける罪の結果を忘るべからず、人既に罪を有す、故に容易に神の愛を信ずることなし。

(二)且つ神は終まで悔改めずして神に背く者をして口を鑑くところなからしめんが爲め世を記憶せざるべからず。

(三)故に神の愛の示現は最終に必ず、

(イ)充分人を導きて神に頼り、神を愛し、神に順ふに至らしむるの結果を生ずるか、

(ロ)若くは人己の救拯に對して出來得る限りの方法を盡せし愛に反して頑然改めざるの罪は、よし罰せらるゝも正當公義なりと認めざるを得ざるに至るか、此二者中何れか一の結果を生ずべし、最後に亡ぶる者は、此かる愛に反して頑然改めざるの罪は己をして口を藉くところなからしむることを白狀すべきや疑なし。

故にキリストの死は神愛の無上の證據、示現として、未だ悔改めて神に歸せざる人の心意に對して最後の訴にてあるなり。

第二十　神がキリストの死を以て信者の心意に生ぜんと欲し玉へる結果、(甲)人の神に容れらるべき基礎を人に給すること

解拆――再生及聖靈の果は吾人が神に容れらるゝ原因にあらずして、反て此容れられたるの結果なり、蓋し信者たるもの苟くも安心を得んと望まば、我れ神に容れられたりとの信仰をば常に、キリスト我が爲めに死し玉へりとの事實に基けんこ

と、頗る肝要の事なりとす、何となればよし其罪はバプテズマの水に於て洗ひ去られたるに相違なく、再生の賜を領けたりとするも、若し其後自ら省みて幾多の失敗、罪過を有することを認むとせば、人は奈何ともすべき樣なければなり、是に於て、

(イ)人の取るべき唯一の道は新に神の前にキリストの血の功績を陳へて哀を乞ふの外なし。

(ロ)又信者たるもの如何程神を知り、神を愛するに於て進歩を爲したりとて、己は神の義子なりとの聖靈の證左を慥に我靈に有すとて、之を恃むべきにあらず、彼は末日に於て審判を恐れざらんが爲には、唯キリストの死の功績をのみ恃とせざるべからざるなり。

然らば聖書が吾人の贖はれて神の子となれることを聖靈證するといひ、又吾人死を脱して生に入れることを慥に知るといふが如きことを說くは何の意ぞ、吾人は如何に之を解釋すべきか。

(ハ)蓋し聖書に此く言ふところのことは皆吾人がキリストに合せることの標號に外ならず、吾人は一たびキリストの裏に在りたりとて、其れ計りにては充分ならず

吾人は恒にキリストに居らざるべからず、而して吾人が此く絶へずキリストに居るの證據として、右の如き標號は價値を有するものにてあるなり。

(三)加之人の心内に於ける此聖靈の證左をば、神は全く他の基礎の上に立てる信仰を堅固にし又之を證定せんが爲に與へ玉ふ。

(ホ)然れども吾人は自己の裡に存するものを以て信仰の基礎と爲すべきにあらず、キリスト吾人の爲に死し玉ひ、而して神之を容れ玉ひたり、吾人が最後に罪を免され義とせられ、永遠の榮光に入るの望を懷くは全く之を基礎とせざるべからず。

第廿一　神がキリストの死を以て信者の心意に生せんと欲し玉へる結果、(乙)神の約束の一切撤回せらるゝことなきを信者に保證すること。

解説――禪の約束を與へ玉ふや、之に附し玉へる條件あり而して此の條件を全ふせざる者は其約束を領くるの權を有せず、然れども苟も之を全ふする者には、神キリストの罪を以て、神の約束の撤回せられざること即ち其約束を此かる人より取

戻さゝることを保證せんと欲し玉ふなり。

そは神其子の血を以て印したる契約を信者と結ひ玉ひたればなり。

もし人約束を結び而して後死したりとせんか、其死を以て其語りし言の渝らざることを證せん爲め印を捺したるのもと謂ふも不可なし、上古に在りては、犧牲の爲に宰られたる動物の血を以て契約を印するの風行はれたり、蓋し此血たる、契約の語の渝らざることを證するものにして、其意契約を結びたるもの自ら死して、其誓約に印したると同なりと謂ふに在り、此の如く主イエスは吾人に一個の嗣業を授けんことを約し而して此約束をば其死を以て印し玉へり、神キリストに在りて吾人と契約を結び玉ひ、而して之に印するに、犧牲の爲に宰られたる動物の血を以てせず、吾人をして神の約し玉へる罪の赦免及神を嗣くてふ永遠の嗣業を領けしめ、死してんが爲己を献げ、以て犧牲となり玉ひし神子の血を以てし玉ひけり。

思ふに神は其獨生子の死及受苦といふが如き貴重なる印を捺して結び玉へる約束を撤回し玉ふこと能はざるべし。何となれば吾人の罪は吾人をして此約束を領くるに堪へざらしむと雖も、神の面前には死より甦りたる神子在しまし、而して神

子は嘗て十字架に懸り玉ひしが、神は彼を墓の力より脱して甦らしめ、以て神子が此く供へ玉ひし犧牲を吾人の爲に容れたるの證據となし玉ひ、而して神の前に立ち玉ふ神子は此犧牲の永久の記念なればなり、キリストが天に於て父に咫尺し玉ふは、取も直さず吾人の罪の赦免及びキリストの死より來る其他一切の利益に對し神が吾人の爲めにキリストの死を容れ玉はんことを斷へず哀求し玉ふに外ならず、左れば神がキリストの死を吾人の爲に容れて以て結び玉へる契約は、斷へず新にせらるゝが故、信者たるものは斷へず此契約を執りて以て哀求することを得べし苟くもキリスト吾人の代求者として存し玉ふ限り、神は此契約を撤回し若くは破り玉ふこと能はず、吾人は永へに彼の死によりて結び玉へる契約を執りて以て哀求することを得べきなり。

第廿二　キリストの死と降生との正當なる干係より謂ふときは、神は此死によりて信者をして其人に就て有し玉ふ完全の意志に到達せしめんと欲し玉ふ者なりとす。

解折――人或は火より脱れ出づるが如く終に永遠の滅亡より救はるゝことあらん、然れども是れ未だ神が愛心よりして人の領受せんことを希ひ玉ふ恩寵福祉の頂點に到達したりとの確證にはあらざるなり。

神がキリスト信徒たる者の眼前に懸け玉へる褒賞は、神が人に對して有し玉ふ思想の最高點に到達すること即ち是れなり。

此頂點に達するには左の諸點に於て知識を具へたる信仰を有せざるべからず、諸點とは、

(イ)降生の榮光に就きて、

(ロ)キリストの死は、神子全能力を具へて人性のうちに宿り玉ふて神の賜を吾人の爲に回復するものなり、(若し此死なくんば罪の故を以て吾人は永へに此賜を失ひたらん)即ち此死の榮光に就て曉らざるべからず、既に此く曉りたる上は、此信仰や、

(ハ)吾人キリスト信徒たるものゝ召れて有つべき褒賞を獲んとするに傾注せざるべからず。

何となれば罪の世に來るや、神は其愛子の死と受苦とによりて初めて榮光を具へたる降生を吾人の有と爲し玉ひたればなり、吾人が神より受けんと望む一切の利益を權利上望むことを得るは、全く神がキリストの血を流して以て此かる利益を吾人の有と爲し玉ひたるに基くキリストの血を流して以て吾人の有と爲し玉ひたるものは、吾人敢て權利上之を吾人の有として望むことを得るなり、神が其子の死によりて以て吾人の有と爲し玉ひしものを、斷然信じて疑ふところなく、以て吾人の有として之を領收せんこと、是れ神の志にして、もし吾人吾人の有として此の如く之を領收せざらんか却て多少之を蔑如するものとなるべし、左れば吾人は神が降生によりて與へんと志し玉ふ利益を肅んで領收せざるべからず、不ずんば吾人は、彼が如き高價を拂ひて以て、吾人にして志さへ存せば右の利益を吾人の有と爲し得べからしめたるもの、即ち十字架上に於て吾人の爲に流されしキリストの血、吾人の罪の愆及び其惡結果を除き去らんが爲の犧牲を多少蔑如するものと爲るべし、人もし降生の利益の何たるを問はんか、吾人は畧左の如く答へんとす

(二)神キリストに在りて充分其神力を具へ以て公會に宿り玉ふ。

(ホ)神キリストに在りて充分其神力を具へ以て一個々々の信者に宿り玉ふ、而して其神力の多少は信者が一體の肢としてキリストの賜を受くるの多少と、信者に對して有し玉ふ神の善、且完全なる意志の高さとに比例すべし

(ヘ)信仰の生涯の原理は、自己の意志よりして全然神に信賴し、キリストに居りて愉らざることと是れなり、蓋し是れ吾人が神と共に働くといふの眞意義にして、此くてこそ神は吾人の不信仰に妨げられずして人(若くは全體として公會)に居ることを得、又其吾人の性を取りて降生し玉へる神子に與へ玉ひし能力を自由に示現し玉ふを得るなり。

(ト)吾人は此く謂ふと雖も、各個信者の全然聖化せらるゝこと、若くは彼が神の彼に對して有し玉ふ完全なる意志の頂點に到達することは、受洗者全體即ちキリストの一體を形くり、而して各個信者は其組成分子たる一般受洗者の團體の狀態と全く關係なしと謂ふにはあらず。

(チ)然れども神は信仰の所禱を聽き、之に應へんが爲め其能力に制限を附し玉はざるを以て、よく降生及び十字架の榮光を曉り、且つ神を信じて常に神が己に對して

有し玉ふ目的に充分到達せんと志し而してキリストの血は此く神の完全なる意志に達するの力を與ふるものと信じ、之を基礎として神に冀願するの人は其求むるところのものを得べし、蓋しキリストの血の流されたるが爲め、神は其志し玉ふ如く充分人の衷に宿り玉ふことを得、是れ其榮光なり、而して此流血は實に人をして其心中に、我は其求むるものを得たりと知るの信仰を抱かしむ、故に神は其物を彼の有と稱し玉ふなり、思ふに一般受洗者界の現今の弊風は各個信者に一時損害を及ぼすことと之れ有るべしと雖も、吾人は此かる損害の永遠に及ぶことなかるべきを信じて疑はざるべきなり

廿三　約論は以上諸編に述べたる全體の議論の解拆に外ならざるを以て再び玆に解拆を附するの要なきが如し

降生（インカーネーション）とキリストの死との干係を論ず

目次

第一、神は人の所願に對する眞正の目的者なり、……一
第二、神は其所願を人に寓せ玉ふ、(甲)……一三
第三、神は其所願を人に寓せ玉ふ、(乙)……二一
第四、神は人に對する自己の永遠の經綸を吾人に示し玉ふ、(甲)……三〇
第五、神は人に對する自己の永遠の經綸を吾人に示し玉ふ、(乙)……
以上の二大事實、即ち神の子化肉と其死とを比較するとき、何れが神の主なる目的なるや、……三八
第六、神が人に對して有し玉ふ目的は人の罪によりて左右せ……五一
第七、人の罪の結果を取去らんにはキリストの死を要すといふと、是れ即ち啓示の正當なる事件也、……六五
第八、罪に對する神の心狀の啓示(甲)……七五

第九、罪に對する神の心狀の啓示(乙)……九一
第十、人の贖はれ又罪より濟はるゝ其榮光は全く神のみに屬す……一〇九
第十一、キリストは罪なきも、罪の毒味及び苦痛を十分嘗むるを得たり(甲)…一二一
第十二、キリストは罪なきも、罪の毒味及び苦痛を十分嘗むるを得たり(乙)…一三六
第十三、キリストは其死に於て眞實に罪人と同視せられ、又實際罪の毒苦を十分味ひたりといふことを聖書を以て證す……一四八
第十四、キリストの死は、苟も罪あるもの神の聖潔なる御前に存すべからずとの明確なる決意を示すものにして、彼は此死によりて、神の義と眞とを公認せり……一七一
第十五、如何なる意味に於てキリストは萬人の爲めに罪の赦免を得しや…一七九
第十六、キリストの死が、人に對する神の心狀に及ぼす結果、神は其心に於て人と和らぎたることを告知し玉ふ……一八九
第十七、通常贖罪(アトーンメント)なる語を使用するとき、其意之によりて一個の教義を明示せんとするに在り其教義は如何……二〇二

第十八、化肉(インカーネーション)及び現在の權能、榮光を有するキリスト及び、キリストの死より來る恩賜……二一九
第十九、キリストの死は木だ神を信ぜざる人の心意に或結果を來さん爲なり、其結果とは如何……二三三
第二十、キリストの死は神を信ずるものゝ心意に或結果を來さん爲なり、其結果とは如何、(一)キリストの死は人が神に受容せらるゝ根據となる……二四二
第廿一、キリストの死は神を信ずるものゝ心意に或結果を來さん爲なり、其結果とは如何、(二)キリストの死は神の約束の一切渝ることなきを人に保證するものなり……二五二
第廿二、キリストの死の其降生に對する干係も正當に解釋するときは、其死は全く信者が自己に關して有し玉ふ神は完全なる意志を自ら成遂し得んが爲なることを知る……二六五
第廿三、以上の所論を約說す……二九七

降生（インカルネーション）とキリストの死との干係

第一　神は人の所願に對する眞正の目的者なり

吾人は思ふ、神の性質より觀るも、又神が人に賦與し玉ひし性質より云ふも、人の願ふところを眞正に滿足せしむるものは神自身ならざるべからずと、吾人は心と情とを具へて此世に生れ、之によりて吾人々間の事を知り、又吾人と各種の干係を有する他の一切の物を知ることを得るなり、されは人心の常として、吾人が生活する此世界の性質を研究するを喜ぶなり、即ち地球及び之を組成する物質上の元素を究め、遠く地層の成立に關する歴史を調べ、地上に生存し、水中に游泳し、空中に飛翔する草木、魚蟲、禽獸の事を講じて以て愉快を感ずるのみならず、進んで此世界と他の世界との關係を繹ね、之を天文學的の系統に組成し、以て大に興味を感ずるに至る、

且つや人の情も亦滿足せられずしては休せざるものなりしかして他の情と相交

通傳接することによりて此滿足を得、

されば吾人の同胞人類を知り、之に同情を表し、我、彼を愛し、彼、我を愛せんこと、是れ人性の至情なりとす、

然れども人間の心情兩がら尤も完全に遺憾なく、之を滿足せしむるものに至ては、神を措て外に之を求むべからず、神の造り玉ひし萬物を觀、其玄妙なる行爲を察し以て其智慧を研究するは人心の喜悅にして、神自身を知り、又其愛を悟ることは、人の情を滿足せしむるものなりとす、神は理性及意志を有し、善を喜び惡を忌み玉ふ有心者なり、夫れ善人の心情、意志を知るは善人の喜とするところなり、まして人幾分にても神の心情を解し、神と全く喜憂を共にし、神と相交通することを得んには、其喜悅果して如何ぞや、そは神は絶對的に善にましませばなり、此奇絶妙絶の宇宙に於て、人心を滿足せしむべき準備をなし玉ひしも神なり、吾人が切望する同胞相互の交通、同情及び親愛を吾人に賦與し玉ひしも亦神なり、神既に全く善にましませり、故に吾人は餘念なく彼を信ずるを得、神の愛は欠くるところなし、故に一切の害惡より吾人を淸はんとは其聖旨にてあるなり、加之神の能力は其愛の全きが如く全し、されば吾人彼を拜み、彼を讃め、彼を愛し、彼を信ずるに於て餘蘊なきことを得るなり、神は吾人の創造主なり、彼は吾人が享有する一切の好其なるものを造れり、吾人が望むなる一切の永遠の希望は、神の外に存することなし、豈啻此のみならんや、神は吾人を造るに方り、單に神の萬物を知り且樂むを得るの能力を之に賦せしのみならず、實に神自身を知り且樂むの能力を之に與へ玉ひしなり、神は此く自己を知らしめんが爲め吾人を創造し玉へり、既に是れ神が吾人人間を造り玉ひし目的なり、吾人が神の萬物のみを知り樂むを以て滿足すること能はざるは、職として此に由らぬはなし、吾人は吾人を有ち玉ふ神を發見する迄、天與の至福を全ふすること能はざるものなりとす、

吾人の心情は、吾人が全幅の禮拜と愛とを傾け、無限の信頼を寓するの價値を有する彼を知るに至らずんば、休せざるもの也、然而て吾人の靈魂が天性より此くまで仰慕する彼は、父と子と聖靈なる神にてあるなり、今神の自ら語り玉ふところを見るに、亦自己を以て人靈の至福と爲し玉ふを知る、彼はアブラハムに謂て曰く、(創世記十五章一節)「アブラムよ懼る勿れ我は爾の干櫓なり又甚大なる賚なり」と、成程日

本譯には、「アブラムよ懼るゝ勿れ、我は爾の干櫓なり、爾の賞は甚大なるべし」とあれども、之を譯して、「我(爾の神)爾の干櫓なり、又(我自身は即ち)爾の甚大なる賞なり」と爲す方正當なるが如し、何となれば吾人は、神が自身をアブラハムに與へ玉ひしことを知ればなり、此點に於ては今日の吾人アブラハムよりも一層深く神意を悟り得たるに相違なし、神はアブラハムに許すに非常の親昵を以てし、實に之を稱して「神の友」とまで謂ひ玉へり(創十八〇十七、歴下二十〇七、賽四十一〇八、雅各二〇二三)、神は此かる福祉をアブラハム在世の中彼に與へ玉へり、されども神が斯くアブラハムに己を與へ玉ひしことの中には、後世に啓示せらるべきことをも含有せしものなりとす、聖パウロが羅馬書八章十六、十七の兩節に於て、「聖靈みづから我等の靈と偕に我等が神の子たるを證す、我等子たらば又後嗣たらん即ち神の後嗣にして」といひ、直に之に續て、「キリストと偕に後嗣たるなり」といひしは即ち是なり、神は主イエス、キリストによりて吾人に近き玉へり、主イエスによりて神は實に肉の中に寓り、永へに人と偕に住し玉ふに至れり、主イエスは父と一にましませば、神の嗣業を完全に有し、其父なる神と親密なる交通を遂げ玉ふ、而して彼は吾人をして亦此の

如く神に親接するを得せしめ玉ふなり、

神がアブラハムに自己を與へ玉ひしや、其意終に神の子を與へて人と爲らしめんとするに在りき、而して此聖謨は果して十分に成遂せられたり、固よりアブラハムは神の賚の絶大なることを知悉し得たりしにあらずと雖も、しかも彼は信仰を以て主のキリストに就ける約束を認め、何時しか神が此く人間に與へらるゝの日あるべきを望みて喜びバラダイスより主イエス――吾人と同しき肉となれる神――を、見之を見て悅べり(約八〇五六)

しかして主イエス、即ち天より降り、信仰の生涯を送り、人生の制限に服從せる間も、其本體は天に屬し、天の事物を知り、他の人間が未だ曾て有せざりし親密なる交通を神に對して有し、又神を知り、且つ人の未だ曾て思ひ及ばざりしまでに人の需要を解せし者は、吾人に敎ふるに、眞正の生命を以てして言ひ玉へり曰く、「永生とは唯一の眞神なる汝と汝が遣し玉へるイエス、キリストを知る是れなり」と(約十七の三)蓋し主が此く敎へ玉へる永生とは、單に絶へず存在することを謂ふものにあらず、そは神を知らずして死せる惡人も、身體を具へて復活し、他の世界に於て永く存在

すべければなり(約五〇二八)、右に所謂眞正の生命とは道德上及靈性上完全の狀態を具へ、名譽、榮光及び福祉を享有して永遠に生活するをいふものなり、しかして此福祉たる單に神を知るによりて得らるゝのみならず、神を知ること其者は、實に一切の福祉の冠たり、又一切の福祉を包含するものにして、生命の花とも果實とも謂ふべきものなり、是れ實に生命を渴望する人間に取りても、將又た之を授與する神に取りても、共に價値ある生命にてあるなり、

然り而して吾人は主が此世を去り、且らく其弟子と肉體上相離別せざるを得ざるの時來れるに方り、其弟子に約束を與へて以て之を慰め玉ひし語は、即ち是れ神の約束たりしことを此に一言せざるを得ず、

吾人若し右の語を記憶せんには、直に主の語り玉ふところの眞意、父子、聖靈なる神が自己を與へて、親しく主の弟子と愛の交通を爲し、又弟子の敎によりてキリストを信ずるものと同じく愛の交りを爲さんとの恩賜に在ることを了解すべし、主其弟子と離別するの唯だ少時なるを說きて曰く、「我なんぢらの爲に所を備に往、もし往て我なんぢらの爲に所を備ば、又きたりて爾等を我に納べし、我をる所に爾等を

も居しめんとて也」(約十四〇二、三)、是れ豈に弟子がたゞ靈に於てのみならず、身體を具へて終に主と偕に在るべきことを約するものにあらずや、且つや此約束たる、又父の約束なり、そはキリスト敎へていひ玉ひたればなり、曰く、(七及九節)「もし爾等我を識ば我父をも識べし、今より爾等彼を知り、已に爾等彼を見たり、……ピリポ我かく久しく爾等と偕に在しに、未だ我を識ざるか、我を見し者は父を見しなり、何ぞ父を我曾に示せと言や」、且つやキリストが已を與へて其弟子と相交通するの親密なる吾人の理會力に超越するものなり、吾人にしてもし此福祉を理會せんと欲せば躬親ら之を實驗するの外なし、キリストは單に身體上吾人と俱に在るべきことを約し玉ひしのみにあらず、固より此く約束し玉ひしに相違なし、しかしてもし吾人終まで主に忠信ならんには、何時しか主の榮光を享けて榮光ある主と面を對して相見るときあるべし、されど主の約束は此に止らず、主は其弟子と偕に在るべきことを約せるのみならず、之を己の住所となし、其聖潔なる居宅となし、永へに之を去らざるべきことを約し玉へるなり、蓋しもし此實なかりせば、吾人主と共に天に坐するとも、復活して彼の父の家に在る幾多の第宅中に起居出入するとも未だ全

く吾人の心情を滿足せしむるに足らず、其飢渴は永く止まらざらんとす、主は言ひ玉へり、(十八、十九、二十、二十一、二十三節)我なんぢらを捨て孤子とせず、再なんぢらに就ん、……われ生れば爾等も生ん、その日に爾等われ吾父に在、なんぢら我に在、われ爾等に在ことを知べし、我誡を有ちて之を守る者は即ち我を愛するなり、我を愛するものは我父に愛せらる我も亦これを愛して彼に自己を示すべし、……イエス答て彼に曰けるは若人われを愛せば我言を守ん、且わが父は之を愛せん、我等來りて彼と偕に住べし、と、之を以て觀れば、父の中に在り、父又其中に在るなるキリストは、單に我等と偕に在のみならずして、彼は我等の中に在り、我等は彼の中に在るべしといふこと、是れ主の約し玉ふ賚なり、然らば則ち主は如何にして吾人の中に在るを得るや、曰く、彼は靈によりて此くするを得べし、神の靈は人なるキリスト、イエスの靈となり、靈は主イエスを其永遠の住居と爲すが如く、又吾人と俱に住り、限なく在ることを得るなり、主の約束し玉ふところも亦正に此の如し、曰く、われ父に求ん父かならず別に慰る者を爾等に賜て窮なく爾等と偕に在しむべし、此は即ち眞理の靈なり、世これを接ること能はず蓋これを見ず且しらざるに因、されど爾等は之

を識そは彼なんぢらと偕に在かつ爾等の裏に在ばなり(十六、十七節)、

神は靈を與へて人なるキリスト、イエスの靈となし、而して此靈は弟子を已が住居となし、永へに之と俱に在すが故に(固より此事たる大なる靈の奥義にして、之を十分了解せんには實驗せざるを得ずと雖も、二十節)主イエスは再び天より降り來り、其弟子のうちに住(とど)り、其心靈に自己を啓示し、以て其天性上仰慕して止まざる賜を之に與へ、其神より創造せられ、此世に生存する所以の目的を達せしめ玉ふを得、それは靈によりて主イエスの臨在し玉ふところには、父も亦た臨在し玉ひ、かくて人は其需要するところのものを得、其識らず知らず、飢渴して求むるものを有すればなり、換言せば、其神を有するに至ればなり、

吾人は今我等の主が發し玉ひし右の大敎語の深意を悉く究めんとするにあらず吾人は今唯一個の眞理を證明せんとするまでなり、吾人の問題は曰く、神の最上の賚は何ぞや、是れなり、吾人は信ず、主イエスが此世に生れ、此世に降臨せし所以の事業を成すべき時既に近づき、十字架及びゲッセマネに於ける暗澹たる秘痛の蔭、夙に其靈を蔽ふの時に方りては、主

の思ふところ、語るところ、必ず事物の中心、骨髓に徹すべく、且其尤も親愛する忠信の友に、慰籍、平和、喜樂、祝福の約束を與ふるに際して、神の恩惠の寶庫よりして、其至貴至重のものを出して之に與へ玉ふべしと、然らば主イエス神の賜の中至大なるものを以て其信徒、其朋友、其僕、其弟子、其兒子を祝せんとするに方り、果して何者を與へ玉ひしや、曰く、彼は「彼自身」を與へ玉へり、彼の與ふるところ之に外ならざりき、然らば彼が與ふるところは何故之に過ぎざりしや、曰く是れキリストは神の賜の全體なればなり、否彼單に己が自ら有するところを全く與へたるに止まらず、實に父の有し玉ふところを全く與へたるなり、

そは主イエス自己を與ふるや、取も直さず神を與へたるものなればなり、彼は實に自ら斯く明言し玉へり、曰く、「神は其獨生子を世に賜ふほどに世を愛し玉へり」(約三〇十六)と、而してもし人信ぜずして此くまで大なる寶を受けざるあらんか、かゝる人は罰せらるべし、其罰せらるゝ所以如何と問はゞ、全く「神の獨生子の名を信ぜざるに在り」(十八節)、神の愛は大にして何物と雖も慳みて人に施し玉はざるなし、彼は吾人に彼の賜の全體を與へ玉ふ、そは自ら其裏に住するなる其獨子を吾人に與へ、獨子を吾人に與ふるによりて、自己を吾人に與へ玉へばなり、

主イエスの思想は實に右の如し、しかして神の思想も亦之に外ならず、神が吾人に與ふを得べき至上の賜、否神の無限の愛を以て吾人に與へ得べき一切の賜は、主イエスが圓滿充溢なる靈によりて吾人の裏に住らんと約し玉ひし此恩賜の外に出でざるを見るべし、成程神の約束はすべて大にして又貴きに相違なし(彼後一〇四)、彼は吾人に平和を與へ玉ふ、彼は吾人に喜樂を授け玉ふ、彼は其攝理によりて吾人を看護し玉ふ、彼は其全能力を以て吾人を防衛し玉ふ、彼は吾人に身體上、道義上、靈性上の完全に達するの望を與へ玉ふ、彼は吾人に白衣を約し、勝利の棕櫚を約し、冕を約し、王位を約し玉ふ、然れども此等一切の約束を包含し、此等一切の約束の源なる、即ち此等一切の約束の總計たるものは、靈の賜及其臨在によりて自己の子を與へんとの神の約束に在りて存す、夫れ神、吾人のものとなり、吾人又神を知り、神を愛し、其道義的及靈性的の像に肖せられ、同情に於ても、愛に於ても、欲望に於ても、意志に於ても、悉く神と一なるに至らんこと、是れ豈に吾人所願の目的にあらずや、神は吾人の需要を知り玉ふ、しかして彼は彼自身が吾人に對する賣にして吾人の賞

たり、吾人の希望たることを告白し玉へり、神意もし此の如しとせば、吾人の意も亦此の如くならざるべからず、吾人の靈をして神の與へんと約し玉ふところを追求して止まざらしめよ、そは神自己を吾人に與へ、此世と永遠の世とに於て、吾人を滿足せしめ玉ふべく、又神を有するにあらずんば、吾人は到底滿足することなかるべければなり、

第二　神は其願を人に寓す（甲）

聖書によれば、神は愛なることを知る、使徒聖ヨハネ一言以て神の德性及靈性を掩はんとするや、彼は言へり、「神は愛なり」（約壹四〇八、十六）と、されば論ずるものあり、曰く、神既に愛なるが故に、キリストの教へ玉へる如く、一體の神の中に三位あらざるべからず、そは神もし愛なりとせば、未だ世界の造られざりし前、其愛を寓すべき者あらざるを得ざる道理なればなり、しかして神の愛の目的者たるものは、實に聖三一中に在る諸品位たらざるべからず、即ち父は世界若くは何物も未だ存在せざるの前、子を愛し、子は父を愛し、しかして多福なる聖靈は永遠の昔より父と子を愛し、又父と子に愛せられ玉ひしなりと、是れ其論旨なり、

されば神が德性及靈性を具へたる生類を創造し玉ふや、吾人は信ず、是れ神其愛を此等生類に澆き、之を祝し之を幸福ならしめ、神が之に與へ玉ひし性質の許すかぎり、之を至完至全の狀態に達せしめんが爲めにして、神此等生類を愛し、生類も亦神を愛せんが爲めなりしことを、蓋し愛は愛を求む、愛にしてもし求むるものありと

せば、世に唯一のものあり、即ち愛是れなり、されは神、御性及靈性を具へたる存在者を造り玉ふや、此かる存在者が己を愛せんことを欲し玉へり、

然り而して神は萬象の長、神智神力の妙工として人を造り玉へり、吾人が此く言ふは、決して人間の外に御性、靈性を具へ、又睿智を有する被造者ありて、諸種の能力を稟有し、光の中に住し、神の面を親、神の榮光を反映し、其聖旨を將ふるとあるを度外視するにはあらず、神の使者は即ち是れにして、使徒聖パウロが稱して政事と、權威と、能力と、宰治とを有するものと謂ひ、天上に在りて自ら政治たり、能力たるものと謂ふは、之に外ならず(以弗所一〇廿一及二〇十)、

然れども吾人は信ず、よし人は其現生の狀態に於て天使より卑きにせよ(希二〇七)、神の萬物を支配せんが爲に創造せられ(希二〇八)、最も榮光ある天使に超へたる運命を具へたるものなることを、吾人が此く信ずるは、單に聖書が此く言ふ故のみにあらず、特に主イエスなる一人の人間が、人間として死より復活せられ、現生にも來世にも、一切の名に超へたる名を與へられたりといふ事實に基く者なりとす(弗一〇廿、廿一)しかして彼を信ずる吾等は、彼と同一の生命及聖靈によりて、彼に合せられ、吾等彼と一體を成し、彼の在るところに吾等も亦あるに至るべきものなりとす(約十四〇二、三、弗二〇六、七)、加之、彼は自ら王位に坐するが故に、吾等を招きて、彼と此榮を分たしめんとまでなし玉ふ(默三〇廿一、一〇六)、吾人が主イエス、キリストと合體すること此の如し、故に吾人は信ぜざるべからず、人は愛に進むの能力に於て、かの神坐を圍り、晝夜休むことなく、以て神を熱愛し、讃美し、禮拜する天使に勝るものありと、

何となれば燃るケラビムも、焰に充つるセラビムも、將た何等の至高なる天の權力も、其神に親近なること我等の主イエス、キリストにおよぶべくもあらず、キリストは吾人と均しくせられ、全き人たりしと雖も、又自ら神にして、神としては聖三一に屬し、父と一なりければなり、しかして吾人はキリストが父と一なるが如く、キリストに合して一となれるものなりとす、是れ實に至深の奧義にして、人智を超越せる榮光といふべきものなれども、吾人は實に此く招かれたるものにして、父が吾人を救はん爲め子を遣はし、以て吾人に與へ玉ひし恩惠は此の如く大なるなり、吾人は主が吾人の爲め父に所願し玉ひたるときの語を疑はずして信ずることを得べ

し、曰く、「此はみな一にならん爲なり父よ、爾われに在われ亦爾に在、かくの如く彼等も我等にをりて一にならん爲、かつ世をして爾の我を遣しゝ事を信ぜしめん爲なり、爾の我に賜ひし榮を我かれらに授けたり、此は我儕の一なるが如く、彼等も互に一にならん爲なり、われ彼等に在、なんぢ我にをる、蓋彼等をして一に全ならしめ、且世をして爾の我を遣しゝこと、又なんぢ我を愛する如く彼等をも愛することを知しめんと也」(約十七〇二一ー二三)、されば吾人が主イエス、キリストに合するの故を以て、神は其他の被造者に對するよりも、一層親密に吾人に對するとを得、故に吾人は天使と異にして、靈により神の殿たり、住宅たることを得るなり(弗二〇廿一、再後六〇十六、十八)、かくて吾人は他の被造者が有すること能はざる親密の干係を神に對して有するを得、「それ彼によりて我等二者(即ち一たびキリストに合せるときは猶太人も異邦人も共に)一の靈にありて父に近くことを得るなり」(弗二〇十八)、「此故に兄弟よ、我等イエスの血によりてその我等の爲に開たる新しき生路より幔なる其肉體を過り、憚らずして至聖所に入ることを得かつ神の家を理る大なる祭司あれば我等誠實の心と疑を懷かざる信仰を保ち……(神に)近くべし」(希十〇十九ー二

十二)、右に引きたる聖語中に所謂「至聖所」とは卽ち是れ神の直接に臨在し玉ふことをいふものにして、主イエスは所謂「新しき生路」なり、吾人もし主イエスと一體となりて以て彼に合し彼吾人のうちにやどり、吾人彼のうちに住るときは、吾人を妨げて視るべからざる神を視せしめず、又十分に神と交通せしめざる幔幕を通過することを得べし、何となれば吾人の神は多福にして唯一の君主、王の王、主の主、人の近づくべからざる光に在して已れ獨り永生を有ち、人之を視しことなく、又視ることを能はざるものなりと雖も(摩前六〇十五、十六)、之が爲め、主イエスと一體なる者に絕へず益々明かに己を啓示し玉ふ神の榮光を妨げらるゝことなし、そは主は神の「語」と稱せられ玉ふ、是れ神の顯現、啓示の意なればなり(約一〇一ー十四)、彼は自己を與へて人となり、以て天性上眼もて視るべからざる神を啓示し吾人をして肉眼もて神を視、神を眺め、吾人の手を以て之に觸るゝことを得せしめ玉へり(約壹一〇一、二)、しかして神の顯現たる主イエスは、人の心情に自己を啓示することを能くし玉ふ(約十四〇二一、二三)、吾人は彼を知るによりて智慧と啓示の靈を領けキリストによりて神に關する理解力を開發せられ(弗一〇十七ー十九)、吾人に與へらるゝ靈の賜

に由りて自由をうく、錄して「主の靈のあるところには自由あり」とあるが如し(哥後三〇十七)、所謂自由とは果して何ぞ、曰く、面を覆ふことなくして主の榮光を視るの自由、是れなり(十八節)、右の引用をなせる章卽ち哥林多後書三章を檢すれば、吾人使徒パウロが舊約默示の榮光と新約默示の榮光とを相比較するを見る、今舊約默示によるときは、何の時を問はず幕屋の中の至聖所に入り、恩坐の上に鬚ける榮光の雲を視、直接に否殆んど面を相對し、友人相互に語るが如く神と相交り、神の榮光を歸視したるより、自己の面も其榮光を反映し、光輝赫々、人視て以て彼が至聖所に到り、神と交り、民衆に布くの誡律を受けたるの徵となせしまでの人は、唯一人に過ぎず、此く何の時を問はず神の許に到りて其榮光を視るを得たる唯一の人は、實にモーゼにてありき(埃二十五〇二二)、然れども其他のイスラエル人に至りては、何人と雖も至聖所に入ること能はず、たゝ一祭司長ありて僅に一年一回此に入ることを得たるのみ(希九〇七、利十六〇二)、

若し夫れ新約默示に至りては然らず(パウロの論なり)、其榮光や、靈によれる榮光にして、しかもモーゼの如く一人のみ神の榮光を視るにあらず、「吾等はみなことごとくキリストにあり、キリストの靈を有てるものにして、帕子なくして鏡に照すが如く主の榮を見、榮に榮にいや增りて其おなじ像に化るなり、これ主すなはち靈によりてなり」、されば吾人は今の時と雖も尙ほ視るべからざる神の榮光を視るの自由を有す、加之吾人は不朽不死の體を具へ、以て吾人が今想像し若くは堪ふること能はざる赫々の榮光を有する主イエスを視るの時を望み佇つ(約壹三〇一、二)、

然り而して神は愛なり、神を啓示する神の「語」たる者は、神の愛を啓示するものに外ならず、しかして神に最も近く親接し、炳赫たる神の榮光を視る吾人は、神の本體の果して如何なるものなりやを悟了するに最も適當の資格を有し、其愛の榮光を視るに極めて恰當なるものなりとす、しかして吾人が此く明白に、此く親密に神の榮光を視るは、吾人をして此愛の性質に於て神に尤も肖せしむるものにてあるなり、何となれば(哥后三〇十七、十八)吾人を變じて層一層神の愛性に同化せしむるは、實に神の愛を目擊するによればなり、(神は愛にして、愛は神性の榮光なりとす)、換言せば、神が主イエスの再び臨るとき、彼によりて自己を啓示せんその際、吾人は神を視て、神に肖るものとせられ、愛に於て之に肖るものとせられ(約壹三〇一、二)、尤なきも

の、愛に於て瑕瑾なきものとして神に獻ぜらるゝを得べし(猶二四、弗一〇四)

第三　神は其所願を人に寓せ玉ふ（乙）

吾人は自ら省みて吾人が神に對する愛の貧弱なるを感ずることあるべし、然れども人の子にして又神の子たるものに合し、此く合するが爲め、妨げらるゝことなく自由に神の面前に近くことを得、されば吾人は確信するを得べし、吾人は此く彼に合するの恩惠により、神を知り、神を愛するに於て、進歩の器量を無限に有し、隨て彼の道德上及靈性上の像に化すべしと、故に神は限なく大に且榮光ありと雖ども、已に對する人の愛を以て、自己の眼に甚だ貴重のものと見做し、之を切望して止まざるを耻辱と爲し玉はざるは職として之に由らずんばあらず

然り而して聖書は神が人を慕ひ玉ふの語を以て充滿す、出埃及記十九章四、五節に於て神はイスラエル人に告ぐるに、其親ら彼等を埃及より導き出せること、及びもし彼等神の聲を聞き、其契約を守らんには、他の人民に超へて其特別の寶たるべきことを以てし玉ふ、神が己を愛し、己に順ふ民を重じ玉ふことは、猶ほ人が珠寶を貴ぶがごとし、申命記卅二章八、九節にも之と仝一の意を示す語あり、曰く、「至高者人の子

を四方に散して萬の民にその產業を分ちイスラエルの子孫の數に照して諸の民の境界を定め給へり、エホバの分はその民にしてヤコブは其產業たり」と、それ地は主のものなり、そは主之を造り給ひたればなり、しかして主は之を諸民に分與して之を所有し、之を樂ましめ給ふ、主の仁愛此の如く大に、其他を代價なく賜へ給ふ程なりと雖も、到底他に與ふること能はざるまでに貴重なる一個の產業を有し給へり、是れ靈モーゼによりて言ひ給ふところなり、地は絶美なり、されど主は物質的のものに心を注ぎ給はず、主の慕ひ給ふところは之と異なり、之に比して無限に優れるものなりき、主の愛を滿足すべき唯一のものは、彼を知り、彼を愛する人民にてありしなり、されば主は萬のものゝ中よりして其民を撰びて己の分とし給へり、即ちヤコブ、神のイスラエル、更に之を言へば、神に順ふ忠信なる人は、主が其產業として慕ひ給へるところなりき、

詩百三十二篇十四、十五節も亦いふ、「エホバはシオンを撰びておのが居所にせんとのぞみたまへり、曰くこれは永遠にわが安居所なりわれこゝに住んそはわれ之をのぞみたればなり」と是豈に聖靈、神が安居の所、永遠の邸宅を求め以て晏然永く樂居せんと欲し給ふを示し給ふ、しかしてかく神が望て擇び給ひし場所はシオンなりと謂ふ者にあらずや、シオンはエルサレムにある聖丘にしてソロモンの殿其上に立てり、しかしてシオンなる語は舊約書に於て該殿堂及び主が殊に其臨在を顯はし給ふ場所を稱するに用ふ、然れども吾人は茲に引用せるが如き聖語(詩百卅二〇十四、十五)を解するに新約全書の光明を借るとを得るの特權を有す、しかして此くの如くして解するときは、幔幕を有し、門戸を有し、板を有し、其他の器具を有する物質的の幕屋若くは殿は、人の造らずして、神の造り給ふべき一層大にして完全なる幕屋の豫表、標號に過ぎざるを知る、(希八章一十章)然り而して此舊殿は既に廢せられ、新殿は今や建築最中なりとす、蓋し此新殿の建築は、主イエスによりて神肉となり我等の間に寄り給へるとき(約一〇十四)其端を開きしものと謂ふべし、彼は物質上の殿を以て人の肉眼に表示せられたる一切の約束を成就せんが爲に來れり、そは物質上の殿は其燦爛たる外形、儀式を有せしもたゞ後に築かるべき眞殿の標號、約束に過ぎざりければなり物質上の殿の存在する理由は、神子の世に臨り給ふときに對して證せんが爲めなるに在りき、されば主は言ひ給へり、(約二〇十九―二十)

「爾等この殿を毀て我三日にて之を建んと曰ひければユダヤ人いひけるは此殿を建るには四十六年を經しに爾三日にて之を建るか、

イエスの如此いへるは其身の殿を指るなり」神は眞實に人なるキリスト、イエスの中に住り玉へり、しかしてペンテコステの日此人即ちイエス、キリストによりて聖靈、父の許より降り玉へるとき、神は聖靈によりて他の人々にも住ることを得玉ふに至れり、されば キリストは宣へり、「彼即ち聖靈爾等と倶に在り」(約十四〇十七)しかして「我即ち主イエス爾等の裏に在るべし」(二十節)と、パウロも亦言へり、「汝等の裏に在すキリストの靈」(羅八〇十一)、又曰く、「汝等は神の殿にして神の靈汝等のうちに在すことを知らざるか」(哥前三〇十六)と、又曰く「爾等の身は爾等が神より受けたる爾等の裏にある聖靈の殿なることを知らざるか」(哥前六〇十九)と、又曰く、「それ爾等は活神の殿なり神かつて我彼等の中に住り且あゆまん我かれらの神となり彼等わが民とならんと曰給ひしが如く」(哥後六〇十六)と、神の擇び玉へる住居は之に外ならず、是れ神の安居場なり、是神の望み玉ふところなり、是れ神が永へに住ひ玉はんとするところなり、換言せば、神が贖ひ、主イエスに導き、主イエスに與へ玉へる人の

身體と靈とは神の住所にして、此かる人は聖靈の力によりてキリストに一體となり、以て教會、殿、神の住居を形くるものにてあるなり、

且つや主も(馬太十三〇四五、四六及四四)其人を視ること高價の眞珠を視るが如しといひ、又之を畑に埋め隱したる寶に比するに躊躇し玉はざりき、我等の主の深遠なる語は種々多樣に適用するを得べく、隨て吾人は主の比喩を幾樣にも解するを得べし、吾人は主の意の此の如くなるを疑はず、されば人もし以上の二比喩を釋して、是れ人天國に入らんために如何なるものをも犧牲として、即ち其有するものを悉く賣りて不可なしとの意にして、天國の價値を說けるものと謂ふとも、吾人決して其非難すべきところあるを知らず、然れども吾人を以て是れば、該比喩の一層廣大なる適用は、神が人を愛するの大なる、人が神より離れ神より迷ひ去り、永遠の死の難に瀕せるときすらも、之を慕ひ玉ふことを說くに在りと爲さゝるべからず、知らざるところなきの神其聖眼を放ちて萬衆を視、己が造れる一切の生類の可能性を知り、人間に賦し玉ひたる運命を知了し、其神を知り、神を愛する器量を具ふることを思ひ玉ふ、人は實に自己を賣りて惡を行ひ、神を知れば其眞正の生命を得んに、

此知識を失ひたり、されど人は神に取りて高價を有するものにてあるなり、然り、其高價なること、神をして自己の榮光を捨て、己を謙虛にし、十字架の苦痛と耻辱とを忍びてまで人を贖はしむるに至れり、人墮落せりと雖も其中尙ほ恩惠と榮光の可能性を有するを明知し得るは惟り神のみなり、而して神は之を明知し玉ひ、其中に隱れたる寶の爲めに神は世を贖ひ玉ひたりき、

是れ豈に當然の事にあらずや、我等の主イエス、キリストの父にして、我等自己の父なる神の慕ひ玉ふところのものは何ぞ、もし彼、父にして吾人を創造し玉ひたりとせば、彼が戀々として慕ひて恥ぢ玉はざるものは何者なるべき、

問はずして知る、神の己の父たるを知り、己の神の子たるを知るものゝみ能く爲し得べき充分の對應なることを、吾等の父なる神が求め玉ふものは子たるものなり、神の慕ひ玉ふものも、神が其愛憐を垂れて戀ひ玉ふものも亦子たるものなり、吾人は全能者の子女たるの運命を有す、何ぞ其榮光の大なる、吾人は神子たるの大特權を有するを得べし、何ぞ其希望の無邊なる、神が吾人の胸中に揺起するを得玉ふ孝順の念、喜悅感謝の情は眞に大なる哉、吾人をして暗黑を去り、悖戾の情を正し、以て

再び吾人萬民の父なる神と至親至密の交通を爲さしむる神の智慧は如何に測るべからずして、其勢力は如何に大なるかな、請ふ看よ、吾人が悲慘なる隸屬の狀に沈淪せしとき、神は時の滿てるに方り、其子を降し、婦より生れしめ、律法の下に置かれしめ、かくて律法の下にある者を贖ひ、以て吾人に神の養子たるの賜を與へ玉ひしにあらずや、吾人が此く養はれて神の子とならんが爲め、主は死て復た活き、再び父の許に昇り玉へり、しかして父の約し玉へるもの卽ち聖靈を神より受け、之を其信者に與へ玉ふ、これ信者聖洗の水に於て靈に因て生れ、主イエス、キリストの肢となり、彼と一體になり、彼信者に在り、信者彼にあり、獨生子の肢として、信者の眞正の位置、永遠の資格卽ち神の子たるの地位を全ふせしめんが爲めなり、信者かくの如く養はれて神の子となるの大業既に卒れば、之に次で他の大業又成遂せられざるべからず、しかして之を成遂ぐる力は神の智慧、神の權能において適當なる事なり、然らば、キリストの肢たるものゝ衷に行はるべき大業とは何ぞ、曰く、信者をして獨生子と全一なる孝順の心を懷かしめ、聖書に錄して父の心より來り玉へりと稱する聖子の胸裡に湧き出でゝ父の愛に對應すると同一の對應を、此等信者の冷淡にし

て愛なき靈に攪起すること、即ち是れなり、此れ所謂主イエスに合して神の養子となれるものゝ衷に行はるべき大業なり、然り而して此偉業を爲すの勢力は能く此偉業に堪ふるものなり、然らば其勢力とは何ぞや、曰く、全能者、吾人の中に在る神の子、是れなり、神其神智を以て自ら吾人の中に住るの法を案出し玉ひ、父の許より、降り、父を愛し、父の旨を成すを悦び、十字架の上に自己を獻げて悔ひざりし聖子は、今吾人の腦はれたる心靈の中よりして父なる神の面を仰ぎ視ることを得、子として有する一切の不磨の愛、崇拜、仰慕を父の心胸に通ずるを得玉ふ、しかして彼は全能を有し玉ふが故に、吾人の心意を制して自己の心情を全く相同情交通せしめ、終に神を愛慕する自己の念を吾人の心胸に徹せしめ、以て吾人の言ひ難きの願望となさしめ玉ふ、

聖パウロが聖靈のことを語るとき、「且なんぢら既に子たることを得しが故に神その子の靈を爾等の心に遣りアバ父と呼しむ」といひしは、即ち已上の意を言あらはせしなり、吾人養はれて神の子となり、聖子吾人のうちに住り、吾人父に對して彼と同一の心情を有するに至らんが爲め、神は吾人に靈、神の靈、我等の主イエス、キリストの靈を與へ玉へり、(加拉太書四章一節より七節迄を參看せよ)

吾人は此の如き子となるを得、神父の愛を以て其所願を人に寓せ玉ふも亦宜ならずや、

第四　神は人に關するその永遠の經綸を吾人に示し玉ふ（甲）

吾人は神が宜しく啓示すべからざるものと認め玉ふことを窺ひ知らんと企つるの權を有せず、もし不可視世界の過去に屬すること若くは其將來に屬することにして、神之を啓示し玉はざることありとせば、そは吾人が今此かる事物を知り得るの能力を有せざるか、又は此かることを知るときは、吾人の益となるよりも寧ろ害となるか、何れか其理由ならざるべからず、されば神の偉僕モーゼはいへり、隱微たる事は我らの神エホバに屬するものなり（申命記二十九〇廿九）と、されども神吾人に何事にても啓示し玉ひたりとせば、此かる啓示ありたりといふ事實其者は吾人に保證するに、吾人は此く啓示されたることを知るの能力を有し、且つ之を知るよりして吾人の本分を盡すに一層の力を得べきことを以てするものなりとす、されば モーゼ、隱微たる事は我らの主エホバに屬すといひたる後直に語を續で曰く「又顯露されたることは我らと我等の子孫に屬し我らをしてこの律法の諸の言を行はしむるものなり」と、

然り而してキリスト及び其使徒等が、永遠の昔に形くられ、又確かに將來に成遂せらるべき神の經綸を吾人に敢へ玉ひたることは疑ふべくもあらず、しかして神がかく其高尚なる經綸を吾人に啓示するも不可なしと認め玉ひしことを、可成十分に理會せんと務むるは、吾人の特權にてもあり、又責任にてもあるなり、何となれば此かる理會は吾人をして神の愛の絶大なることを一層よく了知せしめ、其智慧の高遠にして、其人を親愛し玉ふ聖旨の萬古不變なるを信ぜしめ、且神は元始にかくなさんと決意し玉へることを實化するの能力を有し玉ふことを覺らしめ、以て其心情に深く安心するところあらしむればなり、

さて神吾人に其經綸を啓示して告げ玉ふところ如何と察するに、人を創造するといふことは、世界の存在以前に抱き玉ひし思想なるを知る」

聖徒パウロ神の經綸の啓示に對して神を讃美して曰く（弗一〇三、四）、神卽ち我等の主イエス、キリストの父は頌べきかな彼キリストによりて諸の靈の恩を以て天の處にて我等を已に惠みたり、それ神我等をして其前に聖く疵なからしめん爲に世

基を置ざりし先より我儕をキリストの中に簡び」と、又提摩太後書一章八、九節に於て敎へて曰く「爾我等の主の證をなしゝことゝその囚人なる我らを恥となす勿れ惟神の能に循ひて福音の爲に我と共に苦を忍ぶべしかれ我等を救ひ聖召を以て召玉へりとこれ我等の行に由にあらず惟神をのが言と世の成らざりし先よりキリストイエスの中に我等に賜ひし恩惠に由なり」と、パウロ又羅馬書八章二十八節に於て、神を愛するものを稱して「神の旨によりて召かれたるもの」と謂ふ、しかして、吾人が前既に引用せるところの該使徒の語に照して之を考ふるときは、此に所謂神の旨なるものは時間の中に形られたるものにあらずして、大古、否永遠の昔より成れるものなるを知る、パウロが提多書一章二節に於て、「謊なき神の創世の前に約束し給ひし永生を望めり」といふも其意皆仝じ、

卽ち知る人を創造せんとは是れ創世の前神の聖旨なりしことを、是に於て吾人は問はざるを得ず、曰く、神の子の降生は、人に對する神の永遠の經綸の一部を成せしや否や、是れなり、然り而して吾人は毫未の疑なく、然りと答ふるものなり、

吾人が以上列擧したる聖句の意如何と尋ねんに、一言以て之を掩ふべし、曰く神が

キリストを遣さんとの思想を形り玉ひしは、其人を創造せんとの思想を發し玉ひしと仝じく永遠なりと、

吾人の希望たり、生命たり、聖書も基督敎會もベツレヘムに誕生ありし以來幾世紀間、キリストと稱し奉るものは、是れ實に神の子にして又人の子たるなり、彼れは神人兩性を獨一の品位中に具へ玉ふ、吾人が獨一の品位といふの意を簡單に述べんか、是れ小兒として生れ、小兒として智慧と年齡とに於て進歩し、壯年に至りて福音を說き、普く行て善を爲し、十字架の上に死し、死人の中より復活し、天に昇り、今人として父の右に坐し玉ふもの、卽ち吾人と同一の人性を具へて以上の如く爲し來り又今爲しつゝあるものは、永遠の昔より神の子たり、光よりの光、眞神よりの眞神、造られずして生れ、體に於ても、能力に於ても、榮光に於ても父と一に、父と同じく永遠にして創造せられたることなき神性を有するものと同一の品位を具へ玉ふとの義にして、永遠の昔より父と俱にありし者は、人として生れ、死し、復活せしものと品位を同ふすといふに外ならず、されば聖書は聖子の降生前若くは降生後に於けるものとして聖子のことを語るとき、其降生以前と雖も、尙ほ之を稱

してキリストと謂ふを見る、是れ毫も不可なきところなりとす、例せば聖彼得が(得前一〇十、十一)主イエスの世に出現し給へる以前の古預言者によりて語り給へる靈を稱してキリストの靈と謂ひたるが如し、彼はいへり、此等の預言者等は「その裏に居るキリストの靈キリストの受けんとする苦難と其のゝち得んとする榮を預じめ證したる此は何の日いかなる時を示せると推究ねたり」と、しかして茲に子の靈(かくいふは聖靈は永遠の昔より父と子の靈なるが故なり)がキリストの靈と稱せらるゝは神に膏を沃がれ、吾人の救主として遣はされたる人、即ちキリストとして後に世に生るべき者の靈として此く稱せらるゝことは明白にして疑ふべくもあらず、

若し夫れキリストといふ語は、之を其非造、永遠の神性を具へ、父と同一の全能全智を有する聖子に適用すべからずして、人となり、吾人と同一の人性を具へたる聖子に適用すべきものなると、及びもし神の子吾人の爲めに人となることなかりせば、彼は到底吾人の爲めキリストたることなかるべく、又キリストなる稱號を得ることなからんといふことに至りては、今更吾人の喋々するまでもなきことなり、

故にもし吾人にして神がキリストなる思想を發し給ひしこと、人なる思想を抱き給ひしと全じく永遠なりと言ふとせば、吾人の意味するところは左の如し、曰く、子の降生は神が吾人に對して有し給ふ永遠の經綸なり、即ち神の永遠の獨生子が天より降だり、我等の性を採り給ふとの神の思想は、人を造らんとの思想と同時なりしなりと、是れなり、

吾人が以上已に引證せし文句を參看せば、此意を明かにするを得ん、(弗一〇四、摩後一〇九、羅八〇廿八、提多一〇二)パウロは此等の處に於て、吾人が創世以前に簡ばれたることを言ふに相違なきも、彼は吾人が簡ばれたるはキリストに在りて然るものなるを說くを忘るべからず、神の永遠の經綸に於て、人となれる神の子は、吾人が存在するの前已に存し給ひしはざるべからず、神が其思想の中に吾人を簡び給ふ前已に降生的子存し給ひて、吾人は彼の中に發見せられ、彼によりてのみ(神の吾人に關する永遠の思想に於て)存在を有するを得るなり、神は世界の始まりし以前、吾人に生命を約束し給へり、然れども彼は此く約束するとき其心に吾人の爲めに與へらるゝキリストを思ひ給へり、吾人は此キリストの中に又キリストによりて生命を得

るなり、神の恩寵に於けるも此の如し、彼は其恩想の中に先づ恩惠の泉を備へ、玉へり、しかして此泉はキリストとして世に生るべき神子なりしなり、果して然らば神の思想の順序上、其創世前の經綸に於て、吾人を創造し、吾人を存在せしめ玉ふの前其子を與へ玉ひしことを疑ふこと能はず、

吾人は今より更に神の玄妙の經綸に存する他の大事實を考察せざるべからず、大事實とは何ぞや、曰く、右に述べたる神のキリスト、神の愛し玉ふ獨生子が地上に於て死し玉ひしといふこと即ち是れなり、吾人は知る、神が此世界及び他の世界を造り玉ひしは其子によれることを(希一〇二)、又知る、此美はしき地球の造らるゝや、曉天の星共に歌ひ、神の諸子歡呼せしことを(約百卅八〇七)、然るに此等神の諸子即ち聖なる天使等にして、聖子によりて生起せられたる此地球が之を創造し玉ひたる者を埋むるの冢となり、天の喜悅たりしもの地上に死するのみならず、其死するや、人の嘲弄を受け、唾きせられて恥辱を受け、疲勞れ、魂憂ふるの慘あるべしと聞かば、如何、彼等は殆んど之を信ずべからざるものとせん、

此かることの信じ難き觀あるは疑ひなく、此かる事實の奇異莫大に見ゆるも實なり、然れども必ず此くあるべしとは神の經綸なりしなり、

吾人にしてキリストの死も亦神の前知し玉ひしところなるやを問はんか、之が答辨は前と同じ、曰く、然りと、是れなり、

聖ペテロ(彼前一〇十九、二十)キリストにつきていふ、彼は世の基の置かれざりし前預定せられたるものにして、此終の日に吾人の爲めに顯はされ、吾人は彼によりて神を信ずと、しかしてペテロは(十九節を看よ)キリストが吾人の爲め瑕なく汚なき羔たらんが爲め、創世のときより豫定せられたるかの如き語調を用う、默示錄に於ては聖ヨハネ一層明白にキリストにつきて言へり、曰く「世の基の置かれしときより殺されし羔」と、(默十三〇八)

第五　神は人に對する其永遠の經綸を示し玉ふ、（乙）

神の子の降生と神の子の死との二大事實中、何れが神の第一の目的なる、神は人間の道義的統治者なるが故に、人を支配するに其道義上の行爲を問はざるが如きことを爲し玉はず、そは神の約束のみならず、時としては神の決意までも、人の行爲如何によりて定められるゝことは、其吾人に告知し玉ふところなればなり、イスラエル人の歴史を觀るに、神の約束の人民の信仰、從順如何によることを示すもの枚舉に遑あらず、神の決意し玉へることにして、終に其實行を見るに至らざりし極めて顯著なる例を擧げんか、神が預言者ヨナによりて、四十日のうちにニネベの滅亡すべきことを宣言し玉へることは是れなり、（ヨナ書を看よ）、然るに實際上彼の大市は破滅の難を免れ、其存在の時日を長くせられたりき、されば吾人此の如きを見て、神は輕躁にして定志なく、變り易く、移る影の如し（雅一〇十七）といふべきか、極めて不らずニネベ滅亡の宣言は悔改めざる人民に對して發せられたるものなり、然るに其後彼等は悔改めたり、既に彼等悔改めたりとせば、神は悔改めず、罪を犯して變せざる人民に向て宣言せし罰を、悔改めて斷食し、麻を衣、灰を戴き、眞實に懺悔、悲痛の情を以て神に歸る民に蒙らしめざるべからざるか、否、然らず、彼等既に悔改めて其罪去れりとせば、ニネベ市破壞の宣言は、之を取消すことを得べし、

神が其祝福若くは刑罰の目的を宣言し玉ふや、其性質に於て條件的なること此の如し、此理たる、第四編に於て論ぜしところ、即ちキリストは神の羔として創世の前既に殺されたるものなること、神の子の死は太初よりして神の前知し玉へるところなりとの眞理と關係を有するものなりとす、蓋しキリストの死はよし人の創造せられざる前既に神の經綸中に存せしとするも、キリスト果して死し玉ふべきや否やは、人が創造せられたる後、果して試錬に遭ひて依然神に忠順なるべきや否やといふ問題によりて決せらるべきものたりしや明かなり、人もし罪を犯さゞりしとせんか、呪詛なかるべく、贖罪の要なるべく、罪を除かんが爲めなる十字架の死もなかるべし、神の計畫は、其の經綸の實行せられんが爲め人の罪を犯すことを要求することなし、吾人は如何にしても、神が人の罪を犯さんことを望み玉ふといふを信ずる能はず、且人罪を犯すにあらずんば十分に人を祝するを欲し玉はずとも、又

祝し得玉はずとも思惟することゝ能はざるなり、果して然らば、神が、人の受け能ふ最大福を人に授けんとの目的を立て玉ふとき、其人を祝せんとの目的は人の罪を犯すことゝ相待て離るべからざるものなるべきや、人は幸福ならんが爲め罪を犯さゝるべからざるや、然らず、もし人神に事ふる忠順にして、始終渝ることなく、此世に存在して受くる試錬を安全に通過して墮落することなかりしならんには、神は之に最上の福祉を授け玉ふべかりしなりキリストの死及び之によりて彼が成すべき贖罪は、畢竟是れ人が不幸にして神の試錬を安全に通過すること能はざる場合に、其呪詛を除かん爲め神の預備し玉へる救治に外ならず、さればキリストの死は神の前知し玉へることには相違なきも、神の第一、主要の目的にあらず、太初より(人が墮落するも、正義を保ちて生活するも、何れとするも)神が人を祝せんとの目的を實行せんが爲め必要なるものにあらざるなり、此意味に於て、キリストの死は(此死によりて成されたる贖罪と共に)神の第一の目的にあらず、

若しキリストの死及贖罪にして事理の必要上、神の主要、第一の目的にあらずして、人間の行爲と相待つて離れざる目的なりとせば、卽ち人にして墮落せりとせば必要なるに相違なきも、もし人墮落せず、德を全ふし、心情の正直を保ち得たらんには必要なきものとせば、神の子の降生は贖罪と相待つて分つべからざるの關係を有し、隨てもし贖罪の必要あれば神の子は自ら吾人の性質を採らざるべからざるも、もし贖罪不必要なる場合(人の正義を保ちて渝らざる場合)には、神の子は人となり、眞實に吾人の性質をうけ吾人の間に寄り玉はざるべきや、他の語を以て同疑問を述べんか、降生は贖罪に附屬する神の一經綸に過ぎざるか、贖罪に對する一個の手段に外ならざるか、贖罪の如く、墮落に對する救治なるか、神が條件的に有し玉へる目的なるか、人が罪を犯すか若くは試錬を受けて能く信仰を全ふするかの如何によりて、或は存在すべく、或は存在せざるべきものなるか、如何

吾人は之に對して、答ふ、曰く、否と、神の子の降生はたゝ贖罪に附屬し、人の墮落を待つて存する神の經綸にはあらざるなり、却て降生は神の主要、第一の目的なり、神の永遠の經綸の綱領にてあり、又此くありき、降生は永遠の昔より神が人及其他の被造睿智者に對して有し玉ひし祝福の聖旨の骨髓なりき、

吾人が此く信ずるには種々の理由を有す、しかして以下の理由は其二三なりとす、

(イ)聖書の敎ふるところによるに、神が宇宙を經營し玉ふの法よりして、必ず神の子降生し、人として顯はされざるべからざることを知る、吾人が第四編に於て論ぜし如く、「キリスト」なる語の正當に主に適用せらるゝは、彼が降生の後にして其前にあらざるなり、正當に之を言ふときは、神の子は世に生れ出で玉ふまでキリストにてはあらざりき、然り而して使徒聖パウロは吾人に告ぐるに(弗一〇十)、凡ての被造物をして互に相合同せしめ、又人となれる神の子に屬して以て互に一となるは神の旨なることを以てせり、其の言に曰く、「是れ自ら定め給ひし所なり即ち期の滿るときに至りて或は天に在るひは地にある萬物をキリストに歸せしめんが爲に定め給ひし所なり」と、パウロ又曰く、子は「萬の造られし物の先に生れし者なり」と(哥羅西一〇十四―十九を看よ)、扨此「先に生れし者」なる語は皇太子が王位を襲ぐ如く、若くは長子が父に代りて戸主となるが如く、他に先んじ、他の長となるべき權利を有するものとの意なり、されば神は萬の被造者に其相當なる長を與へ玉へり、是れ即ち人と爲れる神の子にてあるあり、該使徒は又曰く、(十五節)キリストは「人の見とを得ざる神の狀」なりと、即ち知る、神が人にのみならず宇宙の萬有に自己を顯現せんとの思想を發し玉ふや、此思想の中には太初よりして神の完全なる象の榮光を十分に啓示すべき唯一の人即ち人なるイエス、キリストといふ思想を包蓄せしものならざるべからざるを、パウロ倘いふ萬物彼によりて造られたりと、之を譯して「彼によりて」といふよりも「彼のうちに」といふ方妥當なり、されば該節の文は左の如くなるべし(十六節)「彼のうちに萬物は造られたり天に在るもの地上に在るもの人の見ることを得るもの見ることを得ざるもの或は位あるもの或は主たるものあるひは政を執るもの或は權威あるもの」と是れなり、

然り而してパウロが「彼のうちに造られたり」といふの何の意なりやは、吾人第四編に於て畧々論ぜしところなり、神が其子を人と成さんとの思想は他の一切の者よりも一層廣濶なる思想にして、位あるものも、主たるものも、執政者も、有權者も、將た天に在るものと雖も、地に在るものと雖も、能く之に勝るものなし、此等のものゝ何たる若くは何たるを得べきに關せず、神が其子を人となさんとの思想は、此等一切のものを隱括包含せり、されば宇宙及び其中に存するものは、其視るべきものも、視るべからざるものも、一個の弘大なる思想卽ち神子人の性を採りて顯はさるとの

思想の一部分に過ぎず、故に此等のものゝ存在するは人となる神子に關する神の思想の部分たるを以てなり、故に曰く、神は彼のうちに萬物を造れりと、且之と仝じく萬物は彼を「通して」造られたり、(十六節)萬物の第一源泉、世界の創造主として語らるゝ父なる神は實に世界を造り玉ひしなり、然れども「彼は子を「通して」之を造り玉へり、但し此に子といふは其降生して人と爲り玉はざるの前をいふ、

且つ吾人は萬物が彼の「爲め」造られたりと敎へらる、

さて此に「彼」といふは人として顯はされたる神の子を指すものならざるべからず、もし該語にして神として神に適用せらるゝか若くは三位一體の三位中何れが一に適用せらるゝとせば、萬物父の「爲め」にとか、又は萬物の由りて來る源なる父に歸るとかあるべき筈なり、(哥林多前書八章六節參看)萬物は實に子の「爲め」卽ち人となる子として、子に「對して」造られたるなり、此事たる該節に續くところの語によりて一層明白に解釋せらる(十七、十八節)曰く、「彼(卽ち子)は萬物の先にあり」と、換言せば、萬物の實存するや各優劣、先後あり、皆順序を具へて存在す、而して此順序の首に立つものを子となすといふにあり、此順序たる、顯現せられ、眼もて視るべき物の順序ならざるべからず、何となれば、もし其れにして絶對的の意味に於ける萬物の順序を指すものなりとせば、此順序の首に立つものは父ならざる可らざればなり、然るに視るべきものゝ中にも視るべからざる神の像たる者あり、而して此視るべからざる者の像にてあり且つ自らは視るべき者にてあるところの者は、神の可視界の首にてあるなり、しかして「萬物彼に由て存つことを得るなり」、一切の被現可視のものは視るべき首に附屬して存在し、しかして此の首たるものは卽ち公會の首たる主イエス、キリストに外ならず、「彼は元始にして凡の事につき長とならん爲に死の中より首に生れしものなり」、

されば知るべし、使徒パウロは吾人に敎ふるに、宇宙といふ思想は、他の一層主要にして第一の神の思想卽ち人と爲れる子なる神といふ思想に對して、附屬、未完の地位を有する思想なることを以てするを、故に神の子の降生といふことは人の罪に對し、又人の墮落を救治せんが爲めの手段として豫備し玉へるが如き神の經綸にあらざるなり、神の思想の順序に於て、神子の降生は、人といふ概念若くは無邊の宇宙といふ概念にすら先ちて存せし思想にてありしなり、

(ロ)聖パウロの言ふ所右の如し、故に彼が創世の前吾人の既にキリストの「うちに」簡はれたることを說くは、實に右の意に合するものと謂はざるべからず、(弗一〇四、提後一〇九、提多一〇二等、此れ皆第四編に引證せしところなり)、神は時の始まらざりし前既に吾人のことを思ひ玉ひしに相違なし、然れども思想の順序及論理の必要、又思想の先後、輕重を重んじ、其吾人を思念するの前、人となれる神子即ち其キリストを思念し玉ひたり、彼は吾人を造る時、人類歷史の進みたる後顯はさるべき一人、即ち肉となりて吾人の間に寄り玉ふ其獨生子に附屬せしめんとの意を以て之を造り玉へり、然り而して人が(墮落せるにもせよ、墮落せざるにもせよ、道義上の正直を保全せしにもせよ、自己を惡魔の誘惑に陷れしにもせよ)存在する樣なりたる所以の理を討ぬれば、全く神の子期の滿つるに及びて神が吾人に授け玉ふと同一の性を採りて顯はれ玉はざるべからずといふ神の經綸に基くものなりとす、

(八)神が其被造生類の上に道義上の統治者として行ひ玉ふことよりするも、吾人が神より賦與せられたる道義、靈性上の本性に就て吾人が知るところよりするも、吾人が聖靈の祐助によりて永生の性質に就て悟るところよりするも、神が愛として自己を啓示し玉ひしことよりするも、吾人は到底子の降生は惟だ贖罪に附屬せる神の思想にして、墮落に對する一個の思附き、人の罪に對する(此れなくば必要なき)一の救治なりと思惟することを能はず、

何となれば人の靈魂の渴望するところは、其創造主と相合することに外ならざればなり、且つ人の永生とは何ぞ、平和と純潔なる念を以て其神を視ることにあらずや、吾人は主イエスが神と一なることを知る(約十〇卅)、父彼のうちに在、彼父の中に在ることを知る(約十四〇十)、又吾人彼の中に在、彼吾人のうちに在るよりして、父吾人のうちに住り、吾人神のうちに住ることを知る(約十七〇十一、廿一、廿二、廿三、十四〇廿)、吾人は聖靈を與へられ、聖靈は吾人と永に俱に在すべきを知る(約十四〇十六)、しかして吾人に斯く聖靈の與へらるゝは、先づ其人なるイエス、キリストに與へられたる爲めなるを知る(約七〇卅九、徒二〇卅三)、しかしてヨハネは明かに吾人の永生は此人のうちにあることを言ふ、曰く、「神は永生をもて我儕に賜ふ此生は乃ちその子に在りこれ其證なり神の子を有ものは生を有ち其の子を有ざる者は生を有ず」(約壹五〇十一、十二)と、

是によりて觀れば、神が自己を吾人に與へ玉ふは、右の人即ち主イエス、キリスト、神の子にして又人の子たるものによりて之を爲し玉ふを知る聖靈なる神が永へに吾人の衷に住ることを得玉ふも亦キリストによれり、しかして神の眞實、永遠の生命が人に傳與せらるゝも亦實に主イエスにのみよれり、もし降生にして贖罪に對して附屬の干係を有するとせんか、換言せば、もし罪なく、隨て之を除かんが爲めに死とか贖罪とかもなかりしとせんか、且つ此かる場合には、神の子天より降りて吾人の如き人性を取ることなしとせんか、吾人請ふ問はん、墮落せざる人の生活は果して如何あるべきと、降生せる神の子あるが故、吾人は神に住り、神は吾人のうちに住ることを得、人の子聖靈の殿とせられたるが故に、吾人も主イエス、キリストの肢として、亦た聖靈の住所となることを得、其賜の大にして言ひ悉し難きことそれ此の如し、吾人は果して之を以て吾人犯罪の結果と爲すことを得べきや、吾人は敢て神の永遠の經綸を揣摩し、其の心中に左の如く思念し玉ふべしと考ふることを得べきや、曰く、「われ人を試錬の狀態の中に置かん、もし彼正義を守り、我に對して忠信を欠がざらんには、彼は其創造主及其神に近くことを得ざるべし、成程彼は福祉の境に在るべし、然れども其福祉たる最上のものにあらず、之に反して彼もし信なくして墮落せんには、我彼を己に近くべし、諸福中の福祉は人もし惡魔に誘はれて其誘惑に陷りたらんには之を授くべきも、不らざらんには我之を彼に與ふることなかるべし」と、誰かいふ、神自ら其心中に此の如く思考し玉ふと、吾人は此く想像するだも能はざるなり、

然るに降生とは實に永生を人に授け玉ふことなり、降生とは聖靈を吾人に與へ玉ふことにして、又神自らを永へに吾人の有となさしめ玉ふとなり、降生の性質既に此の如し、神墮落せざる人には之を與へず、人罪を犯せば初めて之を與ふるが如きことあるべきや、永生と神が靈魂に授け玉ふ賜とは、背信、叛逆によるの外之を得るに道なきか、嗚呼何ぞそれ然らん、人もし墮落せざりしならんには、キリストの死と贖罪とは是れあらざりしなるべし、然れども永生は到底吾人のものなりしならん、聖靈は相當の期に及びて吾人の中に降臨し、吾人を以て永久の住所となし玉ひしならん、しかして吾人は神のうちに住し、神は吾人の中に住し玉ひしならん、他語以て之を言へば、愛は信を失へるものにも信を保てるものにも、自己を與へて吝むこ

となかりしならん、安全に試錬を通過せるものに、神の子は與へられて人の子と爲らしめられしならん、人もし罪を犯さざりしとするも、吾人は「神は世を愛し玉へり」といふて不可なかりしならん、否、吾人は實に左の如く言ひて理に背かざりしならん、曰く、「神は其獨生子を賜ふほどに世を愛し玉へり、是れ人彼によりて永生、其存在の目的、神が人を創造し玉ふとき賜ひし運命を得んが爲めなり、換言せば子のうちに神を發見し、永へに神を有し神を樂まんが爲めなり」と、

第六　神が人に對して有し玉ふ元始、第一の目的は人の罪によりて變ずべきや

神は幾分か吾人に其永遠の經綸を啓示し玉ひ、しかして吾人は神子の降生及之より生ずる靈の賜及永生なるものは、神が吾人を祝せんとの思想に必要欠ぐべからざるものなることを見たり、されば人よし罪を犯さずありたらんにも、此かる偉大の賜、卽ち神自身を吾人に賜ふといふ言ひ悉し難き恩賜は、つまり神の吾人に授け玉ふところなるべしとは、吾人の斷言して憚らざるところなり、

然れども吾人は墮落せざる人に對して神の爲し玉ふところ如何を思考して休すること能はず、そは人は既に墮落したればなり、蓋し人の罪あること及び罪よりして幾多の害毒、悲痛に圍まれ居ることは、何人と雖ども拒まざるところなるべし、兎も角も自らクリステヤンと稱する人は、何人も之を拒まざるなるべし、

さて人の罪あることは明白にして掩ふべからず、其害毒は吾人の皆實驗するところ、しかして人の墮落といふことは、苟くもキリスト敎を信ずるものゝ歷史上の事

實として疑はざるところなるが、之と同時に降生の歴史上の事實たることも疑を容れざるところなりとす、吾人は信ず、神の子は實に世に生れ玉へり、聖靈はペンテコステの日實に子によりて父より降臨し玉へり、人は聖靈と吾人が信ずる神の生命とを受けたりと、そは吾人自ら其心中に此生命の在るを感じ、此靈の働を意識するのみならず、他人が其心裡に此等の偉大なる恩賜を領せることを表する外部の證據を見ればなり、

既に人の罪あるにも關らず、神の子は眞實に歴史上肉を採り、人間に寄り玉ひしとせば、人或は問はん、吾人何んすれぞ、人もし罪を犯さゝりしならんには以上に述べたる大恩賜の果して吾人の有たりしや否やの問題を研究するが如きことをなすや、吾人の罪は降生を妨げざりしにあらずや、吾人の罪は神を動かして聖靈の賜を吾人に拒ましめたることなきにあらずや、此點に於て最早此上論ずるの要、否此點に就て苟くも論ずるの要果して安くに在ると、

吾人は答へて云はん、吾人固より神の子が人の子となり、人間が聖靈を受けたることと又今にても之を受くることを得るてふ歴史的事實に對して無邊の讃美、感謝を

奉るべき譯なりと雖ども、吾人が此かる恩賜の實際歴史上に授與せられたることを知るの重要なるのみならず、吾人が此かる恩賜を領するに至れる所以のもの如何を知るは又重要事にてあるなりと、何となれば、

(一)賜を授け玉ふ神は人が其賜を受くるに至る所以のものを認識するを要求し玉ふも知れず、神は讃美、榮譽の歸すべき場合には讃美、榮譽を要め玉ふも知るべからず、神が榮譽を奉るべき價値あるものに吾人の榮譽を要むること切なるべきは、吾人に取りて尤も思惟し易きことなりとす、

(二)神子の降生及び聖靈の降臨は歴史上の事實にして、之により人類は測るべからざるまでに大なる恩惠を得るの道を有するに相違なし、然れども降生によりて授けんとの恩賜即ち永生と聖靈の心裡臨在とは、人々各之を收接せざるべからず、是れ忘るべからざることなり、しかして人が果して此く收接し若くは此く收接せんと欲するの願望を抱き、以て神の方にも、人の方にも共に此恩賜を實際授受するを得べき樣ならしむるや、否、換言せば、人が降生によりて神の授け玉はんとの利益を實際眞實に受くるや否やは、大に神が人の知らんことを要め玉ふことを人の知る

其知識の多少によりて決し、神が人の認識せんことを要め玉ふ其認識の如何によりて決すべし、

何となれば人神の祝福を受くるを欲するも、頑固より來る無識若くは傲慢の情より、神定の法に隨ひて此祝福を受くるを怠り若くは拒み、之が爲め其欲する祝福を受け得ざることあるときは、吾人の思惟し得るところなればなり、否何れの處を問はず、人苟くも祝福を欲せざるものなし、其中祝福を神より受たしと願ふものもあらん、されど此く願ひ欲するのみにては未だ足らざるところあり、主嘗て譬喩を語り、此かる人を王宴に招かれしとき、相當の禮服を着けざりし爲め、外部の暗黑に投出されたる人に比し玉へり(馬太二十二〇十一―十四)

熟々當今の勢を觀察するに、降生といふ教義を歡迎するの傾向あるを知る、吾人は子の神性を實に拒まんとするものゝ增加し、若くは此かる人の數が信徒の全數に對して比例を增すの傾向あるを疑ふものなり、然れども、もし、此の如きことありて子の神性を拒むもの增殖しつゝありとせば、是れ元始より抱持せられし信仰に對して由々しき時節と謂はざるべからず、然るに又之に劣らざる危險を示す、時の徵

候あり、そを何ぞといふに、降生を喜ぶ人の中、神子の降生は神の永遠の目的たると同時に又キリストの死及キリストが之によりて遂げ玉ひし贖罪の爲めに成れりといふことを十分明白に了解するもの少なきこと、是れなり、さてもし降生は其之によりて授けらるゝ聖靈及永生の恩賜と共にキリストの死の結果にして此かる無量の恩惠はキリストが其最も貴き血を流して吾人の爲めに購ひ玉ひしものなりとせば、吾人を愛し其血を流してまで此かる恩惠を吾人に與へ玉ひし神子に讃美、榮譽を奉るべきは吾人の本分にして、神もし吾人に對し此く要め玉ふとも、決して恩念し得べからざることにはあらず、もし吾人が此かる恩惠を受くるは、十字架の下に於ける地上に流れし聖血の功德によるものとせば、神が此聖血に附し玉ふ効力を之に歸するは頗る重要のことなり、しかして神實に此聖血なかりせば授け玉ふまじき賜を此聖血の爲めに授け玉ふといふこともし眞實なりとせば、是れ豈に神が眞に絶大絶偉の効力を之に附し玉ふものにあらずして何ぞや、

吾人は第四及第五の兩編に於て、降生は永遠の昔より神の有し玉へる主要、第一の目的なりしことを論じ、降生は單に贖罪に對して附庸、補佐の地位に立つものにあ

らすして、宇宙の創造せられたるも畢竟神の子人と成るに至らんが爲めなることを說きたり、さて吾人は今より編を重ね終に至るまで降生及び降生の中に包括せられたる一切の恩惠及榮光はキリストの死によりて吾人に授けられたるものなることを辨論せんとす、吾人が此く辨論せんとする主意果して如何、請ふ先づ辨論の主意にあらざるものを陳述せん、

(イ)吾人が此く辨論するは、降生は人の墮落の爲めに神の成遂し玉へる事件なりとの意味に於て贖罪に附屬すとの意にあらず、之に反して墮落せず又罪を犯さゝる人間に降生の賜を授け玉ふべしとは、何れより考ふるもしかあるべしと信ぜざるを得ず、降生既に太初よりして神が宇宙を祝福せんとの中心思想たること此の如く、又人もし罪を犯さず正義忠信を守りて渝らざるも尙且つ降生は授けらるべきこと此の如しとせば、此くまで中心的に此くまで無時間的なる事實即ち神の思想が、時間中に生起せる事實即ち十字架上に於ける神子の死(しかも其死は人の罪と背信とよりして是非なく生起したる死)に頼りて立つといふは如何、

(ロ)吾人の論辨するところは左の如し、曰く、人に罪ありといふ歷史上の事實は、之を他と干係なくたゞ罪として考察し、罪の元精の性質、傾向のみよりして考ふるときは、人間を祝福せんとの神の中心思想を破滅するの力あり、よし降生といふ思想は神に取りて中心的の思想なりしにもせよ、よし其思想の廣大なる、被造宇宙に存する一切の君王、統治權勢能力、視ゆるもの、視へざるもの、天に在るもの、地にあるものを其中に包括するにもせよ、そは之に對して何の干係もなしと、是れなり、

吾人は第二編に於て神の經綸を論じ、人を以て神の萬物の冠となし、人によりて神の像を現はし、人を以て一切の被造睿智者の長となし、人によりて被造睿智者は相互の統一を保ち、人の下に在りて始めて其神より祝福を受くる相當の順序、地位を發見するものとして此く人間を用ひて萬物の長とし、萬物を支配せしめ、又神の顯現、祝福を施さんとの聖旨は、人となれる神の子、主なる一個の人によりて實行せらるべしといふことは、是れ神の經綸なることを說けり、

人に關する神の目的や實に此の如く廣大なり、然れども罪なる者は此く廣大なる目的をも悉く要留するの力を有す、吾人今罪を罪として考へんか、即ち吾人は神の全知力の頂には上らずして實際歷史上罪を犯せる人間の中に立ち、實際罪を犯せ

る人の位置よりして下瞰すれば罪は神の目的はよし永遠なるにもせよ、そは實行せらるべきものにあらずといふの力を有す、即ち永生にあらず、聖靈によりて神の心裡臨在もあらず隨て永生及び聖靈の賜の唯一源泉たる降生もあらざるべしといふの力を有す、

(八)然り而してもし吾人今降生、永生及聖靈の賜が實際、歴史上に存せることを喜ぶとせば、吾人が論辨するところは左の如し、曰く、成程此等のことは實際上、歴史上の事實たるに相違なし、然れども是れ他の實際上、歴史上の事實、即ちカルベリ山上十字架の上にキリストの死し玉へることあるが爲め、此く實際上、歴史上の事實となれるなり、もしキリストにして死して以てかく己を獻げん爲め此世に來り玉はざりしとせば、キリストは到底吾人に與へられざりしならん、降生なるものはあらざりしならん、約言せば降生及び降生によりて授けらるゝ一切のものは、畢竟吾人たゝキリストの死によりて之を得るものなりと、是れ吾人の論旨なり、

此かる辨論が二個の自定を基礎とするは明瞭のことなり、しかして吾人は殘餘の諸編に於て之を説示、證明せんと欲す、

(一)吾人は罪の破壞力を説き、其廣大なること神が人に對して有し玉ふ思想の廣大なると均しきことを言へり、吾人は罪は之を罪として考ふるとき、神の永遠の目的を要留し、降生の時間中に實現せらるゝを妨ぐる力を有することを自定す、

(二)神の永遠の目的の吾人に回復せらるゝは、全くキリストの死によるものにして、其他の何物にもよらずといふことを自定す、

借問す、吾人が罪の力を説くこと過大に失するの嫌ありや、人の罪が此くまで廣く慘害を及ぼし、しかして彼が如く無邊の威嚴を有し、彼が如く愛すべきの美容を有し、彼が如く靈魂を滿足せしめ、萬物を祝福するの望滿々たる期望を破壞し了するの力を有するとは信ずべからざることの如くに思はるゝや、

吾人は記憶せざるべからず、此く論ずるに方り、吾人は罪を他と干係なくたゞ罪として考察し、キリストの死の効力を一層明白に領會せんが爲め故らに開闢の始より吾人の罪の爲め其子を與へて死せしめんとの神の豫知的恩謨を度外に舍きて議論しつゝあることを、殊に吾人神子を死せしめんとの經綸を預定的に神の有し玉へりといふことを知らざるもの、若くは之を知るも、十架字上に於けるキリスト

の死は神の祝福の經綸、目的を一切人に回復せりといふことを看過するものキリストの死は人の己に有する祝福を增し、若くは人罪によりて祝福の一部分を失ひたるにキリストの死によりて此一部分の祝福を回復せりといふが如きものにあらずして、人は其罪によりて一切を失ひたるに、キリストの死は此失はれたる一切のものを人に回復せりといふことを看過するもの、キリストの死は天上地下の萬有に復び給するに、其必要必需の統一を以てし、神の大家族の親族として相給要、授受するに於て各自相當の地位を以てしたること、萬物に復び供するに其正當なる長と統治とを以てし、視へざる神の像たる者を人の形に於て顯はし、以て萬物を祝し玉へることを看過するものに對して議論するときは、神が其子を死せしめんとの預定的經綸を且らく舍きて論ずるは必要欠くべからざるものあるを見る、キリストの死は德性を具へ靈性を有する睿智者の神の大家族に對して此くまでの大回復事業を成遂せり、然れども、もし之を十分了解せんと欲せば、人の罪は(之をたゞ罪として考へ)吾人が日夜懷ひ思へる恩惠、祝福の期望の大なると均しき廣大の破壞を行ふ力あることを知らざるべからず、

然らば吾人が罪の此くまで激しく、恐るべき力を有することを定言するに、何の根據を有するや、

吾人が此く定言する根據の要は、人の性質及び神が人を造り玉ひし目的に在り、神人を造り、之に賦するに己に肖たる性を以てし、其性の彼此相似たる人を稱して神の像に肖せて造られたるもの(創世記一〇廿六、廿七)といふに至れりとは、是れ吾人の前已に論ぜしところなり、言ふまでもなく「像」といふ命辭を茲に用ひたるは、其意神を他の生類に現示するを得べき程神に肖たる性といふに在しに相違なく、かして第一の人の創造及び其の性質につきて使用せられたる命辭は、終世に至りて世に出でし人なる主イエス、即ち十分の意味に於て「視へざる神の像」(哥羅西一〇十五)なる者に對する預言たりしなり、人を以て神の方面より他の生類を見るものと爲して之を考ふるときは「像」といふ命辭の力は此の如し、即ち人他の生類に對し、他の生類人に對するとき、他の生類が人に神の德性及靈性の肖像の存することを認め、かくて人は其相當の程度に於て、神の顯現、啓示たらんこと、是れ神の目的にてありしなり、

「像」なる命辭は、人が人間以外の神の生類の上に臨み、其德性及靈性によりて神を啓示することを意味すること右の如し、然れども該命辭たる更に他の意味を有す、即ち人を以て自己と同く造られたるものに對するものと爲さず自己の創造主にして神たる者に仰ぎ對するものとなすこと、是れなり、此く「像」なる語を以て、人の神に仰ぎ對するとを表示するものと爲すときは、該命辭は心情相傾け、親愛相交り、互に相喜び、互に相樂む心意の交通を言現はすものなりとす、箴言記者嘗て人々の間に存する此種の交通を說きていへり、曰く、「水に照せば面と面と相肖るごとく人の心は人の心に似たり」(箴言廿七〇十九)と、思ふに、人の神の像に肖せて造られたるは人の心情神の心情に對應し、神の心情人の心情に對應すること、恰も清澄の池水に映ぜる像の之に俯臨する人の面に對應せるものなるが如し、しかして吾人「像」なる語を、人と人を造りし神との干係を表するものとして考へんに、之を解して右の如く思惟したらんには、庶幾くは該命辭の眞意の精神を得たるものならんか、されば人は其心情を滿足し、且其生命たり、其榮養たる交通を得んには、神によるの外なきこと、猶ほ水面に映ずる人影が、氷上に俯臨する人面によりて始めて存在するが如し、

もし人面にして其處を去るか若くは隱蔽せらるゝとせば、人影忽ち滅し、復何の跡をも止むることなかるべし、人に於けるも亦此の如けん、そは人はたゞ神によりてのみ其喜悅を得、其眞正の生命を有するものなればなり、故にもし人神を失ひなば、若し神其憐愛の面を人より隱し玉はんには、是れ人其一切を失ひたるものなり、人茲に至りて恩惠、祝福の望全く絕ふ、是れ猶ほ水に臨みて其優姿を打眺めたる人、池邊を去りて復た歸らざるとき、池中の影像再び其艶容を現し能はざるが如し、

然らば人の罪は、神をして其憐愛の聖顏を人より隱さしむべきや、人既に墮落し、信仰を舍てたり、人の罪は神をして人は最早神の目的に對して不適當なる機械なりと思惟せしめ、隨て永へに棄却せらるべきものと思念せしむべきや、勿論吾人が此く問ふは、本編中始終言ひし如く、罪をたゞ罪のみとして考へ、キリストが其死によりて遂げ玉ふ贖罪を度外に置きて論ずるものと知るべし、

然り而して此大宇宙間右の問に對する答辨を發見するの場所唯一ヶ處あるのみ、此一ヶ處は果して何れに在りや、此場所たる物質的にして視るべき者の一部分には非ず、もし其れにして思想的、心靈的の存在を有するとするも、其實に存在すると

は、物質的のものと異なるなし、何ぞや、曰く、此答辨の發見せられ、又此答辨の探索せらるべき唯一の場所は、神の心意の中に在り、是れなり、人既に墮落せり、之に對して如何に處置すべきやを發言し得るものはたゞ神あるのみ、人もし犯罪せざりしとせば、神は彼を祝福せんと欲し玉へり、しかして人既に犯罪せりとせば、果して神之を依然祝福するを得べきや否や、之を宣言し得るものは唯神あるのみ、ばた又もし人を造り、人に存在を與へし神、人の墮落せしにも關らず、祝福するの道あるを認め玉ふとせんかいかにして人を洗ひ、人を淨め、人の永久失ふべきものを彼に回復すべきやを定言し得るものも、亦神ならざるべからず、

神のみ惟り其心意を宣言し、得玉ふ、誰か疑ふ、神もし其生類及び其生類の罪に關して聖意を啓示し玉へりとせば、是れ何人に取りても、議論の始にして又終なることを

第七　人の罪の結果を除くにキリストの死を要すといふことは、啓示によりて知らるべきことなり、

世或はいふものあり、曰く、罪なるものは、之を除かんが爲めキリストの死を要するまでに重大恐るべきの性を具へたるものにあらず、よし罪そのものゝ性質十分恐るべきものなりとするも、罪なく、過なき者の死は罪人の尤を除くの性質若くは傾向を有するものにあらず、又キリストの死なくば賜はらざるべき神の恩惠、此死あるが爲め、罪人に授けらるゝといふがごときこともあるべき筈なしと、是れ蓋し人が自ら自己につきて判斷を下すとき、自然に思惟するところならんか、

然れども人の罪の結果、影響を除くに何を要するやといふことに關しては、人は到底、正當の判定者たること能はじ、

何となれば、人心既に罪の爲め暗まされたれば、人生至上の福祉とは何物なりやといふことも、又罪によりて此至上福を享くるに如何程まで妨げらるゝやといふことも、正當に之を領會するの能力を欠けるに相違なければなり、是れ吾人の第一に

恩惟せざるを得ざるところなり、

次に、よし罪は此く人心を暗くすることなしとするも、神が人に關して有し玉ふ思想に、人の罪がいかなる影響を及ぼすやといふことを判定するは到底人の爲し得べからざるところなり、されば人の罪が神の心意にいかなる影響を及ぼすべきか即ち人の罪は人を祝福せんとの神の目的を要留、全廢すべきや否やといふ問題は、人に對して重要ならざるかといふに、しからずして極めて重要の問題なり、吾人は此問題の唯一重大のものなることを信ずるに、左の理由を有す、

(イ)神は唯一の自存的存在者にして、獨り自己の裏に其善德と智慧と權能と威儀と名譽と榮光とを有し玉ふ、

神は其有するところを自ら有し、他より受け玉はず、神は其創造せるものゝ中何れの者に對しても、又一切の被造物を合せる全體に對しても決して依頼して立つことを爲し玉はず、又依頼して立つことを得玉はざるなり、神の外に自存、自足、永遠に自由に、獨立に、造られずして存する存在者わることなし、神の外の一切のものは他より存在を受け、他に頼りて立つものなり、其何物なるに關らず、神を措て他の者は、

神の恩旨によりて生存するものたるに過ぎず、既に此等のもの神の恩旨によりて存在するに過ぎず、而して此等のものを支持し、之をして依然存在せしめしものも亦神なり、且つ此等の存在者の中何れにもせよ、又其一切のものにせよ、苟くも屬性を有し、器量を有し、能力を有せんに、皆是れ神の賜ならぬはなし、此等のものに存在を與へし神は、又之に其各自の生質を賦し、各種各類に相應せる能力、器量を之に授け玉へり、神を除くときは、一切のものたゝ他より受け、他によりて立ち、神の賜によりて其有する一切のものを有し、神の恩旨の繼續によりて其有する一切のものを保持すること此の如し、然り而して人は此種の存在者に屬するものにてあるなり、人は大なる命運を具へて創造せられたり、されど人は到底被造者なり、しかして人が被造者なりといふこと、及び人は其生命に對しても其有する一切の福に對しても、全く神の賜として之を享け居るといふことは、人が明白に承認せざるべからざることなり、人の有する一切のもの若くは其希望し能ふ一切のものは、獨り神よりして之を有す、神は人に對して一切のものゝ泉源にてあるなり、

(ロ)人は萬物皆之をたゞ神より受けざるべからざるが故に、其永生を望むに方りて

も亦神を仰ぎ頼まざるべからず、しかして人の望む生命の榮光を得ると否とは、一に神人間心靈の交通、親愛同情の相通ずることあり得べきや否やの如何に存す、

主イエスは永生に定義を下して、神を知ることなりといひ玉へり、抑も人が神の萬物中至上の生命を有するといふは、畢竟其神を知るの知識に成長、增進することに於て、最大最上の器量を具へて造られたるによる、神と交通することは人の造られたる目的にして、其骨髓の生命たること此の如し、されば此交通を妨げ、若くは此かる交通を出來得ざらしむる傾向あるものは、是れ實に人其者を破壞し、神が人を造り玉ひし目的を遂げしめざるものなりと謂はざるべからず、

(八)罪は其人の心靈に及ぼす結果によりて、右に述べたる神人間の交通を妨ぐる必至の傾向を有す、

吾人は罪が吾人相互の關係中に明かに不和、紛爭を導入するあるを見て、幾分か罪の毒力を知る、即ち吾人相互の疎遠、隔情、嫉妬、怨惡、兇殺、戰爭及び之に伴ふ悲苦、慘害は慥かに罪の結果ならぬはなし、然り而して人と人とを離隔するの罪は又神と人とを離隔するものなり、罪は人の心を暗くし、其判斷力を鈍くし、靈事を曉るの力を減殺し、其肉の情慾を放ち又增大す、此くて人は事物の價値の高下を正當に見るの明を失ひ、瞬忽須臾の物を得んとて永遠のものを犧牲に供するに至る、罪人心を支配するが故に、人は其當に奉ぐべき愛と禮拜とを神に奉げず、己の創造主たる神の旨を其律法となし其喜悅と爲すことをせずして、自己を自己の律法となし、其墮落せる情慾、其腐敗せる意志の命ずるところに從ひて行ふ、使徒パウロ(羅馬一〇廿八)嘗て人につきていへり、人は己を造り玉ひし神を知ることだにせんことを好まず、と、又いへり、聖德を發揮して己を啓示し玉ふ獨一の眞神に對して、人は其心に敵意を挿めり(哥羅西一〇廿一)と、又いはく、既に神の眞理を代へて虛僞となし、創造せるものよりも創造せられたるものに事へ、自ら惡を行ふのみならず、惡を爲す他人あるを見て悅べり(羅一〇卅二)と、是れ皆人の眞狀を描きたるものにてあり、

(二)罪は單に其人の心靈に及ぼす結果により神人間の交通を妨ぐる傾向を有すること右の如きのみならず、人の罪は其神の心に及ぼす結果によりて右の交通を妨ぐるの傾向あること、決して其人の心に及ぼす結果の大なるに劣らず、

神は其本性無限に聖潔なれば、其罪惡を惡み玉ふの痛切なる、迚も罪人の思念し能

はざるところのものあらん、故に神の生類其生存の理法に乖きたりとせんに、罪神の生類の心中に働く必至、必然の傾向よりして、使徒パウロが提多書三章三節に曰ふが如き狀態即ち「我等も前には愚なるもの順はざるもの迷へるもの諸般の慾と樂の奴隷と爲るもの恨み娼みて日を度しもの惡むべきものまた互に惡あへるものなりしなり」といふが如き狀態に陷りたりとせんに、若くは一歩を進め、結局終に神に敵し人に敵するに至るべき降下の旅を始むるとせんに、神は抽象的なる罪惡といふものに對して道義上の憎惡を感ぜざるのみならず此罪惡を行ふもの、即ち善を欲し、善を望むにも關らず、自己の性質よりして惡に傾ける人に對して、道義上毫も厭惡の情を發し玉はずといふを得べきや、吾人は記せざるべからず、神が人を造り玉ふや、其目的他の生類に超へて自己の臨在を之に與へんとするにありしことを、即ち人と俱に住み、否單に之と俱に住むのみならず、之が衷に住むにありしことを、神の目的たる、人に自己を與へ、吾人を以て活ける石にて造れる神の住所、神の殿となさんとするにありしことを、

自己の住居の爲め活ける殿堂を築かんと欲し玉ふは畢竟神なるが故もし人一たび墮落せりとせんに、罪によりて人が聖潔なる神の聖所たる資格を失ひたりや否やを宣言するは、明かに神の固有の權限内に存す、もし神、人は汚れたりと宣言し、其罪によりて神の住居に不適當なるものとなれりと宣言し、隨て其約束の賜即ち自己を與ふるといふ賜を授けざらんことを決心し玉ひしとせば、人の生命は神がなし玉へる此決心によりて自ら枯凋、消滅に歸するの外なけん、

何となれば人の造られたるは神の爲めなればなり、人はいよ〳〵進みて神を知り、神を曉り、いよ〳〵進みていよ〳〵止まざる能力、器量を賦せられて此世に生れたり、

されば神自己を人に與へず、汚化せる人の心理に其居を占むるを辭し玉ふよりして、人は神を識るの可能性を有する大能力、大器量を有するも、永へに其所願の目的者を得ざるといふ悲境に陷るものとはなるなり、德性及靈能を具へたる生類にして、之を滿足せしむる相當の目的物を發見する能はずして存在を繼續するは、是れ實に第二の死たらずんばあらず(默示錄二〇十一、二十〇十四、十五)

人の心事を知るものは人の靈なり、しかして神の心を知るものはたゞ神あるのみ、

されば吾人が今講究すべき問題、即ち人既に墮落したる已上、神は果して人の衷に住せんとの目的を繼續し玉ふべきや否やといふことに關して、神の心を啓示するを得るものとては、たゞ神あるのみなり、神は果して人の衷に住せんとの目的を繼續し玉ふべきや、はた神は此目的を廢去し玉ふべきや、言ふまでもなく此かる事件に對して、一切の權利は神に存すべく、決して背信、叛逆の罪を犯せし人間に何の權利も存せざるべし、

(ホ)而して、もし神其原始主要の愛に基ける目的を存立して變らざらしめんと決意し玉ふとせば、言ふまでもなく、いかにして此目的を依然繼續せんといふことを宣言するを得るものは、神ならざるべからず、しかしてもし神、世界開闢の始より人に與へんと決定し玉ひし一切の福祉を人に授けんとの聖謨を繼續し得るは、恥辱の木の上に其子を死せしむることに在りと宣言し玉はんか、吾人は謹んで神の語に聽くあるのみ、もし神清淨、無罪の聖子の血のみ惟りよく罪の贖をなし、世界開闢の前より約束し玉ひし心裡臨在を出來べからしむと宣言し玉はんか、神の語り玉ふ如く其事成らざるべからず、イエス、キリストの血は人の罪を除き、人を淨むべし、之を措て他に此くなし得るものなし、人は所謂言ひ悉し難きの賚を受くべし、されど(一旦罪を犯したる以上は)之を獨り聖血によりて受くるものなりとす、

(ヘ)聖なる神何故に罪によりて不潔、汚穢のものとなりし人の衷に住むことを否み玉ふや、又もし神自己を人に與へんとの原始、永遠目的を繼續せんとし玉ふとせば何故其子が死して自己を献げ以て罪の爲めに犧牲を行ひ玉ひしを理由として之を繼續し玉ふべきや、此等の問題に對して、吾人は必しも一切の理由を了解せざるべからざるの理なし、もし吾人、十字架上に流されしイエス、キリストの血は神の眼に對して人類を淨むるものなると、又神は其子によりて此かる犧牲の供へらるることなくんば、一旦罪者となれる人の衷に住みたまはざるべかりしも、既に此かる供物の獻ぜられ、聖血の注がれたる已上は、人の衷に寄ることを辱とし玉はず、又其眼中に此まで貴きものによりて淨められたる人類の中に住することを厭ひ玉はざることを知り得ば、足れり、

蓋し神其子によりて自己を與へ玉ふといふは偉大なる榮光の賜にして、罪人の受くるに堪へざるところなり、しかして罪人をしてよく之を受けしめんと欲せば、十

分之を謙退せしめ、此賜を享くるは全くキリストの恥辱の十字架によれるものなりと悟らしむるに若くはなし、吾人は十字架の贖を此かる理由に基づくものと思惟するに難からずと思ふ、しかし神がキリストの死に附するに此かる榮光、名譽を以てする所以の最深の理由は其何たるにせよ、兎も角も神が其聖意を宣言し玉ひしことは、吾人に取りて尤も緊要事件なりとす、人の思辯、臆測にあらずして、神が聖意を以て啓示し玉へること、是れ即ち吾人の宜しく知るべきところのものなり、神の言ひ玉ひしことは何ぞ、此れぞ議論の始にてあり又終にてもあるなり、然り而して神は其心意を啓示し玉へり、神の宣言とは何ぞ、曰く、もしキリスト其血を流さゝりしならば、神は人に與へられざりしなるべしと、是れなり、

第八　罪に對する神の心の啓示（甲）

吾人の永生及び永遠の福祉の希望は、全く神が自己を人に賜はんとの聖旨を有し玉ふそのうちに存し、神が自己を與へ玉ふことは其愛に基ける永遠の目的なり、然れども罪なるものは神の永遠の目的を要留、廢滅するの力を有し、もしキリストにして此世に來り死して以て吾人の罪の爲めに自己を供物となし玉ふことなかりせば、實際罪は神の永遠の目的を廢滅に歸せしめたるなるべし、是れ吾人が已上論示せんと務めたるところなり、若し夫れ此く定言せる如く、罪なるものが實際此くまで廣大なる零落を起し來り、しかして神の永遠の目的の回復が獨りキリストの死の功に歸するものなりや否やの問題に至りては、吾人は惟り神の啓示の力を借りてよく之に答辨することを得るのみ、即ち(一)罪に對する神の心意、(二)キリストの死は、罪によりて人の失ひたる一切のものを人に回復するに如何程の効力を有するや、此二問題に關して吾人は神の啓示を待たざるべからず、

吾人が今講究せんとするところは、神が罪に對する聖意につきて與へ玉へる啓示

なりとす、

吾人聖書を觀るに、神は罪に對し又惡を行ふて悛めざる惡人に對し憤怒の神として啓示せらる、されども是れ神が與へ玉ひ他の一層大なる啓示に對し附屬の地位を有する啓示として解釋せられざるべからず神が自己の品格につきて與へ玉ふ根本、骨髓の啓示は、神は愛なりといふことにてあるなり、神は人を愛し玉へり、しかして其愛は際限なかりき、そは神其獨生子を人に與へて惜み玉はざればなり、しかしてかく其聖子を與へ玉ひしは實に神の一切を與へ玉ひしに外ならず、何となれば子を與へしは自己を與へ玉ひしに異ならざればなり、加之神の愛の大なる、死の襲ひ來るも、十字架の苦の迫り至るも、爲めに逡巡することなかりき、しかり而してもし神罪に對して其憤怒を啓示し玉ひしとするも、此かる啓示は毫も其聖子を賜ふによりて現はれたる神の品性と矛盾せざるものにして、吾人は寧ろ之を神愛の啓示の一部分として之を容れざるべからず、されば吾人の罪あるにも關らず其獨生子を遣はし、之れを吾人に與へ、以て自己の品性を啓示し玉ひし神の一層廣大にして一層根本的なる啓示の主旨に隨ひ、吾人は左の如く信ぜざるべからず、

(イ)神は人をして神の子たるの自由を得せしめ又其永遠の王國及榮光に於て自己と俱に之を享有せしめんと欲し玉ふ、しかして此かる人が罪を犯すことを許容せずと堅く決して變じ玉はざるは、畢竟其愛を啓示するものに外ならず、故に神が罪に對して怒り玉ふの多少は適々以て其愛の多少を量るに足る、神が人をして其榮光によらしめんとの目的を把持し玉ふこと堅ければ堅きほど、此かる榮光に與るものは苟くも罪惡の垢汚を帶ふべからずとの決意も亦均しく堅牢ならざるべからず、何となれば吾人に關する神の永遠の愛の目的と、元精上必至上吾人の永生を破滅するの傾向を有する罪の法が吾人の胸裡に存することは、全然彼此相容れざるものなればなり、吾人の父なる神の愛は其吾人を養ひて、子となさんと望み玉ふ其願望の中に存するものにてあるなり、

もし罪吾人の心裡に存せば吾人の身分の榮光を磨滅し了す、そは罪は神に對して吾人が有する神子性を破壞するものなればなり、

吾人は既に神の人に對す權利を論じ、人はたゞ神に造られたるものにして、其享有するを得べき一切の祝福は、皆之を神の好意、恩惠によりて享くることを言へり、

然れども人がかく神に依頼して立つといふことは、人に對して示し玉ふ天父の愛により、人が其達し得べき至上の榮光に召さるゝことを妨ぐるものにあらず、何となれば神に依頼するといふことは(願くは各人此理を正當に解せんことを)人の身分の眞正の榮光にして、人が當に之が爲め誇るべきことなればなり、しかり而して吾人主イエスが其神子性につきて語り玉ふところ如何、及び主イエスが子として其父に對し如何なる生涯を送り玉ひしやを細心考察するときは、吾人が有する神子性の眞榮の那邊に存するかを發見するに、焉幾からんか、成程(約翰傳五章を看よ)主イエス己の行爲を以て父の行爲に均しきものとなし、「我父は今に至るまで働き玉ふ我も亦た働く」(十七節)といひ、十九節に於ては「そはすべて父の行ふ事を子も亦行へばなり」といひ、二十一節に於ては「そは父の死しものを甦らせて生しむる如く子も己の意に從ひて人を生しむべし」といひ、二十二、三節に於ては「それ父は誰をも鞫かず審判は凡て子に委ねたり、是れすべての人をして父を敬ふ如く子をも敬はしめんが爲なり」といひ、二十六節に於ては「それ父は自ら生を有てり其如く子にも賜ひて自ら生を有せたり」といひ玉へり、しかしてよし吾人神の子と稱せらるゝにせよ、主イエスが子として此く自己につきて言ひ玉ひしことを移して吾人につきても亦しか言ふこと能はざるべし、是れ疑ふべからざることなり、そは働くに於て父と一なることゝいひ、父がよりて以て行ひ又行はんとし玉ふ唯一の行働者たることゝいひ、父の恩賜及制定によりて父が自己の裏に生命を有し玉ふ如く自己の裡に生命の源泉を具ふることゝいひ、及び其他此かる種類の事といひ、是れ皆父と同一の神性を有する者につきて言ひ得べきものにして、苟くもいかなる被造者につきても、又一切の被造者につきても此かることを言ひ得べしと信ぜられざればなり、

然りと雖も茲に吾人の注意すべきことあり、何ぞや、子は父と同一の神性を具へ父と同一の權威、能力を有し玉ふと雖も、其父に對するや、之に依頼するの精神を具へ、しかも欣然甘んじて此く父に對し玉ふこと、是れなり、十九節に於て主はいひ玉へり、「誠に實に爾等に告ん子は父の行ふことを見て行ふの外は何事をも行ふこと能はず」と、三十節に於てもいひ玉はく、「われ何事をも自ら行ふこと能はず聞くところに遵ひて審判す我審判は公平(たゞし)そは我わが意を行ふことを求めず我を遣はしゝもの

丶意を行ふことを求ればなり」と、第四章三十二及三十四の兩節に於て主いひ玉へり、曰く、「我に爾等の知らざる食物あり我を遣はしし丶もの丶意に遵ひ其工を成畢る是わが糧なり」と、又第六章三十八節に於ていひ玉はく、「わが天より降りしは己の意の任を行はん爲に非ず我を遣はし丶ものゝ意のまゝを行はん爲なり」と、五十七節に曰く、「生ける父我を遣はす父によりて我生ける如く」と、第八章廿八節に曰く、「爾等人の子を擧しのち我の彼なるを知り又我みづから何事をも行ず惟わが父の教に從ひて此等のことを言へるを知るべし」と、吾人は茲に於て問はざるべからず、主が我みづから何事をも行ふこと能はずといひ、又我自己の意を行ふと能はずといひ玉へるは、果して主は此かる能力を欠くとの意なるか、主は脆弱にして之に堪へずとの意なるか、如何、且つ主か我は父の示すところのことのみを行ふといひ、又我は先づ父より聞きたることを世人に語るのみと言ひ玉ふは、是れ果して主が智慧に於て欠けたるところありとの意なるか、如何と、吾人は此問に對して否と答へざるべからず、主が、自ら何事をも行ふこと能はずといひ玉ふや、其意、主の親愛、孝順の情其父を離れて自ら行ふに忍びざらしむ、故に能はずといふに在り、主の喜悅は父の

意を行ふに在りき、人に己の父を示さんが爲め主は肉と成り玉へり、彼は其天の榮光、其權威、其萬物の上に位する名及び一切の父の能力の統治を與へられんことを父に請ひ玉へり、しかして彼は實に此等一切のものを用ひて唯一の目的を果さんと願ひ玉へり、唯一目的とは何ぞ、曰く、世人をして父を解し、父を知らしめんと、即ち是れなり、故に約翰傳十七章一節に於て主曰く、「父よ時至れり子をして爾を榮めしめんが爲め爾の子を榮めよ」と、

聖子の生涯の精神固より此の如し、能力に於て欠けたるところあるが爲めにあらず、智慧に於て乏しきところあるが爲めにあらず、父に依頼して立つこと其悅び玉ふところなるが故に、子は父に頼り玉へり、自由に任意的に、喜悅的に、父に依頼するといふこと、是れ子性の心髓なり、然り而して此任意的、喜悅的に父に依頼せる生涯なるものは、實に神の子の生涯にてありしこと、是れ吾人の信ぜざるを得ざるところなり、且つ此く孝順なる主の生涯に就て主が語り玉へるとき、果して主は此生涯を其神性に於て送るものとして語り玉ひしか、將た其人性に於て送るものとして語り玉ひしかといふ問題につきては、吾人今之を穿鑿するの要なかるべし、約翰傳

第五章を讀むに、主は其全章を通して己の父に依頼して立つことを丁寧反覆して語り玉ふ、然るに其中主の人性に基きて主が行ひ玉ふべき行爲を語るものに至りては唯だ一ヶ處あるのみ、即ち二十七節に於て主は告ぐるに、己自ら人の子たるが爲め、父が他人を審判するの權を己に與へ玉へることを以てするある、是れなり、之を除くの外他の場所に於ては、主己の依頼性につきて語り玉ふとき、自己を單に「子」といひ玉ふ、思ふに是喜悅的の孝順を父に對して具ふるは、子たるものゝ精神の心髓を具ふるものにしてキリストを以て神の子と爲すも人の子と爲すも、此點に於て差異なきが故ならざるを得んや、兎に角に苟もキリスト信徒たらんものは人性を具へて送り玉ひし神の子の生涯が、人間生涯の原則、模範、理想たることを認むるに躊躇せざるべし、主イエスの生涯こそは、神天より下瞰し、之を視て純粹無欠の滿足を感じ、是れ我心に合ふものなりといふ語を發して遺憾なしと思惟し玉へる唯一の完全なる生涯なりしなり、然り而して此完全の生涯は子たるものゝ生涯なりしなり、此生涯たる子たるものゝ精神、子たるものゝ心情を以て送られたりしなり、しかして此生涯たる子たるものゝ生涯たりしが爲め、父なる神を頼まずして立たんとの願望を現はすことはなかりき、子は十分父を愛することを得、十分父に信頼することを得、又己が父の能力と愛とに頼りて立つことを以て其喜悅と爲すことを得、

主曰く、「爾の我に與へ玉へる榮光を我彼等に與へたり」(約十七〇廿二)と、扨主が茲に榮光といひ玉ふものは主として、彼が先づ父より受け、しかして吾人に與へ玉へる聖靈のことを指すに相違なし、然れども(第四編加拉太書四〇一―七を論ずるものを參照せよ)吾人がかく領くる靈は右の如く子たるものゝ生涯を送り、吾人と同一の性を採りて右の如き喜悅的孝順の生涯を神に對して送りしものゝ靈に外ならず、しかして聖靈は吾人の心情を其住居と爲し、吾人の生涯の全精神、全氣象に於て吾人の一思一情に於て、イエスが子たりし如く、イエスが子たる如く、吾人をして亦此かる子たらしむるなり、此く言ふも勿論吾人、人世の存在の前神と一なりし者の能力、榮光を吾人の心裡に有せんと望むにあらず、(此かる思想は成立すべくもあらず、たゝ全能全知の者已に悅んで人となり、己が其神且父に依頼せるとを現示し玉へりとせば、吾人も亦同じく父に依頼して立つを樂まざるの理なし、イエスの依頼は

躊躇なく腹藏なく、其父を愛し、信ずることを得る子たるものゝ自由にして喜悅的なる依頼なりき、神は吾人が同一の依頼の情を有し、同一の自由を有し、同一の喜悅を有し、同一の愛と信頼とを有することを要め玉ふ、換言せば、神は吾人がキリストの光榮を有し、キリストと俱に其父に對して同一の心情を具へ、キリストと共に愛し、キリストと共に信じ、キリストと共に依頼せんことを要め玉ふ、約して言はんか、キリストと共に神の子たる地位を占め、キリストと共に神を嗣ぎ神が無限の愛を以て授けんと思念し玉ふ一切の恩惠、榮光を神より受くることを要め玉ふなり、吾人は何が爲め全知力を要すべきや、神の智慧は其子輩各自の需要に應じて之を滿足せしむるに足るにあらずや、吾人は何が爲め自ら全能力を有するの必要ありや、神の全能力が吾人の爲めに使用せらるゝこと、吾人頭上の毛髮も數へらるゝにあらずや、此世に於ても、後の世に於ても吾人の平和と、吾人の安全と、吾人の福祉とを吾人に得せしむるものは、苟くも神の子たるものが愛と信任とを以て神に依頼することにてあるなり、子たるものゝ依頼は吾人の榮光なり、

さて罪とは何物ぞや、罪の根本、罪の元精は何ぞや、吾人は今罪の各種異樣の枝條其外部の顯現、及其最後、最終の發達につきて言ふにあらず、罪は之を罪として考へ、罪をして罪たらしむる所以のものとして之を觀るときは、畢竟吾人の思想に於て、又吾人が吾人の生涯の方向を定めんとするに於て神に頼らで立たんとすること、即ち是れ罪をして罪たらしむる所以のものなりとす、人は神に造られたるものにして、萬物を神より受くべきものなるに、罪は人をして神の前にかく謙りたる承認をなすことを拒ましむ、罪は人の心中に神に冷淡なるの情を起さしめ、神を忘れしめ、物を考へ、事を企つるとき全く神を度外に含きて顧ざらしむ、豈たゞ是のみならんや、神に對して感謝の情なく、傲然冷淡なるは是れ畢竟罪の未だ發達ぜざるときのことにして、其發達するや、神に對して公然叛逆、敵對するに至り、而して神の愛を惡むに終る、罪によりて人は、主イエス、キリスト及其父なる神を見て之を惡めりといゝる(約十五〇四)慘境に陷るに至るものなり、換言せば父が其子を遣はしたまへるによりて人は幾分か父の愛を認め、かゝる愛に對して人は恭しく父に順ふべきものなりといふことを多少覺りけるが、此く覺りたる人は反て其心裡に憤怒、憎惡の念を燃にせり、果して然らば此憤怒、憎惡の念はいかにして生ずるや、曰く、人の心意

正を離れ、かの欣々として己を神の前に屈し、愛と信任の情を以て自由に喜悅的に神に依り頼むことをせざるよりして生ず、蓋し此く神に信頼して立つの人生の榮光なること、猶ほかの父の心胸より出で、完全の愛より出でたる完全の愛にして一切の愛と信仰と信任と禮拜とを神に獻げ玉ひしキリストの生涯の榮光あるが如し、

抑も吾人の父が至大至深の愛を以て求め要めて止み玉はざるものは子たるものにてあるなり、然るにもし吾人罪を吾人の心裡より驅逐せずして依然之を安居せしめ、其慘毒を逞ふせしむるときは是れ全く吾人が神に對して有する神子性を破壞し了するものに外ならず、蓋し神を愛すること能はず、神を信任すること能はず、神に孝順なること能はざるものは、精神上神の子と稱することを得ざるものなり、神の前に首を低るゝこと能はず、神を禮拜すること能はず、其傲慢なる心意を屈して神に依頼するの念を發せざるものは神の子にはあらざるなり、彼等は神の子たるべき者の唯一の喜悅たる神に依頼するの念を棄るも其實際においては依然として神に依頼するを免るゝ能はず、被造者は神にてはあらざるなり、彼は自己の中

に全知力を有せず、全能力を有せず、永生を有せず、然れども神は此かる性質より來る祝福を享けしめんとて人を招き玉ふなり、卽ち神は人をして自由に、任意的に親愛的に神に依頼せしめて以て之を享けしめんと人を招き玉ふなり、請ふ問はん、神の被造者にして神に依頼するの生涯に招かるゝは彼に取りて恥辱となるべきや、看よ、造られず、永遠なる神の獨生子は其父なる神に依頼して立つを毫も耻ぢ玉はざりしのみならず、子として父に依頼するを以て其の喜悅となし、其榮光とし玉ひしにあらずや、然るに被造者にして神の獨子の生涯の如き生涯を送る樣神に招かれながら、漫然之を斥け、又公然之を嘲罵し、若くは公然之を蔑視し、之を不問に附するが如きことあらば、吾人は之を何とか言はん、此かる人は果して神の欲し玉ふ子なるべきや、此かる人は果して神の容れ玉ふ者なるや、人をしてキリストと一ならしめ、キリストの榮光の像に合せしめ、又神の後嗣たるが爲めキリストと共に萬物を襲がしめんと圖り玉ふ神は果して愛なきの神なるべきや、もし此かる神子權に人を招くの神にして愛なきものにあらずとせば、人傲然、漫然其神子に權を棄却せるが爲め、神此かる人に對し、神の子たらんことを願はず、神を其父と認め肯せざ

るものとして處置し玉ふとも、吾人之を愛ならずといふを得べけんや、人もし神の子たることを認め育んぜずとせんか、神は此かる人の實際の狀態に隨ひて之を處置するの外他に道あるべきや、人もし其最後の撰擇をなし、其情に於ても意に於ても、共に其子たることを認めず、又神を其父と仰がざることありとせんか、神は果して此かる人に對し如何なる處置をなし玉ふべきや、主は實に嚴肅なる語を發していひ玉はく、「誠に實にわれ汝等につげんすべて罪を犯すものは罪の奴隸なり」と、蓋し己を賣りて罪を犯すものは其神の子たる地位を捨てゝ自ら墮落するものなり、主語を續きていひ玉はく、「奴隸は恒に家に居らず」と、蓋し吾人は罪によりて自ら奴隸の境に陷れり、しかして罪に隸屬し、孝子たるの精神を失ひたる奴隸を斥け、子たるものを永遠の王國及び榮光に招き玉ふ神、已が招きて與へんとし玉ふ神子權を承くるものと承けざるものとを甄別するの時は近けるなり、されば主が罪に奴隸たるものは恒に家に居ること能はざるを警告したる後にいひ玉はく、「されど子は恒に居るなり」と、即ち子たる權を承くるものは神に固く連結せられて決して分離せらるゝことなかるべく、神の面前より斥けらるゝことなかるべく、神の子たるものの

に屬する自由と榮光とを享有することを得べしとの意なり、是故に子もし爾曹に自由を賜なば、爾曹誠に自由を得べし」、再言せば、神の獨生子吾人の罪より、又吾人が神を頼まぬといふ傲慢、不遜の精神より吾人を濟ひ出し、神の獨生子の如く喜悅、親愛の情を以て神に依り頼むことを得せしめ玉ふときは、吾人も神子の生權たる眞正の自由を有するに至るべし、(約八〇三十二―三十六を參看せよ)」

蓋し苟くも人靈、神の面前より放逐せらるゝといふことは、實に之を思ふだにも怖るべきことにして、輕しく之を口にすべきことにあらず、然れども神は罪に關して吾人に尤も嚴肅なる警告を與へ玉へり、神は實に未來を蔽ふ幔幕を寥げて、吾人に永遠の生と永遠の死とを示し玉へり、それ第二の死の事たる之を思念するだも恐ろしきに相違なし、然れども吾人は神が罪の必至、元精の傾向に關して與へ玉ふ啓示として、神が第二の死につきて告げ玉ふことを受けざるべからず、

愛は人を造りたり、愛は自己を人に與へんことを欲す、愛は人を神の子とし、後嗣とせんことを望む、罪は子たることを斥けて承けざることなり、罪は實に神を斥くることなり、罪の終極は愛を憎むことなり、愛の面前より放逐せらるゝこと是れ罪に

取りて至當、唯一、免るべからざる結末なり、人心の裡に存して破壞せられざる罪と神の永遠の目的とは絶對的に相反對し、相衝突するものにてあるなり、罪もし廢滅に歸せしめられざらんか、神の永遠の目的を壓倒し、之を無効、無力のものとなすに至らん、故に知る、神が罪に對して憤怒を啓示し玉ふは、畢竟是れ其愛につきて與へ玉ふ啓示の一部分に外ならざるを、

第九　罪に對する神の心意の啓示（乙）

もし罪にして吾人が以上思考せしが如く生命を破壞する性を具へたるものなりとせば、もし罪にして傲然神を頼まずして立たんとするものにして、人の孝順性を破壞し、神、其子たるものゝ榮光なる自由を享けしめんと望み玉ふも、到底是非なきに至らしむるものなりとせば、神が罪に對して恐怒を發し玉ふといふとは、單に神の愛の品性と矛盾せざるのみならず、實に愛の必然の結果なりと謂はざるべからず、（羅八〇十五―廿一）、故に罪の元精の傾向を啓示し玉ふは、愛の行爲にてあるなり」

然りと雖ももし吾人にして以下のことを認め、之を信ずることなくんば、神の聖も愛も共に之を十分悟ることを能はざるべし、即ち

（ロ）神は其愛によりて、單に人を警めんが爲め、人の有する罪の元精の傾向を人に啓示し玉ふのみならず、頑然罪を犯して悔ひざる人に對して震怒を啓示し玉ふといふことを是れなり、

使徒パウロ百種の肉慾、罪惡を列擧し、之を行ふものを稱して「死罪に當るべきもの」

といひ、又かゝる邪惡を行ふものゝ友につきて、「凡此等を行ふ者は死罪に當るべき神の判定を知て」云々といへり、是れ其意いかに惡人と雖も、神が自己の當然受くべき死を己に加へ玉ふとき、其良心神の義なることを保證すといふに外ならず、

且パウロ一般の人間に語りて曰く、「此の如く行ふものを罪する神の審判は眞理に合へりと我儕は知る」(羅二〇二)と、彼又いふ、もし人神の豐富なる仁慈、寛容、恒忍を蔑視し、其情を頑硬にして悔改めずんば、神の怒の日、神の正義なる審判の啓示の日に對して、自己の爲に神怒を積むものなり、しかして神は人々の行爲によりて之に報ひ、爭鬪を好み、眞理に從はずして不義に從ふものには神の憤怒、患難、辛苦を以て報ふべく且こは苟も惡を行ふものには悉く及ぶなり(羅二〇四―九)と、是れ豈にパウロ人の自ら己を死罪に當るものとなすことを說くものにあらずや、吾人は知る、(創世記二〇十一及三〇十九)死なるものは素と罪に加へたるものにして人は皆罪を犯したるが故に、死は萬人に及べることを(羅馬五〇十二―十四)、吾人は此く萬人に及べる死を解して肉體の死と看做すべきか、默示錄二章十一節及び二十章十四、十五の兩節によれば、墓より復活せしめられ身體を具へて神の前に立たしめられたる人に及ぶの死あることを見る、キリストは馬太傳廿五章四十六節に、永生に對する永遠の罰あることを語り、約翰傳五章廿九節に於ては、身體を具へて復活し以て審判を受くることを說き玉ふ、神が惡を行ひ、罪を犯して悔めざるものを審判し玉ふといふは他の世界に於て人が其存在を繼續すること能はずといふにあらずして、其眞正の生命たるものを失ふといふの意なり、されば、こそキリストは、其(物質上又肉體上の)生命を尊重するに過ぐる人は、其(眞正の)生命を失ふことを敎へ玉へり(馬太傳十六〇廿四―廿六)、又身體の復活後に存する眞正の生命及び他の世界に於ける死のことを說きて、人に其罪に死するの危きを警告し玉へり(約八〇廿四)、之とひとしく肉體に於て死せるラザロのことを語り、同じく其肉體に於て早晩死せざるべからざるマルタ及マリヤに對して語り玉ふとき苟くも生きてキリストを信ずるものは死することなしとの保證をなし、以て此兩姉妹及吾人を慰め玉へり(約翰十一〇卅六使徒パウロ(羅六〇二三)死を罪の價なりといひ、又(羅八〇六)肉の事を思ふは死なりとも、又(十三節)肉に隨ひて生活するものは死せざるべからずともいへり、聖徒雅各は(雅各書一〇十五)罪全く成長せば死を生むといひたり、

右に列擧せる死の警戒たる吾人は之を以て全く悔改めずして罪を犯して止めざる人に神の怒怒によりて加へらるべき第二の死の恐るべき警戒と爲さゝるを得ず、

然らば愛なるものは啻に抽象的に罪といふものに對してのみならず、罪人其者に對しても怒怒の念を發し得べきや、即ち悔改めざる者を神の面前より放逐し、かの外部の暗黑と稱せらるゝ場所若くは狀態に置する怒怒の念を發し得べきや、如何、かの道を說くに方り、罪人をして神の愛を感せしむる樣務むるの人は實に其道を說くの宜を得たるものなり、何となれば人の最後に罰せらるゝその唯一の理由は、其神愛を拒絕し、神愛を惡むにあればなり、然りと雖もかの神愛を以て、悔改めずして罪を犯し毫も渝ることなき人に對して悲哀を感ずるのみと爲し、嫌惡、憤怒の情を發するものと爲さゝる人に至りては、吾人其大誤謬に陷るものなるを信ずるのみならず、實に生死に關する誤謬に陷るものなるを信ぜずんばあらず、固より神の愛は確定論示せられざるべからず、かくするは至重至要の事なり、且つ第二の死の慘狀たる頗る甚しきものありて、もし之を描くに不注意なるか、又は之を宣言するに、悲悼憐憫の情を以てせざるが如きことあらば、此かることを聞く罪人はいよ〳〵其神に反するの念を强め、之に叛くの情を增すべきのみ、何となれば吾人もし神の震怒の警戒を宣言するに方りて、不注意なるか若くは愛の情を欠くときは、たゞ罪人をして神の愛にあらざることを確信せしむるのみなるべく、しかしてもし吾人神の愛を現示すること能はずんば、罪人をして自から省み、神は神愛の爲し得る限り自己の救濟の爲めに一切のことを爲し玉へることを認め、かくて自ら其非を悟り其良心に於て神を尤むることなからしむること能はざるべければなり、世或は神の愛の啓示の神性の至要至本の啓示なることを現示、主張せんとの極めて自然にして又正當なる願よりして、福音を宣べ傳ふるの職を帶ぶるものゝうち、第二の死を說くに方り、その神の震怒の罪人に加へらるゝことなるを言はずして、人をして神を愛するの能力を欠かしめ、隨て生命を斃ぐこと能はざらしむる罪の必至の傾向の結果なることを語り、外部の暗黑若くは火焰の海に投ぜらるゝといふことは、人が罪を犯して悔めざるより自ら「自己の場所」(使徒行傳一〇廿五)となり、自己に適當せる唯一のものとなりたるかの一種の狀態に陷ることを指すに外ならずと敎

ふるものあり、

眞に然り、吾人も亦第二の死は、人の心中に驅除、破壞せられずして存する罪の必然にして免るべからざる傾向なるを信ず、されば之吾人前編(第八)に於て、かくの如くして存する罪と神の愛とは相反し、相衝突するものなること、神は頑然として神子たるを拒絶する人に神子たるものゝ榮光なる自由を之に與ふること能はざるを論示したりき、

然りと雖も之と同時に、罪人に對する神の震怒なるものは、神が自ら與へ玉ひし啓示の一部分にてあるなり、

何となれば人が罪を犯して悔改むることをなさず、罪を以て其生涯の必要法となしたるが爲め永生を失ふといふことも、此かる罪人が自己の生存に唯一適當のところとなれる外部の暗黑に投ぜらるゝといふことも、眞理なるに相違なけれども、此眞理たる、他の眞理即ち此かる罪人が永生を失ふは神の震怒其上に及ぶが爲なりとの道理を埋沒するものにはあらざればなり、反て零落者に對する場所若くは狀態が此かる罪人に取りて唯一適當の住所なりといふことは、此場所に於て神の

震怒彼の上に及ぶものなりとの思想を無用ならしめざるのみならず、寧ろ此かる震怒あることを暗示するものなりと謂はざるべからず、

何となれば神の心は其思念する物の性質に隨ひて働かざるべからざればなり、しかしてもし吾人、人は零落者の境に在り、そは人自ら之を自己の唯一適當の住所となしたればなりといはゞ、是れ取りも直さず、神の震怒の此人の上に加はり居ることを語るものにあらずや、そは神の心、善よりも寧ろ惡を擇び、生よりも寧ろ死を擇びたる人の性に隨ひて働き、此かる人に對して道義上の嫌忌、嚴格なる厭惡の感なきを得ざればなり、しかして此嫌惡、此厭忌は即ち人に對する神の怒にてあるなり、そは自ら進んで惡魔及び惡鬼の列に入り其惡魔及び惡鬼と共に數へられざるを得ざるに至りたる人はまことに罰せらるべきものと謂はざるを得ざればなり、吾人が罰せらるべしといふは、人が薄弱なりしが爲めにあらず、又は人罪ある性質を具へて世に生れたる(第一の人神を離れて墮落したるが爲め)が爲めにもあらず、全く神が其聖靈の感化によりて人と共に働き、人を感動し、人を助けて善を擇ばしめ玉ふにも係らず、人は反て惡を擇びたるが爲めなりとす、吾人が罰せらるべきとい

ふは、神がかの世界に來る凡ての人を照す光たる者を以て人に光を與へ玉ひしに人光を舍てゝ暗黑を愛したるが爲めなり、吾人が罰せらるべきといふは、人をして聖潔に、以て神と俱に永へに光の中に住ましめんが爲め、出來得る丈けのことを悉く爲せし神愛を意に介せず、自暴自棄せるが爲めなりとす、然り神自ら人の生を採り聖を擇ぶことを懇望し玉ふにも關らず、反て罪を擇み、死を採りたるものゝ上に、神の愛の震怒臨むべきは正當至極のことなり、そは此かる人に懇望し玉ひし神は彼等を愛し玉へり、しかして神が彼等をして送らしめんと欲し玉ひし生涯は聖の生涯にして、聖の生涯の元精は愛の生涯に外ならざればなり、其隣人を愛するものは、律法を遂げ、しかして愛は律法を成就するものなりと錄されたるにあらずや(羅馬書十三〇八ー十一)、又神を愛し、人を愛することは、神が人に要め玉ふ一切のことの總計にはあらずや(約翰壹四〇七ー十二)されば知るべし、神の罪し玉ふものは道義上愛に反せるものなることを、しかして萬物の幸福、祝福を願ふ愛なるものは、かの自己をも又自己の害することを得若くは自己の惡感化を及ぼすことを得べき他の道義的存在者をも共に悲慘零落の境に陷れて頑として悔ひざるもの(罪)に對する告罪の原理に外ならず、しかりしかして神愛の性たるかれが如くなるを以て、到底悔改めずして依然罪に在るものに對しては震怒と爲らざるを得ざるなり、

之と同時に吾人は又左のことを信ぜざるべからず、(そは神自己をしか啓示し玉ひたればなり)即ち

(八)　神は愛なるが故、憐恤を好み、大罪を犯せるものといへども一も死せずして、萬人皆永生を享くるに至らんことを欲し玉ふこと、是れなり、蓋し憐恤を示すことを得る場合に憐恤を示さんとすることは、愛の自然の性にして、是れ實に愛の悅とするところなりとす、吾人は既に、人は神に對して罪を積み、科を重ね、終に愛の怒を招くに至ることを得といひたり、吾人は此かる語を解するに(此語たる聖書の語なり)、神が其憐恤につきて與へ玉ひし啓示に照して之を爲すべく、しかして神最早憐恤を示し玉ふことなしとせば、是れ憐恤を示すこと能はざるによるものなりと信ぜざるを得ず、蓋し愛は憐恤を悅ぶと雖も罪の極點まで達し悔改むることなきものを赦すこと能はざるやも知れず、否實に赦すこと能はずと啓示せられたり、然りしかして罪人を赦すことを拒み玉ふことは神の憐恤につきて與へ玉へる全體の啓

示の部分として說示せられざるべからず、昔者神の榮光モーゼに啓示せられたるとき、實に右の如くに啓示せられ、しかしてモーゼも神が其品性につきて與へ玉へる啓示を右の如くに見たりき、モーゼ神と特別異常の交通を爲すこと亘久しく、神を知らんとの念極めて熱切なるに及び祈るらく、「願くは汝の榮光を我に示し玉へ」と、

しかして神はモーゼの願に答へて言ひ玉へり、(吾人請ふ注意せん)曰く、「我わがもろ〳〵の善を汝の前に通らしめエホバの名を汝の前に宣ん我は惠んとするものを惠み憐まんとするものを憐むなり」(出埃及記卅三〇十八、十九)と、しかして其約し玉へる榮光の啓示果して與へらるゝに及びて、錄して曰く、「エホバ雲の中にありて降り彼とゝもに其處に立ちてエホバの名を宣たまふ」(出埃及三十四〇五)と、吾人は此啓示の主要の點のモーゼをして一層進んで神の品性を明知せしむるにあることに注意するを要す、エホバは罰すべきものを必ず赦すことをせずと宣へり、さてエホバがかく罰すべきものを赦さずと決意し玉へる其前後の干係如何と問ふに此かる決意たる其憐恤、仁愛の一部分として說き示さるゝを見る、請ふ聖書の語を擧げんか(六、七節)曰く、「エホバ即ち彼の前を過て宣たまはくエホバ、エホバ憐憫あり恩惠あり怒ることの遲く恩惠と眞實との大なる神、恩惠を千代までも施し惡と過と罪とを赦すもの又罰すべき者をば必ず赦すとをせず」と是れなり、人或は曰はん、モーゼ此決意の語を聞きしとき、彼は必ず之を解して、神は罪の現世的結果より人を濟ふことをせず、其結果を三、四代に至るまで無辜の子孫に報ふべしとの意を有するものとせしこと疑なしと、吾人は答へていふべし、誠に然りと、然れども「罰せらるべきものを必ず赦さゞるべし」といふ語の當時使用せられたるとき、特に如何なる意味を有せしやは今吾人の問ふところにあらず、吾人が今此出來事を引きて例證せんとするところは、末日に至り罰せらるべきものを赦すを拒むといふことが、仁愛、眞實に充ち、恩惠を悅ぶものなりとて神が自已につきて授けたまふ啓示の一部分なることに在りて存す、第二の死を加ふるまでに及ぶなる神の震怒といふことは、恐るべきことには相違なし、然れども此事たる、吾人に對して明々白々に啓示せられて毫も疑を容るべきところなきものにして、吾人は到底此事實を看過することを能はず、然りと雖も吾人神の震怒に關する此特別の啓示を受くるや、其憐恤に關

する一層廣大なる啓示と相和して之を受くるが故に、神はよし怒を發するの止を得ざるあるべしと雖も、畢竟憐恤を垂るゝことは其悅び玉ふところなりとの眞理を深く心に留むることを得べし、

果して然らば人既に罪に陷り、信を失ひたるのみならず、其子たるものゝ有すべき情すらも失ふまでに至りたりとせんに、神は其罪を赦し、其心裡に働きて、其心中に子たるものゝ精神を回復すること能はざるべきや、人或はいはん、吾人は罪の元精の惡傾向につきて以上に云々せられたること、即ちもし罪を驅除せずして人心の裡に存在せしめんには到底人をして神の眞正の子たらしむること能はず、髓て(罪もしかく心裡に存せんには)人をして永生を享けしむること叶ふまじきことを認む、加之吾人は罪が人より驅除せられ、人をして子情を有するに至らしめ、以て行爲に於ても、賊心に於ても、神の子たるに適するものとならしむるは、惟り降生即ち聖靈によりて罪人の間に寄らんが爲め與へられたるキリストによることを信ず、然れども、もし神、人の罪を赦すことさへなし玉はんには、獨生子の與へられず、聖靈の與へられず、聖と平和との伴臨する永生の與へられざること安にある、罪人に對して贖を爲さずんば、之に對して降生もなく、聖靈の賜もなく永生もなしといふか、キリスト死するにあらずんば神は罪を赦すことを得ざるか、赦罪は神に取りて困難の業か、赦罪は神がいや〳〵ながらに授け玉ふものなるかと、吾人は此難問に對して、第一、否と答へんとす、赦罪は神に取りて困難なるものにあらず、神が授くるに懶とし、又躊躇し玉ふものにはあらず、罪に對し其怒を發し玉ふ神は又其憐恤を示し、赦すことを悅ひ玉ふといふこと、これ豈に吾人が上來主張せんとて務めたるところにあらずや且つキリストは死したるに相違なきも、神は實際罪を赦し玉ひしにあらずや、それ終極まで悔改めざるの人は萬世の痛苦を受くべし、しかして全世界の人が受くべき此一切の痛苦をキリストが悲痛、爭鬪の生涯の終となりたるかの數時間の苦楚によりて受けたりとは、是れ吾人の瞬間も信ずること能はざる所なり、キリストは十字架上に自己を供へて贖を爲し玉ひたるに相違なしといへども、神はたしかに罪を赦し玉ひたるのみならず、實に豐かに罪を赦し玉ひたるなり、キリストは苦痛を受け玉ひしに相違なし、然れども神は吾人の罪の結果なる苦痛を其罪と比較して十分なる迄に量り、以てキリストと吾人とに之を加ふるが如きこと

を爲し玉はざりき、神はキリストに加ふるに其本性に於て頗る恐るべく、吾人が恭しく怖れ戰きて以て思念すべく、神の聖と愛とのしかく大なる顯示に相當せる尊崇を以て冥想すべき一種のものを以てし玉ひたり、しかして吾人に至りては、神は全く何の加ふるものなくして之を救し玉ふ、神の子キリスト十字架上に於て極めて大なる靈性上の荒涼を感じ玉ひしが爲め、人間たるもの瞬間と雖も此荒涼の情より來る辛酸を嘗むることを要せざるに至れり、さてキリストの苦痛の性質は之を如何なりとするもキリストは仁惠、慈愛に充ち、豊かに救さんとを望み玉ふ神の眼に必要と見ゆる以上の苦を受け玉はざりしとは明かなり、然りキリスト苦痛を受け玉ひしには相違なきも其十字架は神の救罪を明示したるにあらずや、然れども世或は尚ほ、神の救罪の豊かに吾人に注がれんが爲めキリストの苦、み玉ふことの必要なるを信ぜず、吾人が罪の救免と之に伴ふ一切の他の福祉を享くるは、惟りキリストの死によることを疑ふものあらんか、吾人は本書に於て論示せんと務めつゝあるが如く、自己を人に賜はんと欲し玉ふ神は一個の眞理を人に顯示するの必要を有し玉ふことを此かる人に指示せざるべからず、其眞理とは何ぞや、曰く神、

人が其罪によりて享有の權を失ひたる祝福を人に與へんとの聖旨を繼續することを得んには、如何なるものを必要とするかを自ら啓示し玉はざるべからず、しかして吾人が失ひたる一切のものを回復して吾人の有とするものはキリストの死なりといふこと、即ち是れなり、キリストの死の結果につきて神の與へ玉へる啓示は堅固なる立脚地なり、神が其心意を明示し玉へる其顯示の上に占めたる位置は牢くして拔くべからざるものなり、吾人は後に至りて聖書の語を引照し以て之を證すべしと雖も、吾人が左の如く信ずるは尤も道理に合するものなるを見ずんばあらず、即ち

（二）神は其被造者の罪を救すに方り、一切の造られたる道義、靈性的、睿智者の前に、自己の義を顯示せんことを欲し玉ふべしといふと、是れなり、何となれば吾人は神に叛きたるものなればなり、吾人は（一般人間につきていふ）神の眞理を代へて虛僞となし、吾人自己若くは吾人の指もて作れる者を神とし、創造主は永へに讃むべきものなるに、創造主よりも寧ろ被造物を拜み、之に事へたり、吾人は憎惡を逞くし互に相憎み、其心にて神に敵す、もし神の恩惠と能力なかりせば、吾人の自然の終局は

苟くも眞なるもの、苟くも美なるもの苟くも善なるものに道義上反對し、頑然として動かざるに至るの外なけん、然るに神は此叛逆背信の罪を看過して、人を其手もて造れる萬物、天の執政者及權威者の上に位せしめんと欲し玉ふ、約言せば、人となされたる神の子に人を合せしめ、かくて之を神に合せしめんと欲み玉ふ、蓋し是れ神の啓示によりて考ふるときは、聖にして墮落せざる天使、ケラビムもセラビムも享くること能はざるの榮光にてあるなり、

論者もし難じて、吾人の罪と背信との故を以て何人か之が爲めに苦まざるを得ざる理由安くに在るといひ、又難して、もし受苦にして神の愛の心より人を醫せんが爲め懲戒を施し玉ふに必要なるものなりとせば、何が故にキリストの受苦は神が罪を赦すことを得又救すことを欲し玉ふ唯一の基礎なりやと詰り又論じて、成程吾人は罪を犯したるに相違なく、極めて大なる罪を犯したるに相違なし、されど神は愛なり、愛は憐恤を示すべき基礎を要求するものなるか、愛はたゞ其愛なるが故に、いかほどの罪科にても罰することなくして之を救すものにはあらざるか、愛は憐恤を垂れ救罪を與ふるに、此他いかなる基礎を要するやと言はんか、論者が此く

難問を重ぬると同時に、聖なる天使は又以下の如き疑問を發するとはなかるべきか、(蓋し天使と雖も亦神及び神の道の知識に於て進歩を要すればなり、以弗所書三〇十、彼得前書一〇十二)曰く、神の義といふことは此かる救罪を行ふことの謂なるか、背信の自然の結末は焰の海なり、キリストと俱に其位に坐し彼と共に萬物を支配するの權を享くることにはあらずと、天使は愕然として問ふなるべし、此かる救罪は神の義と調和するものなりや、又もし墮落せる人にしてたゞ神の愛のみ聞き、其義を聞かずとせば、誰か人愛に慣れて之を蔑にせざることを保證し得る者ぞと、然れどもし人の罪に對して供物、即ち人の罪及び人が犯したる神の威嚴の大なるに相當せる震怒、品位の供物の献ぜられたるありとせんか、もし神の子たるものの此供物となり玉へりとせんか、豈に萬人よろしく口を緘ち、神の義に對して怨罵するを止むべきことにあらずや、是れ豈に自然の結果として第二の死を生ずる罪に對して神の思想の輕からざるを示すものにあらずや、是れ豈に此かる怖るべき阪を下るものに對して神の怒り玉ふことの正義なるを示すものにあらずや、且つや是れ神は其被造者を憐ひ救罪と憐恤を之に授けんと切願し玉ふにも關らず、實に

此愛を有し玉ふが故に、其義を顯示し玉はざるを得ざるとを示すものにあらずして何ぞや、神の義は其愛に欠くべからざる元素にてあり、神の被造者、否實に吾人と雖も、神を義なりと信ずるにあらずんば神を愛すといふこと能はず、然れどもキリスト死し玉へり、而して神は自ら義となることも、又イエスを信ずるものを義とすることをも共によくし玉ふ(羅馬書三〇廿六)キリスト自ら吾人の罪の爲めに供物を献げ玉へり、之によりて神は義なることを得又愛なることを得玉へり、キリストに於て義と愛とは共に合し、神の一個の榮光として啓示せらるゝに至れり、

第十　人を贖ひ、人を罪より救ふの榮は全く神のみの有し玉ふところなり、

吾人は第九編の終に於て、神が人の罪科を赦し玉ふに方り、其愛と義と兩ながら之を示し玉ふは、啻に尤も道理に合ふことなるのみならず、又實に必要なるものなることを說けり、一切の被造者を愛し、被造者も亦た愛を以て己の愛に酬ひんことを望み玉ふ神は、此等被造者をして、己が義にして罪を惡み、之を罰し、之を責めずしては舍かざるの決心を有することを信せしめざるべからず、然り而して神は又憐恤を示すことを尤も欲し玉ふなり、加之吾人は神の義の其愛に欠くべからざる元素なることを信ぜざるべからず、即ち神もし義なるにあらざれば、他に對して愛あることを能はず、又他より愛を受くるに足らざるとひとしく、もし神、人間及び其他の道義性を有し、靈性を具ふる睿智者に其愛を示し彼等より愛を以て酬ひられんには、自ら其義を示さゝるべからず、換言せんにもし神人を愛せば、神は人をして己が罪を惡むことを知り且つ感ぜしめざるべからず、神の愛なる品性は神の義なること

を要求するものなり、もし吾人神の愛なることを認めば、又其義なることをも認めざるべからず、されば人其心意に於て神に背き離れたらんに、もし自ら神の愛を承認すると同時に、其義を承認するにあらずんば、よく神に立歸りたりと謂ふことを得ざるべし、神愛なるが故にキリストの死は不必要なりと謂ふ勿れ、もし人キリストの死は其從順、信義、犧牲の精神を示すものなるが故に、此死たる正當にして、道を得たるものなりと思惟せば、是れ固より可なり、されど神愛なればとて、キリストが其死によりて神の義を顯はすの必要なるを拒むことを得べきにあらず、そは神の義の顯示は其愛の顯示に對して必要欠くべからざる手段なればなり、キリストの死の中に神の愛の示されたることを既に見、又尙一層之を見んと欲するの人は、此く欲するが故の爲めに、其死の中に愛と共に義の顯示されたることを見んと欲すべき譯なり

何となれば吾人が既に論ぜる如く、罪は人が神に對し子として有すべき精神を破壞し、隨て神が人に對して有し玉ふ愛の目的を無みするものなればなり、愛もし人に對して其本來祝福の目的を繼續せんと欲せば、罪より人を救はざるべからず、しかしてかく愛が人の爲めに切望して措かざる救罪を遂げんには、左のことの必要なるを見る、即ち

（イ）罪人は其罪の性質の邪惡なることを悟らしめられざるべからず然らばいかにして人は罪の元精の性質の邪惡なることを悟らしめらるゝことを得べきや、罪を犯せば己れに不便を來し、痛苦を來し、悲愛を來すといふことは、何人と雖も容易に之を認むべし、然れども吾人過去幾千年世界の歷史を觀、現在無數の同胞人間の狀態を察し、而して人は容易に罪の惡性を承認し、之を惡み、之を棄つるに躊躇せずといふを得べきか、殊に吾人、人は輙く神を信任し子たるものゝ有する信賴、順從の精神を以て神に還る樣導かれ得るものと謂ひ得べきか、知らずや、此く孝順、愛從の念を以て神に對するを拒むこと、是れ即ち罪の元精、根本にてあることを、否、人は其神より離れ、神に賴らずして立たんとの願望の惡にして實に唯一の惡たることを容易に信ずるものにあらず、罪の元精の邪惡なることは神より啓示せられざるべからず、しかして其啓示せらるゝや、罪に對する神の不興、震怒によらざるべからず、

成程神の怒といふ大打撃は罪人の頭上に墮ちずして、聖潔、無害、無垢のもの、父の愛子にして無量の愛を寄せ玉ふ者の頭上に加へられしに相違なし、されど彼の父なる神は、彼の靈のいたく愛ひて死ぬばかりなるに至るも能く之を忍び、其十字架上に靈性上の荒涼を感じて言ひ難きの憂悶を受くるも、よく之に耐へ玉へり、かの罪人たるもの、神の獨子が罪なくしてかくまで靈性上の慘苦を嘗め玉ふを視るや、茲に始めて罪の本性の果して如何なるものなるやを曉り、しかして罪に對する神の不興、震怒の啓示によりて、其道義的惡性を悟り其當然受くべき神の罰の如何を解するに至る、人既に幾分か罪の惡性を曉知するに至るとせんに、彼が罪より救はれんには尙左のことを要す、即ち

(ロ)　人は罪なるものゝ右の如く惡なることを十分懺悔し、其全幅の精神を擧けて之を排斥し、其全力を盡して之を棄却するを願はざるべからず、且つ

(ハ)　人、神が表示し玉へる其決心の義なることを公然、十分承認せざるべからず、換言せば、苟くも永久に罪の性質を帶ぶるものを神の聖潔なる面前に存せしめじと決し玉ふ神の決意の義なることを十分承認せざるべからざること、是れなり、

吾人の見得る限り、以上の三ケ條は神愛が人を罪より救はんとするに方り、人に要求する條件にして、此條件を具へて始めて人は永久の救濟を得べきなり、世或は誤りて、愛とは義なき恩惠なりと謂ふものあり、是れ義を顧みざる恩惠は惡の黨與たるものにして、惡の黨與たるものは其本性惡にして、是が爲め眞愛の元素たる其性質を失ふものなるを忘れたるものなりとす、吾人は之に反して言ふ、神が以上の三者を人に對して要求するは義なりと、即ち人が罪を其本性上惡なりと悟ること、人が罪を惡なりと懺悔し、之を棄てんと願ひ又志すこと、及び神が永久に罪質を帶ぶるものを其聖潔なる面前に存せしめじと決心し玉ふや其決心の義なることを認むる人に對して要求し玉ふは、是れ義に合するものなりと、借問す、此かる要求は義ならざるか、かゝる義は完全の愛と全然一致するものにあらざるか、吾人はもし人、神が要め玉ふ以上の三者を果すときは、愛が人に對していかに大なることを爲すやを知る(そは吾人は此點に於て啓示を有すればなり)、愛は人の一切の罪過を赦すに毫も困難を發見ぜざるのみならず、此く赦すは其悅とするところなり、愛は既に罪を赦されたる人をして、罪の害毒より實際上免れしめんが爲め、十分なる恩惠

と勢力とを供給す、愛は一たび罪を赦されたる人に對し、罪の力より全く之を免れしめんが爲め全能力を以て之が保證となす、愛は人をして其道義上及靈性上神の像たる眞性を回復せしめ、復び人をして神に合し、神に交らしむ、愛は吾人が現に有する疾病、朽死の運に遇ふが如き身體に代へて罪を赦されたる人に與ふるに不朽不死の身體を以てし、神の聖顏に直に接して、其榮光の爲めに眩ずるが如きとなからしむ、愛は人に對して此かるとを爲さんと欲し、しかして實に墮落し、信仰を失へるものに對して、之を爲さんと志してあるなり、それ愛は傲慢、反逆の精神を有するものゝ名譽、榮光、不死の福を享けて神と俱に住むべからざることを宣言す、又子たるものゝ有すべき精神を有せざるものは、神の尊重し玉ふものとして且つ主イエスと共に神の政治を主らしむべきものとして、天の家族に入れられざることを宜言す、しからば愛が此く宜言するの故に其愛たる所以に背くべきか、愛は人心に存する罪なるものゝ其福祉を亨くべき一切の望を破壞すべき毒惡なるを知るが故に、人をして、必ず罪の商性を知らしめざるべからずと謂ふ、是れ果して愛の愛たる所以に反するものなるか、吾人は又神は人をして罪の惡たることを懺悔せしめ、若くは全心を盡して之を排斥せしむることを要せずと謂ふべきか、罪とは即ち人をして神の子たる福祉を亨くること能はざらしむるものにあらずや、然らば神が右の如きことを要せずといふは、是れ即ち神は人を祝せずして止むも可なりと謂ひ、神の子たる榮光を享けしめんとて造られたる被造者をして永へに滅せしめ、しかして晏然其意に滿つるも、愛の愛たる所以を矢はずといふに外ならず、且つや愛にして人の其義を承認せんことを要求するとせんに、そは不義のことにてあるか、人の天より排除せらるゝは、人をして神と聖なる存在を俱にするに堪へざらしむる其罪性による、(勿論此は人が其罪を犯して悔ゆることなき場合を謂ふ、)且つ人の此く天より驅除せらるゝは、かの愛に背き、罪深くも永遠の善を擇ばずして永遠の惡を撰びたるものに對して、神愛が儼乎道義的厭惡の念を發するあるによる、借問す、愛にしてもし愛の敵を天の家族外に驅除し、之に相當せる住所を之に配與せりとせば、之によりて其愛たる性を失ふものなりや否や、約言せんに、神が全宇宙を通じて愛の主權を維持せんとの決心を有して動き玉はざるは不義なりや否や、神は愛に與す、神にして愛の敵は己の敵なりと宣言し、又己の敵たり且つ其愛に基ける支

配に反するものなるが故、己と俱に榮光の中に住すること能はずと宣言し玉ふとせんに、神は果して不義の宣言をなすものなりや否や、

蓋し神人を祝するに方り、某の條件を人に對して要め玉ふ、吾人神の品性を此方面のみより觀るときは、是れ神の義の啓示に外ならずとす、然れども、もし愛にして愛たり、罪にして惡にてあらんには、請ふ吾人をして衷心より白狀せしめよ、人の神に祝せられんが爲め必要事として、所謂條件を全ふすべしと神の命じ玉ひ、人此條件を全ふせば之を祝し、之を全ふせざれば之を祝せずと宣ひしは、たゞに神に取りて義なるのみならず、實に其愛を顯はすものに外ならず、

然らば則ち人はいかにして神の要め玉ふところに應ずべきや、神は果して人が正當に若くは甘んじて行ふこと能はざることを人に強ふるものにてはなきや、罪の惡なることを認めざるべからずとの要求は義なるに相違なし、然れども人心もし暗く且傲りて罪の惡性を覺らずとせば如何、否よし罪を善として實際尊ぶまでに至らずとも、之を悔むのみに止まり、若くは之を輕く考へ、若くは之を人性の免るべからざる弱點、其限ある知識、能力の必然の結果と稱じて、自己の罪の責を神に歸せんとするあらば如何、

且つや神、人の完全に其罪を懺悔し、全心を擧げて之を排斥するを要求し玉ふも亦義なるに相違なし、然れども、もし人完全に罪の根性の惡なるを覺らずんば、完全に罪を懺悔することなかるべし、將た罪の眞性を明にせず若くは罪の誘惑に心靈上隷從するよりして、衷心より罪を排斥するの能力を有せざる場合もあらん、神が罪に對する自己の態度の義なるを承認すべしと要求し玉ふは義なり、然れども人其心意に於て罪に愛着し之を排棄するを欲せずんば、神が罪に合して之を離れざるものをして永生を嗣がしめじと明かに決意し玉ふとき、其決意の義なることを認むるを肯んぜざるべし、かゝる人は罪を犯して悔めず、神を義とせずして反て己を義とせんと力むべきのみ、

されば明かに見るべし、神も人も各其爲すべき業を有することを、

罪を赦すは是れ神なり、淨むることをするも亦神なり、全能力を擔保として吾人を保護し、全智を以て吾人を導くものは神より、吾人に其愛と能力とを與へんと誓ひ、

又最も低く墮落せる人間を上げて、尤も高き天の統治及祝福を享けしめ、以て其恩惠の榮光を顯はすを願ふものも亦神なり、此かることの惟り神の業たることに至ては、明白にして疑ふべくもあらず、

然れども人も亦た爲すべきの業を有す、罪の惡のいかに大なるかを十分感ぜしめらるべきは人なり、吾人の生命たる神に反きて犯したる惡を懺悔せざるべからざるも亦人なり、其罪を懺悔し、其心より之を排棄せざるべからざるも人なり、苟くも永久罪の性を帶ぶるものを神の聖なる面前に存せしめじと斷乎して決する神愛の義なることを悟り且自狀せざるべからざるも亦人なり、苟くも人たるもの此くせざるべからざるの理明白なることに至りては、神人彼此相同じとす、

然るにもし罪人がよりて以て最後に父の榮光の聖前に欠くるところなく推薦せらるべき條件として果さゞるべからざる右の大業にして――此事業を以て神の果し玉ふべきものと見做すも、はた人の果さゞるべからざるものと見做すも、兎も角ももし此大業を神惟り果し玉ひ、しかしてたゞ神にのみ一切の榮光を歸すべきことゝなりたりとせば如何、吾人ははた之を何と謂ふべきや、

神は固よりたゞ神のみ能くするを得べきことを行ひ玉ふべし、全能の力は神のものにして、たゞ神のみ能く之を使用することを得、然れども神は果して人の行はざるべからざることを行ひ得べきや如何、かの罪の惡を悟り且つ感ぜざるべからざるものは人なり、罪を懺悔し之を棄絶せざるべからざるは人なり、神の罪に對する態度の義なることを公然、十分に認めざるべからざるも亦人なり、然るに罪人が正當に罪の惡を實悟（リアライズ）することなきが如きこともあるべく、また十分罪の惡を悟らざるより十分之を懺悔し、若くは衷心より之を棄絶することなかるべく其意志罪に合して冒て之を悛めんとせず、神を義とするよりも寧ろ己を義とせんと務むるが如きこともあるべし、もし人の實狀此の如くならんか、人一たび墮落したらんには、終に永遠の榮光に到達するの望安に在るべき、

此問題たる無限の意味を有する結果を其中に包含す、しかして苟くも吾人々間の才智を以て解釋すること能はざりしならんに、神は此に答辨を與へ玉へり、然り而して神のキリストは實に其答辨にてあるなりそは智と識卽ち神の智と識との一

切の實はキリストの中に藏れあればなり、しかしてキリストは吾人に對して神の智慧とせられ、又神の勢力とせられたるなり、キリストは神の勢力なり、何となればキリストを通して神は罪を赦されたる人の爲めに其全能力を發揮し、人の陷りたる惡より全く之を濟ひ玉へばなり、キリストは神の智慧なり、何となれば神は之によりて、キリスト徹りせば望む可らざるとを人に要めてしかも義とせられ玉へばなり、既に然らば神、人に對し、其赦罪を得、隨て罪の力より濟はれ、永生を享くるに先ち、必要條件として大業を要め玉ふとも、何の不可かあらん、罪人は神が其義に基き人に對して要め玉ふ所を遂ぐると能はず、されども此は罪なき「人」によりて遂げらるべし、一個の「人」(よし罪なきにもせよ)神が人間に要め玉ふとを果すべし、しかして神は此「一人」の業を萬人の行へるものとして、容れ玉ふべし、そは此「一人」の行へる所のと、其結果、利益萬人の心裡に刻し、萬人に及ぼすとを得べければなり、もし神萬人に要め玉ふと「人」によりて遂げられたりとせば、吾人は何故一切の榮光を神に歸せざるべからざるや、曰く、そは萬人の業を自ら行ひ、且つ自ら「人」にてありし「彼」は又神にてあり、人の子なれども又神の子たり、眞實の人たれども又眞實の神たればなり、

第十一　キリストは罪無かりしと雖も罪の辛苦を嘗むることを得たまへり（甲）

使徒聖パウロ其羅馬書十一章三十三節に、叫びて曰く、「アヽ神の智と識の富は深かなと」、然り而して吾人神が人の名に於て、又人の爲めに、神の義の要求してしかして其要求を充たすこと能はざりしことを爲し玉ふを見るときは、轉たパウロと共に右の如く叫ばざるを得ざるなり、神既に吾人の爲めに自ら吾人の救濟を行ひ玉へり、されば之を行へるものにあらず」と言ふを得す、何となれば神之を行ひたるに相違なしと且つや人難して、「もし神其人に對して要求することを自ら行ひたりとせば、是れ人雖も、之を行ひしは「人」によれるものなればなり、測るべからざる神智によりて神の「ことば」は肉となれり、「神は其生み玉へる獨子を賜ふほどに世の人を愛し玉へり、是れ彼を信ずるものに滅ぶることなくして永生を受けしめんが爲なり」、神は實に其獨生子を吾人に與へ玉へり、神は之をして神たるを失はしめず、しかも又「人」として

之を與へ玉へり、かるが故に彼は吾人々間の有たるなり「人」として吾人は彼を吾人のものと思ふの權利を有す、吾人の中の一人(固より價値、品位、權威、榮光無限に吾人に超越するに相違なし、しかもつまるところ吾人々間の一人)神の義が吾人に要求するところのことを行ひ了せり、是れ「人」神が人に要求し玉ふことを行ひたるものにあらずや、さらば神假なしに人を救し、其罰を除き其罪を免すことを得べきにあらずや、然り、神は其愛によりて此くすることを得べし、然り而して是れ實に神のなし玉へるところにてあるなり、

吾人は後に至り(第十五編)神が一人の行へるところによりて萬人を救すは正當にして其神智を妨げざることを示さんとす、蓋し神の與へ玉へる「彼」を心より受くるものは、其罪を忌み惡むの情に於て神と全く同一なるに至るべく、罪の根元相當の時に及べは全く其心理より破壞され了すべく、其害毒も亦然るべく、終に神の聖義なるが如く、人も亦聖義なるに至るべし、かくて人は光の中に在る聖徒の嗣業を享くるに足るものとせられ、又かく萬衆に認めらるゝに至るべし、しかるが故に神は「一人」の爲めに萬人を救すも、其神智を累はすことなしとす、吾人は後に至りて之を

論示せん、今は他の疑問吾人の注意を要求す、しかして吾人先づ之を論究せざるを得ず、

所謂疑問とは何ぞ曰くキリストの如き聖潔なる者にして聖潔なる人に對して神の要求し玉ふことならで、不聖不潔なる人に對して要求し玉ふことを行ふことは如何で出來得べきや、キリストは罪なかりき、然るに人は罪ありき且つ現に罪あるなり、蓋し罪なき者と雖も、罪の根本の性質を知り、其一般人間に及ぼす慘害を觀、以て罪の惡を感得することを得べし、そは之を了解するに難きことにはあらず、然れども自ら罪を犯したることなき者にして眞實の意味に於て罪を懺悔することを得べきか、一たびも其胸裡に罪といふものを懷きたることなき者にして、罪を排棄除去することを得べきか、否、罪なき者にして罪の苦辛の元精を嘗むることを得べきか、罪の苦辛の元精とはそも何ぞ、是れ豈に神の面前より正當に放逐せられ、其面前より驅逐せらるゝは神に對して犯せる罪の公明、正大なる應報なりと感じ、認むることにあらずや、もしキリストにして吾人が信ずる如き者にてありしならば即ち父の意に合するもの(馬太傳三〇十七)にてありしならんには、神の悅び玉はぬと

いふ念の其心中に發して苦み玉ふことはいかにしてあり得べきか、もし吾人の知る如くキリストは常に父の悅び玉ふことを行ひ(約八〇廿九)、しかして其十字架上に苦みたまひしときほど父の心を悅ばせ玉ひしことなかりしとせば、果して彼は神の面前より正當に驅逐せられたりとの感を發することを得玉ひしか、一見するときはかゝる事は一切出來得べからざることの如く思はれん、然れども知らずや、聖書は錄して、人の能はざるところも神には能はざることなしといふことをキリストは自ら罪なかりしに相違なしと雖も、眞實に罪を懺悔し、眞實に衷心より罪を排棄し、眞實に神の面前より正當に放逐せられたりとの悲感を實驗することを得玉ひしなり、然り而してキリストが此くすることを得玉ひしは、畢竟罪を犯せる他人と自己とを眞實に同一視することを得玉ひたるが故なりとす、純粹なる人間の愛情を以てするも、自己は幸福の中にありながら甘んじて他の愛苦、患難に沈めるものと運命を俱にするあるは、吾人の聞知するところにあらずや、自ら好運に遭遇しながら他人の悲痛を己の悲痛の如く感じ、他人の凶禍を憂ふるよりして自己の災厄の中にあらざることを忘るゝ人あるも亦吾人の耳にするところにあらずや、自己

專有の好運を快く棄て、斷然同胞と自己とを一視し、如何なる命運に逢遭するも之を俱にし、吉祥、福樂來らんか、固より之を俱にすべく、疾病、貧困至らんか、亦た毫も之を相分つを辭せず、同胞人間の運命是れ即ち我運命なりとの念を以て、世に立つものも亦た世其人あるにあらずや、もし人間にして此く他人と自己とを同一視することを得たりとせば、人と爲れる神の子は自己と吾人とを同一視することを得、吾人の悲痛を自己の悲痛と感じ神愛の全能力を揮ひ、信仰を以て深く神の愛憐に信賴し、吾人の罪に對して神が吾人に加へざるべからずと思念し玉ふ一切のことを自ら負はんと神に請求し玉はざらんや、即ちもし神吾人を放逐し玉はざるを得ずんば、吾人の爲めに放逐せられ、もし吾人死せざるを得ざれば、死し、もし神の意とあれば、吾人の罪の下に、吾人に取りて最も正當なる刑罰の下に、墓に入り、かくて吾人の刑罰(彼自身の刑罰にあらず、そは彼の刑罰なるものは之れなければなり)の除かるゝまで、又神が全世界の罪人の罪を赦し玉ふよりして、キリスト再び死より甦り、吾人の刑罰を身に負ひ、神の義によりて加へらるべき苦楚を悉く身に受けたるが爲め一旦棄て玉ひし其生命を回復し玉ふまで、依然墓中に在ることをなし玉はざら

んや、もし人自己より幸福を享くること少き他人に對して、彼此其運命を同一視することを得たりとせば、人と爲れる神の子は果して吾人と自己とを同一視することを得玉はざるべきか、是れ吾人の問はざるを得ざるところなり、

誰かいふ、彼は能くかくすることを得ず、此く吾人を愛することを得ざるべしと運命を俱にすることを得ざるべしと

夫れキリストは實に罪の爲めに供物となり玉ひしなり、しかして彼は吾人の刑罰を十分身に負ひ、以て神が人を赦し、之を罰せずして罪を免し玉ふも其義たるを失はざることを萬衆に明示し玉へり、しかり而して吾人がこの理を悟了するの深淺はキリストが吾人と自己とを同一視するの能否を悟るの明否如何による、蓋しキリストが罪なくして、しかも罪の苦味の元精を嘗めざるを得玉はざりしことを明知、確信するは頗る至要、至重の問題なりとす、故に吾人は今之を一層詳細に論せざるを得ず、思ふに吾人キリストをして吾人と自己とをしかく同一視するを得せしむるもの如何を考察せんには、庶幾くは聖書にキリストが其苦と死とによりて吾人と自己とを同一視し玉へることを明言するの眞意を一層切に感得するを得んが、

吾人が此に云々する如く、キリストが自己と他人とを同一視することを得玉ひしや否やは、固より其人性を眞實に有し玉ひしや否やの問題と相干係す、されば、キリストは全く其同胞たる吾人々間の一人たる人にして、吾人と同一の實驗を經て、吾人々間の經驗を十分知悉し玉ることを何處までも確く信認するは、吾人に取りて極めて必要のことにてあるなり、即ち吾人キリストは吾人と同じく戰ひ、しかして其戰鬪や吾人の戰鬪と同じく激烈なりしこと、キリストは吾人と同じく試誘の苦を感じ玉ひしこと、キリストは試誘の苦を其胸裡に感じて人間の悲憂を知り、又罪に對する悶絶、斷腸の悲情を了し玉へることを確信せざるべからず、但しキリストがかく罪の爲めに痛悼し玉ふといふは、固より自己の罪の爲めにあらずして、彼が愛する同胞たる吾人の罪にてあるが爲め、彼其罪を自己の罪の如く感じ、之が爲めに此く罪の悲憂を感じ玉ひしものとす、吾人は次編(第十二編)に於て、吾等の主が眞正、完全の人と爲され、吾人と同じく人間の生命、性質を具へ玉へること、及び其吾人に對して有し玉ふ愛の大なることを說き、以て主が自己と吾人とを同一視し玉へる

ことを論ぜんとす、然れども吾人は先づ主の信仰の生涯は其吾人と自己とを同一視し玉ふ所以なることを考へざるを得ず、

何となれば吾人の心情を尤も明らかに照らし、吾人をして主が吾人の悲哀を知り、吾人の憂苦を感じ玉ひしことを確認せしむるものは、主の信仰にてあればなり、蓋し主の神性を確信し、毫も之を疑ふことなき人に對する誘惑は、主をして人間普通の實驗と可成相違からしめんとするに在り、成程かゝる人と雖も、福音書に記する如く、主が人として人間と共に起居、動作し、其父母に順ふや、手工に從事し、門弟子を其周圍に集むるや、之と俱に旅行し、之と共に食ひ、眠り、教へ道を說き、萬事に於て人間の如く生活し、毫も吾人と異なるところなかりしを觀ざるにあらず、然れども吾人の知らんと欲するところは茲に止まらざるなり、吾人はキリストの心情が吾人と等しかりしや否やを尤も切に知らんことを望む、何となれば神の前に立つ內部的、心靈的生活の狀態如何といふことは、吾人各自に取りて絕大の干係を有することなればなり、人生の戰鬪は人の靈性中に行はれ、試誘を感ずるも、敗北の悲哀、耻辱を感ずるも、將た提利の喜悅を實驗するも亦靈にてあればなり、予を以て觀れば、主イエスの神性を毫末と雖ども疑はざる吾人にして、もし主が信仰の生涯を送り玉ひしことを十分感得、悟了せんには、他の方法によりて曉得し得るに勝りて深く主の人性を悟り、又主なかりせば吾人の當に受くべきかの恐るべき心靈上の悲憂を十字架上にて主が自ら受くるまでに自己と吾人とを同一視することを得玉へりとの眞理をも、一層明白に領會するを得べし、もし吾人彼の內部的、心靈的生活の信仰の生活たることを確認せんか、罪を除くの外、主が根本上吾人と同一に在ませしことを信ずべく、爭鬪、試錬の生活を送り玉へること、惡魔の攻擊を受け玉へることを信ずべく、しかして其生活や、暗黑の勢力に勝ち、吾人に代りて吾人の罪を負ひ、以て之を贖ふことを得べからしめたることをも亦信ぜざるべからず、

吾人は主の內部的、心靈的生活の信仰の生活ならざる可らざるとを言へり、こは固より此くあらざる可らず、そは唯聖書が主の心內の生活をかく記載するによるのみならず、もし主の神性其內附の屬性なる全能、全知力を以て、主をして信仰の生活を爲す能はざらしめたらんには彼は實驗上よりして吾人の誘惑、試錬を知ると能はず、隨て實際主の有し玉へる資格、即ち完全なる祭司長たるとも吾人の大模範者

たるとも、又人として完全に神を悅ばせ玉へる人たるとも、曾其資格を失ひ玉ふに至るが故なりとす、約言せんに、主もし眞實の神にて在ますと同時に、信仰の生涯を送るとを得べき狀態、境遇に在し玉へるにあらずんば、啻に彼は罪に對して犧牲を獻ぐると能はざるべきのみならず、其人間としての生涯に於て決して他人に對して摸範となるとを得玉はざりしならん、もし彼の生涯元精上吾人と同一の狀態の下に送られたるにあらずんば、換言せんに、もし其生涯にして眞正に人間の生涯にてあらざりしならんには、其生涯いかで吾人の摸範、師表となり得べき、然らば問はん、萬人の送らざるべからざる神の意に合する生涯の唯一、元精の條件とは何ぞや、曰く、信仰是れなり、神を信仰するの生涯は吾人が幔幕の彼側に存する生涯に入るの前、此世の生活を送る間神が吾人各自に要求し玉ふものにてあるなり、然り而して神が信仰の生涯を要め玉ふは、墮落し、犯罪せる吾人に於けるのみにはあらず、アダム未だかの惡運の木實を喰はず、清淨、無垢にして樂園にありし時も、神はアダムに信仰を要求し玉ひき、信仰によりてアダムは惡者の誘惑を斥くべきにてなりき、信仰によりてアダムは義を守り、以て完全なる德に達し、永遠天逸の事物を明視し、

信仰は去りて明知至るのときに及ぶべきにてありき、聖書に語あり、此種の人生につきて歌ふ、曰く、「信仰なくば神を悅すと能はず」(希伯來書十一〇六)と、故に吾人もし主イエス、キリストは實に人間の生涯を送り、吾人の始祖が戰ひて敗れしかの敵を撃ちて之を伏し、神が人間に要求し玉ふも、人間の爲し得ざりしことを爲さんとして世に臨み玉ひしことを信ずべきものとせば、吾人は主が信仰の生涯を送るやうにして此世に來り玉へることを信ぜざるを得ず、信仰なかりしが爲めアダム及びエバは墮落せり、信仰によりて第二のアダムは立てり、不信仰によりて罪は吾人の始祖に入れり、信仰によりてキリストは萬誘萬惑に敵し、之に勝ち玉へり、かの曠野に於て惡魔と拮抗し玉ひしとき、主の武具は神に於ける信仰にてありき、萬種の艱難、殊に神すら之を棄て玉ひしが如き觀あるかの暗黑の時、暗黑の勢力の中に在りて、主を支持せしものも亦信仰にてありしなり、

主イエス、キリストの神性も人性も共に均しく吾人の認むべきところにして、吾人の之を確信するや均しく切に、之を認識するや均しく明かならざるべからず、此兩者彼此互に相侵し、吾人をして其何れをも見失はしむるが如きとあるべからず、何

となればもし吾人獨一完全なる救主の十分且つ明瞭なる榮光を視んと欲せば、此兩者を正當に領會するの要あればなり、

成程キリストは神の獨生子たるが故に其中に神の屬性、即ち全知、全能力を具へ玉ふに相違なし、然れども彼は又人となりたり、而して神を信仰して世を渡るてふ純然たる人間の生活を送り、神を信ずるが爲め自己の中に弱質を來すも之に甘んじ、能力に於ても、知識に於ても制限せられて意に介せず、孝順の情を以て神に信頼し、己に必要なる一切のものを其父に仰ぎ玉ふに至れり、されば聖書が全能、全知力を具へたる神性を主イエスに附し之と同時に神に於ける信仰の生涯てふ人間の生涯を彼に附するは、慥に大秘義を說くものには相違なしと雖も、決して矛盾の敎を爲すものと思ふべからず、然れども論者或は言はん、全知者にして「智慧いや增」ることありといひ(路加傳二〇五二)、全知者にして「學ぶ」(希伯來書五〇八)ことをなすといふは矛盾にあらずや、蓋し全知とは萬物を悉く知るといふの義なり、もし全知者にして其知らざることあることを自白するとせば(馬可傳十三〇三二)、吾人はいかで其語を受くることを得んや、それ信仰なるものゝ元精は、未だ視ざるもの、解せざるものに就て神に信頼することをいふ、信仰とは望むのみにして未だ實化せられざるものに關する靈魂の心內的確信なり、心中の確信と言行とを相一致せしめ、視へざるものを確實のものと思惟することなり(希伯來十一〇一)、聖書はキリストが「弱に由て十字架につけられ」たることを言ふ(哥林多後書十三〇四)、全能者果して弱きことを得べきか、聖書は徹頭徹尾キリストが信仰の生涯を送り、以て神を悅ばせ玉ふことを述ぶ、然れども全知者果して信頼することを得べきか、もしイエス全知者なりとせば、果して彼に對して「視ざるもの」あるべきか、聖書は果して矛盾を說くものにてはなきかと、吾人は此かる難問に對して答て言はん、曰く、否と、

何となれば聖書は實に神の子が元精上信仰の生涯なる此世の生涯を送り玉ふに方りて「己を虛ふし」玉へることを吾人に告ぐればなり(腓立比書二〇七)是れ彼が神にてありながら、其全知、全能力及び其他彼が父と俱に享有する神性を純然棄却せりとの意にあらずして、絕へず神的意志を揮ひ、其人間の生涯の範圍に於ては全能力を抑へて之を用ひず、神の能力を有しながら、之を使用することをなさずして、吾人の如く弱くなれりとの意なりとす、一切の他の存在の範圍に於て全知力を使用

する神の子も其地上の生涯の範圍、即ち吾人の生涯と同しく時間、空間の制限の下に在る其人性の範圍に於ては全知者たる彼も自ら自己を制限し、人間の知り得べく、又知りて至當なること知るを以て自ら足れりとすることを得玉ひたるなり、蓋し人間の試錬の元精如何と尋ぬるに、そは又視るべく又須臾なる事物の中に在りて、永遠なる事物を追求し、永遠なるものは「視へざる」ものなるに係らず、之に對して自己の生涯を支配し、形成することを爲すや否やと人を試み玉ふことに外ならずとす、されば、かの全能者も自ら甘んじて顧弱の生涯を送ることを能くし玉ひたり、かの全知者も絶へず、自己の中に其神的意志を揮ひて自己を制限し、其人性の範圍に於ては信仰によりて生活し、歩み且つ捷利を得るといふが如き狀態の下に自ら甘んじて己を置くことを能くし玉ひたりしなり、

故に吾人は主イエス、キリストの神性を主張すると同時に、又彼が人として送り玉ひし信仰の生涯を主張するに甚だ熱心なるものなり、そは彼は其信仰によりて悪魔に勝ち玉ひたればなり、信仰によりて彼は神を悅ばせ玉へり、信仰によりて彼は完全なる犧牲の羔となり玉へり、一言にして之を云へば、彼の信仰は彼をして完全なる贖罪者たる資格を具へしめたるなりとす、吾人をして其人性の完全なるを明かに領會すればするほど、キリストが自ら罪無きものにてありながら、自ら死して以て實際上よく罪を犯せる吾人と自己とを同一視することを得玉ふの何故なるやをいよいよ明かに曉るに至るべきなり、

第十二　キリストは罪なしと雖も罪の辛苦の元精を嘗むることを得玉へり

キリストが人として有し且つ之によりて以て大勝利を惡魔、罪、死、及び其他一切の吾人の敵に對して得玉ひし信仰なるものは、是れ神の子が眞正なる人間の生涯を送ることを得、又實際送り玉へることを示すものにてあるなり、

吾人は神としてキリストを禮拜するに相違なし、然れども吾人は又眞正なる人間の情愛、同情を有する人として彼を思考するの權を有す、彼は吾人の運命を分享し玉へり、彼は人間の生涯の一切至要の實驗を歷玉へり、自ら人間といふ家族の一員とせられ、神が人間を敎訓、鞭韃するに必要とし玉ふことを一切悉く經驗し玉へり、さればキリストは人として實際上よく他人と自己と同一なりとの感を抱くを得玉ひたるなり、何となれば

(一)我は他人と同一なりとの感情は、神が人間に賦與し玉へる性質の全貫部分と見ゆればなり、蓋し神は全人類に賦與するに一種の統一性を以てし、よりて以て之を連結し玉ふ、成程各人皆別々に本我を具へて神の前に立ち、隨て各自特別の本分を有し、神に對して自ら己の責を帶はざるべからざるに相違なし、然れども人類均しく皆共通の性質を有し、彼此互に相同一にせらる、しかり而して萬人の均しく享有する生命なるものは、是れ一個共通の源泉より流出するところなり、何となれば吾人聖書の敎示によりて現時の人類なるものは其初め同一の父母より出で來れるとを知ればなり、聖徒パウロが「また一の血脈より出でし凡の民を悉く地の全面に住せ」(使徒行傳十七〇廿六)といひしは、疑もなく全人類のアダム、エバの後裔たることを言ひしものなりとす、吾人の始祖は其神より稟けし生命を吾人に傳與せり、固より神は吾人一己〳〵を創造し玉ひしなり、然れども彼は吾人の始祖によりて吾人を創造し玉へり、されば萬人の脈管には一個共通の生命流る、吾人の始祖が有せし生命をば、神の制定に率ひ彼等之を吾人に傳與せり、加之吾人の先祖は其性質を吾人に傳與したり、此性質の傳與あるが爲め、聖書は萬人皆アダムに於て死せりとせいふ、一人の罪によりて罪は凡ての人に及びたり、吾儕の主を除くの外、アダムの時よりして罪は普く行渡れり一個共通の性質即ち同一の染毒、腐敗せる生命萬

人に傳與せられ、萬人の中に播布せられたるが爲め、罪と死とは萬人の間に傳播せらるゝに至りぬ、知るべし、生命と性質との同一なることは全人類世界に眞正の統一を與ふるものなることを、固より罪と死とは此萬人共通性の要素たらざるに相違なしと雖も、罪と死とが普及することは取も直さず萬人の有する性質の同一なることを證するものにあらずして何ぞや、罪と死とは神が吾人を懲罰せんが爲め之を許容し置き玉ふものなれども、之を神愛より出づる善賜とせんとは固より神の志にあらず、然れども吾人が有する生命、性質の共通性に至りては、是れ實に神の善賜たらずんばあらず、然り而して吾人が共通の生命、性質を享有し、以て自他共に有する此同一性を自ら感じ、自ら認めんことは、疑もなく神の目的にてあるなり、神が實際此の如くに吾人を創造し玉へるは、其意吾人をして吾人の兄弟、吾人の同胞に對して同一といふ念を感ぜしめんが爲なりとす、熟々神が人間以外の存在者を創造し玉へるを見るに、其行動の方法之と相異るものあるが如し、吾人の知り得る限り、かの天使なるものは神の創造の聖手より直接に來り、神と天使との間に存する存在者の作用、媒介を須ひずして、神惟り自ら之を造り玉へるが如し、若し夫れ人

に至りては、神此の如く之を創造し玉はざりき、吾人は人間として吾人を父、母、兄、弟、姉妹に結合する情緒あるを知る、神は吾人を家族といふものゝうちに置き玉へり、彼は社會といふものを以て吾人を互に相連結し玉へり、彼は吾人に教ふるに吾人共通の起元を以てしたまへり、彼は千百の方法を以て吾人が相互に有する統一を吾人に啓示し玉ひぬ、蓋し此統一のものたる吾人の全性に通徹するものにして、古往今來人苟くも之を犯すあるときは其罪心必ず恒に之を責めざるはなし、

カイヤがアベルを殺さんとて立上がりし爾來幾多の世代は過ぎ行きぬ、されど古今の讀者苟くもかの大地が其口を開き、兄弟の手を以て注ぎ出せる血を呑み、神と人との不興の面前より之を隱せりとの聖經の紀事を閲し、未だ悚然として怖れざるものはあらず、然り而して古來の歴史中暗黑なる時代に於て、人或は一切他の人間と自己との統一を拒み、若くは其統一を自己の家族、國家、國民、國語の中に限らんと務めざりしにあらずと雖も、神は明に世界を教育し、愈々加々之に與ふるに一切の他の人間、他の國民及び人種の彼此互に相統一せるものなりとの念を以てし玉ふなり、蓋し萬人の間に存する此同一性を認知し、之より生ずる義務、責任を承認す

ることは、是れ神が人に對して要め玉ふところにして、しかも之を要め玉ふや、已が吾人に賦與せる性質に合ふものとして要め玉ふところなりとす、抑も我れ我同胞と同一なりとの念なるものは、吾人性質の尤も高尚なる屬性の一にてあるなり、然り而して主イエスは完全なる人なりしを以て、吾人は彼が他人と自己との同一と次くるところなく充分に感じ玉ひしことを確信せずんばあらず、神が人間に賦與し玉へる性質は主イエスの中に其至高、至全の域に達せり、故に又其各國各民を兄弟と認識し玉ふに於ても、尤も高く發達し、尤も豐富に尤も十全なりしに相違なし、

(二) 吾等の主が他人に對して有し玉ふ自他同一といふ念の大小は、其他人に對して有し玉ふ愛憐の情、及び他人を其罪より救はんとの願の大小と相伴ふべし、吾人は既に神萬人に共通の生命、性質を賦與し、以て相統一せしめ玉ふが故に、此かる統一の念なるものは吾人々性の自然、至當の屬性なることを言ひたり、然るに吾人の心理に存する罪なるものは、發達して極端不正の私慾となり、人間自他同一なりとの念を磨滅しまるの傾向を有す、若し夫れ愛に至ては然らず、愛は其兄弟的同情の範圍を絶ゝず擴張するを以て其本能とす、然り而して眞正の愛を尤も多く有するものは、尤も廣く萬人を其兄弟として認め、尤も深く萬人の需要に對して同感を有するものなりとす、愛は己の利を求めずして、反て他人の福祉、祝福を希ふ、それ主イエスは猶太人として生れ玉へり、しかして其地上に於て教役の務に從事し玉ふや、猶太人民の間にのみ働き玉ひたりき、彼がかく爲し玉ひしは神定の法に率ひしなり、彼はいひ玉へり、「我はイスラエルの家の迷へる羊の外に遣はされず」(馬太傳十五〇廿四)と、彼の教役や、パレスタインなる一小國内に限られたること此の如し、然れども其同情に至りては此く限られたるものにあらざりき彼の愛は廣くして苟くも人の住するを得べき地球の極に及び全人類を悉く包容したりしなり、彼が自ら稱して人の子と謂ひ玉ひしは、よく其性質を表白するものたらずんばあらず、彼は實に萬人の代表者にてあるなり、彼の中には元精上國民的及び地方的のものの毫もこれなくして、普遍的のもの存したりき、何れの人種いづれの時代を問はず、いかほど人々互に意見、感情を異にするも、一たびキリストに對するに至りては、萬人齊しく親近の念を發するに難からざるを感ぜり、かゝる人或は一切他人を捨てゝキリストを奉ずるとはなからんしかれども、自己のものとして之を認め、之を要求する

ことなくんばあらず、何れの國を論ぜず、何れの世を問はず、苟くも人たるもの幾何か德を有せざるものなし、しかれども此德たる彼人に在りて此人になく、よし之あるも未だ完からざるところあるを免れず、獨りキリストの人性に至りては、此かる一切の德を包括して遺すところなき普遍的のものにてありき、他の人間が僅かに一部分を有し、少量を有するところのものゝ全體はキリストの中に發見せられ、しかして其全體の各部は至完、至全の域に達したりき、キリストの人性既に此の如く普遍なり、しかして其愛や亦た之と仝じく普遍にてありしなり、思ふに「人の子」は其人の子にてありたるが爲め、其愛と同情廣く一切の人間に及び之を兄弟として扱ひ玉ひたるに相違なかるべし、しかして其人性の他人に比して一層廣大なるを以て觀れば此く萬人に及ぶ愛と同情も、一層強く且切なるものありしに相違なし、それ神愛は他の人を通じても多少表示せられたり、然れども其十全なる表示を成したるは獨り「人の子」によれり、昔はモーゼ、イスラエルの人民の爲めに神に對し仲保を爲していひけるは「嗚呼此民の罪は大なる罪なり、彼等は自己の爲めに金の神を作れり、然どかなはゞ彼等の罪を救し玉へ、然ずば願くは汝の書したまへる書の中

より吾名を抹さりたまへ」(出埃及記卅二〇卅一、卅三)と、かの異邦人の大使徒も亦た嘗て自己の意中を述べて、其心に憂愁と絶へざるの悲哀あることを語りもし肉につける其兄弟其親戚の爲めとあらば咀はれてキリストに棄てらるゝも其素願なりと言ひたりき(羅馬書九〇一―三)、此等二人の神の偉僕は彼等が有する丈けの愛を悉して奉事せる其主に類するところありと謂つべし、愛によりて彼等は其同邦人の休戚を自己の休戚の如くに感することを得、之が爲めに神の前に歎願するや、恰も自ら己の生命の爲めに哀訴するが如くするを得るまでに、其邦人と自己とを精神の中に一視することを能くしたり、然れどもキリストの愛に至りては之をモーゼ及びパウロの愛に比して一層廣く且深きものあらざるべからず、蓋しキリストは此れ等二人よりも大なる者にて在せばなり、但し此等二人の愛とキリストの愛とは彼此相同しきところありとす、即ち愛の要素たるものを共有することなり、換言せば吾人が上來言へる如く、愛する人をして其愛せらるゝ人の吉凶禍福を自己のことの如く感ぜしむるのみならず、進んで神の聖旨に合し、愛せらるゝ人の厩福の益となる以上は自己の幸福、運命を其人と同ふするを得せしむる能力を